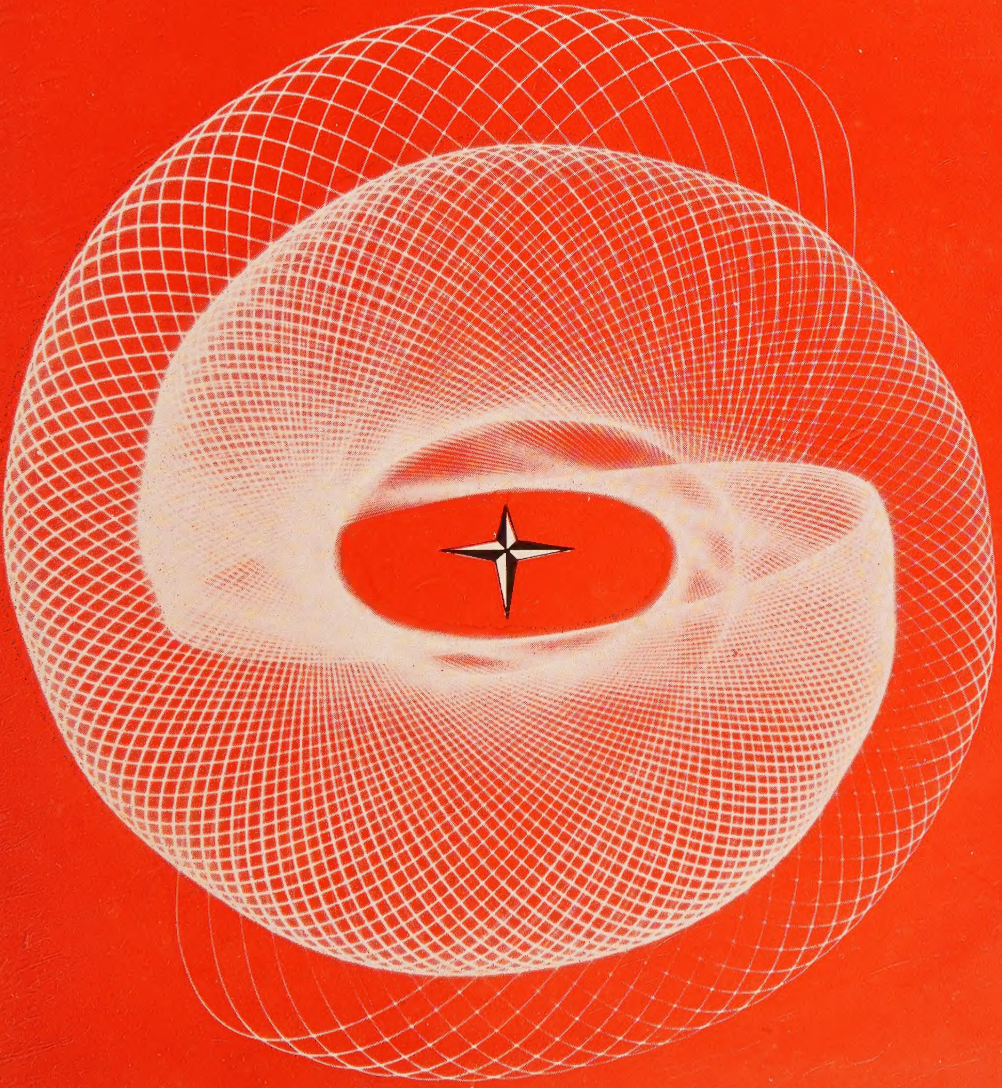
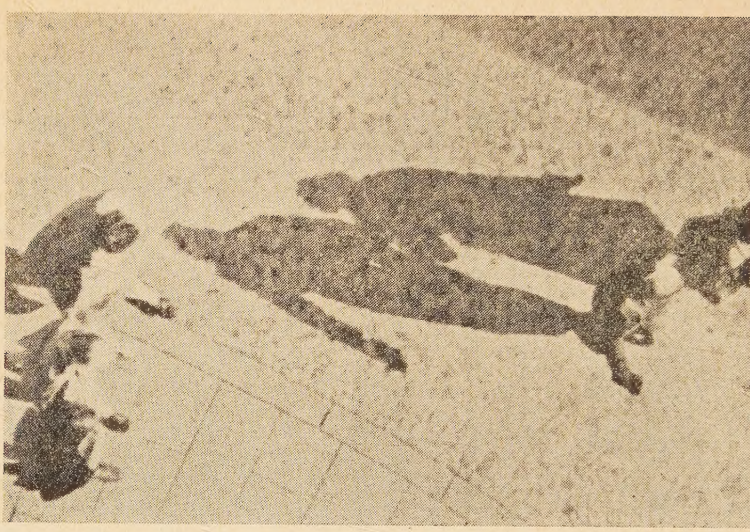
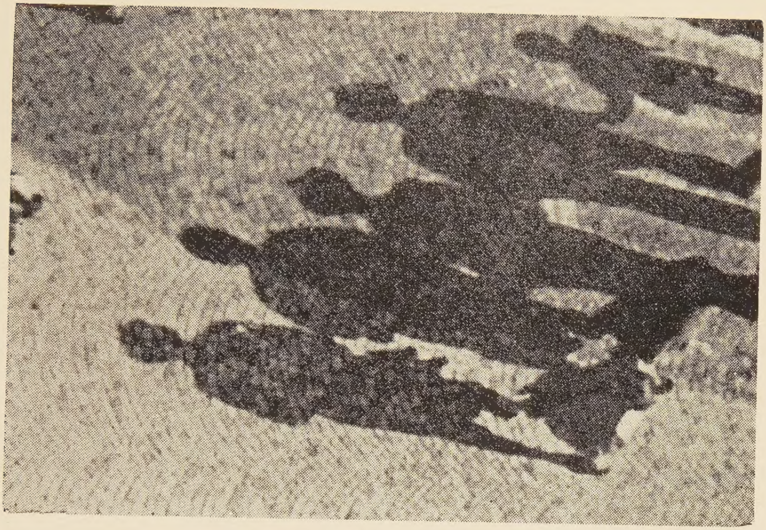
UT OMNES UNUM SINT

学生キリスト者/8

特集　学生として生きる







季刊 学生キリスト者 第八号

（一九六一年十二月）

目次

業者は主としてドイツに留学し、ドイツの学問を日本に導入して来た。一般に明治十年代には英仏の学問が強い影響を日本の思想界、学界に及ぼしていたが、二十年代の半ばをすぎると圧倒的にドイツの学問が殆どあらゆる分野において支配的となった。それには日独両国の社会的諸事情にやゝ似通った点があり、ドイツの学問の方が日本の社会に受入れられ易い諸条件があったことが考えられる。そして、この導入の中心的推進者となったのは帝国大学であった。こうして国立大学の主導権が次第に確立され、また当時十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、英米のそれよりも高い水準をもっていたドイツの学問への高い評価が、日本の学問、学界の一つの伝統を形成することになった。そうなった時に、主として英米へ留学した人々、又英米の宣教師によって推進されていたミッションスクールが、学界における評価において後退していかざるを得ないという事情が加わったのである。

そういう中で、国家の必要とする指導者を養成することを官立大学の中心目的として、一方ではきわめて観念的な、他方では非常に実用主義的な教育が行われることになっていった。従って、国の支配の技術としての法律及び行政の学を教える法学部が官立大学の一つの柱となる。また近代的技術の導入の必要から工学部が大きな比重をもって形成されてくる。そして近代国家を形成するに必要な人材がすぐれたエリートとして養成され、その大部分は官僚となった。法学部のみならず工学部などの出身者も工業行政担当などの官僚となる。又、一部の人は大学に残って研究者、教師となるというような道を選んで、民間会社に入るというのは非常に例外的といえるような情況であった。

c、私立大学と産業社会の発展

明治三十年代になると情勢がかなり変っていった。大体明治三十年代、日清戦争から日露戦争の間の十二、三年が日本における産業革命といわれている。近代的な産業の急速な発展は、それを支える企業の発展を意味する。またその企業の発展は、近代的企業経営を担う人物が必要であること、又そういう人物が供給されたし、供給されねばならないということを意味している。そこで、産業界の人物の養成が三十年代の新しい動向となった。それのみならず、日本なりに市民社会が展開してくると、例えば新聞記者とか弁護士とかの自由職業も多く見られるようになる。こうして市民社会の形成や産業社会の形成に必要な人材の供給が要請され、その社会的需要に応ずべく現われたのが、今日の私立大学であるといえよう。

私立大学、特に東京の大学は明治十年代にスタートしたものが多く、当初は地方の政治的指導者の養成がかなり大きな目的であったが、三十年代になると著しく変化して、産業界に人物を供給していくことが主要な任務となり、またその頃



日本社会における大学

隅谷三喜男

一、歴史的概観

まず、日本の大学が日本の社会の中で、社会のどのような要請を受止めながら展開、変遷してきたかを大きく二つの時期に分けて考えてみよう。

A、明治期（明治及び大正初期における大学という時、こゝでは帝国大学及び旧制専門学校を含めて、一般に高等教育を意味する。）

a、ミッションスクールの先駆的役割

明治の前半期には、帝国大学が次第に形成されつゝあり、その社会的発言力も当時なりにかなり強かつた。しかしこの時期に非常に注目される事実は、ミッションスクール、特に代表的には同志社が日本の文化社会においてもっていた比重が非常に大きかったということである。その意味するところは一つには、欧米の学問をいかに早く摂取するかが近代的な学問の成立における第一歩であった当時において、ミッションスクールの語学の実力が高かったということであり、また一つには、ミッションスクールが帝国大学などに比べて、社会的諸制約、学内の伝統、官僚主義などから自由であり、近代的な学問の成長の一つの条件である自由がそこにはあったということである。ともあれ、ミッションスクールは近代の学問の導入或いは大学の形成という事柄において先駆的な役割を演じた。

b、国立大学の確立とエリートの養成

明治二十年代になると、文部省の学校行政が確立していき、帝国大学のみならず、高等商業、高等工業などの官立学校の形成、充実が急速に推進された。そういう官立学校の卒

間に生れ、新時代の夜明けを告げようとする運動が広汎に影響力をもつようになっていった。初期には、それは直ちに社会主義であったのではなく、むしろデモクラシー運動としてまず展開された。民主主義は日本において明治以来育たなかったわけで、民主主義を旗印にしてドイツに対抗する連合国に加わるという第一次大戦に際してはじめて日本も民主主義を何らかの意味で旗印にせざるを得なくなった時に、特に知識階級の間にデモクラシー運動が起されたのである。それがその後、ロシア革命、ソビエト共和国の成立発展などの影響をうけて次第に社会主義的な運動に転化していった。また、そういう動きの中で基督者達も大きな問題を持ち、そういう運動にある程度参与していった。

明治時代の官立特に帝国大学の学生は、強いエリート意識と、国家権力の担い手となる特権とをもっていたから、国家或いは日本の社会に対する批判はあまり見られなかった。むしろ、在野的精神をもった私立の学生が明治時代における社会主義運動の一方の担い手となったりした。ところが第一次大戦後には状勢が著しく変り、官立大学がむしろマルクス主義導入の中心になって来た。官立大学を中心として学生間に社会科学研究会などが広汎に組織され、日本の社会を批判し、変革していこうという運動が大正の後半から昭和の六、七年にかけて展開された。ここに大学は社会批判の場としての性格を著しく強く持ったのである。（その影響は学生キリスト教運動にも及んで、当時の東山荘の夏季学校では、キリスト教をもう一度現代社会の中で見直さねばならぬとか、現代資本主義の中で我々はいかに生くべきかなどのことが激しく議論され、一時は大変な混乱状態に陥るということも起った。）大学が社会批判の場としての性格を持ってくると、そこにはまた逆に大学それ自体の再検討という問題も生じる。今日の大学はブルジョア社会の産物であり、その一つの支柱となっており、そのブルジョア社会は、今や内部に生み出された矛盾のために崩壊しつゝある。従ってそれを基盤とした大学もまたこれと運命を共にせざるを得ない。その中で、大学に生きる学徒がみすみす崩壊すべきブルジョア社会と運命を共にしてよいのか。我々は歴史に対する正しい認識をもって、新時代の担い手として生きねばならぬのではないか、というようなことが当時盛んに議論されたのである。

ところで、このような動き自体の中に一つの問題があったことも確かであるが、満州事変以後の戦時体制の中で、体制として確立された大学が次第に力を増して来て、大学内部の批判的な動きを一つ一つ押し潰していくことになった。そういう動きの中で、比較的早く政府、軍部の圧力に屈服したのは、本来ならば国家権力に対して自由をもっているはずの私立大学であった。国家の財政によって支えられており、国家の監督が厳重なはずの官立大学の方に圧力に対する抵抗がより長く残った。昭和八年の京大事件などはその一例である。

大部分の私立大学が専門学校としての体制を整えた。従ってそこに、官立大学は主に官僚及び大学の教師を養成し、私立の学校は主に産業界の要請、市民社会の市民的な要求に答えていくというかなり明確な分業が成立したのである。勿論官立の学校でも高等商業や、また明治の末以降になると帝国大学なども、実業界に人物を供給し、日本の産業社会は次第に基盤を拡大していくわけであるが、しかし大きな流れとしてはこのような分業が成立っていたといえよう。

そして、明治期には、それら私立の専門学校の中にはかなり明確な在野的精神がみなぎっていた。これは例えば早稲田大学の前身東京専門学校では官学に対抗する民間指導者の精神として、又慶応義塾などにおいては実業界の指導者としての強い自信として、表われていたといえよう。

B、大正、昭和期

a、帝国大学の拡充と私立大学の補完的模倣化

大正の初期に至ると、この官立私立両大学の体制間に一つの再編成が行われる。明治四十年代は、明治初年以来発展してきた日本の社会が行詰った時期である。当時の政治家達はこの行詰りの打開策の一つとして、教育理念を大きく変えていった。そして動揺する国家体制を建て直すために、「国家」という理念を非常に強く打ち出した。また、経済的な面から言えば、この時期が日本における独占資本主義成立の時期であった。そしてその中で帝国大学、官立学校の体制が著しく強化され、拡充された。この国家理念の強調と官立大学の拡充につれて一つの変化が起った。それは、私立大学がその在野的精神、自主的な精神を次第に喪失して、官立大学の矮小化された形態に変っていったということである。この動きは、大正中期の大学令改正の際に私立大学が大学令の中にとり入れられたことによって法律的にも縛られて一層促進され、第一次大戦の頃から非常に顕著になっていった。こうして、官立大学が官僚、大学教授に限らず実業家も新聞記者も弁護士も医者も何でも養成する様になった反面、私立大学の教育の理念、諸体制が実質的には官立大学の模倣となり、その小型のものとなっていったといえよう。そして、国家に必要な人物の養成という理念のもとにすべての大学教育が行われることになっていったのである。

b、大学における社会運動の展開

ところで、前述のような大学の体制の確立に反比例して、日本の社会、その資本主義体制はロシア革命の影響とか米騒動とかの中で大きな動揺を経験せざるを得なかった。そして特にロシア革命の影響を日本のインテリ達は強く受けた。新しい時代が開けていくのだという感激を覚えて、その中に飛び込んでいく動きが当時の学生の中に顕著に出てきた。東京帝大の新人会、早稲田大学の民人同盟会の如き組織が学生の

必ずしもうまくいっていない様に思われる。東大では、教養課程に非常に重点をおいたわけで、教養学部という独立の学部を形成している。それは旧制高校的なものを出来る限り残したいという願いでもあったと思うが、それにも拘らず、一般教養は学生に対して積極的な効果を与えていないように思う。今日の教養課程では、学生数が多いことから、教師と学生との個人的人格的な接触や、寝食を共にした親しい友人を望むことが困難となっている。また、自分で考えることをせず、学びたいという意欲をも持たずに、たゞカリキュラムで与えられた教養の講義を聞くことで、教養が身につくのかという疑問も生じる。ここで、学問に対する自主性の喪失ということが大きな問題になるのではなかろうか。学問はただ与えられるだけでなく、受ける我々の側の主体的な参加がないと非常に無内容のものになっていくのではないかと思う。

b、大学における理想的人間像

大学における理想的人間像は新制大学において一変した。旧制大学が建前として持っていた人間像は、国家に奉仕する、国家に必要な人材ということであった。しかし、実際には国家への奉仕ということに必ずしも自分を割切ることができず、社会に奉仕し、社会を新しくし、貧困と抑圧から解放していくということを理想とする様な人間が大学において実際には教育されていたと思う。そういう社会的な問題意識が次第に抑圧されて来るに従って、学生の関心は個人の教養を高め、個人の完成をはかる教養主義に向けられたわけである。戦争が終ると、もっと近代市民的な人間或は市民的な自由とか世界の平和とかいうことと結びついた人間像が、少くとも教育の理念としては掲げられることになった。しかし実際にそのようなことが学園の中で実現しているかどうかは甚だ疑問であり、事態を真剣に考えると、人間が商品の如くに大量に教室に投げ込まれ、大量に大学から投出されるという現実の方が切実ではないかとの反省が先に立つのである。このようなかで、新しい大学の理念、新しい理想的人間像は具体的には何なのかを探究することが我々の課題である。

c、サブ・リーダーの養成所としての新制大学

今日の社会はもはや大学に対して天下国家を論ずるエリートの養成を要請していない。従って今日の大学はもはやエリート養成の場ではなくなった。むしろサブ・リーダーの養成が今日の大学一般に課せられた使命であり、大学を卒業したということはそれほどの特権ではなくなっている。こういう事情は、社会的な点から説明すれば、文化の発展に伴ってサブ・リーダーに対してもある程度の教養が要請される様になるということである。そして、そういうサブ・リーダーの中からさらにいろいろな競争を経て少数の人が最高のリーダーとなるのである。このようにして、新制大学に対してはいろ

このことは、今日の大学の問題を考える時にもう一度よく考えてみる必要があるのではないかと思う。

c、キリスト教女子大学の形成

伝統的に言って、日本では、近代国家の形成、そのための行政官の教育、また近代経済の展開、それに必要な実業家、サラリーマンの養成などが国家の緊急な課題であった。その中で日本の国家にとって必要でないとして見捨てられた分野が女子の高等教育である。これに対して、キリスト教会の中に女子の高等教育の必要性、重要性の認識が生れてきた。そして、男子のミッションスクールの多くが明治の半ば以降、逆境のなかで二流、三流の学校に転落していかざるを得なかった中で、キリスト教主義の女子高等教育機関は、比較的高い地歩を占めることでができた。女子の高等教育に対して、国家も日本の社会もそれほど大きな関心を示さなかったが、その中でキリスト教界がそれに対して大きな意味を見出していたという事態は、基本的には第二次大戦に至るまで続いている。このことのゆえに、日本の女子高等教育において、キリスト教主義学校は特殊な意味をもつようになったといえよう。

二、学制改革と大学

以上歴史的に概観した大学が、戦後の学制改革においていかに変ってきたか、私自身が観察するところを以下二、三述べてみたい。

a、旧制高校の消滅と教養学科

旧制高校は日本の社会において、非常に特殊な役割を大学教育までの課程において占めていた。高等学校令には、国家の必要な人材を教育し、高等教育を完成することが高等学校の目的とされていたが、実際には旧制高校は大学の予備校であった。そこでは専門教育をするのではなく、特に具体的な教育内容はなかった。従ってこの時期に最も力を入れられたのは語学の教育であった。そして語学を一つの武器として読書をする、或いは自分の人生を豊かにする教養を身につけるということなどが旧制高校の実際の生活課程であった。もう一つの高等学校の大きな特色は、先生や友人との接触が密接で、学問そのものより、むしろそれらの人物、人格の影響が非常に強烈であったことにあるということである。人格的に優れた教師に接し、よい友人をえることは人生における一つの喜びであるが、旧制高校はそういう非常に特殊な人間形成の場であったと考えられる。

学制改革によって旧制高校は消滅し、二年の一般教養と二年の専門教育からなる四年制大学ができた。しかし私がいろいろ学生諸君に接して聞いているところでは、この制度は

ように考えていくべきであろうか。学歴が物を云うという事情と合わせ考えると、これを非常に民主的な体制だとばかり考えてよいかということも一つの問題ではないかと思う。

c、社会批判の場としての大学

今日或いは大正末期以降の日本の大学は、特にその社会科学系統は、日本の社会に対して批判的な姿勢をとっている。これは日本の大学の大きな特色だと思う。例えばアメリカの場合、大学はいかにして学生を、速い速度で回転しているアメリカの社会に落伍しないように適応させていくか、適応できる様な人間をいかに教育していくかということに非常に力を注いでいる。或る意味では全力を注いでいるとも言えよう。従ってそこには社会批判が介入する余地がない。また、東南アジアの国々の場合、大学及びそこを出ていく学生は、新しい国家形成の推進者であり社会のエリート、リーダーであるという意識が非常に強いので、社会に対する批判も非常に小さいと言えよう。

日本の大学においては、講壇や大学生活全体を通じて学生は社会に対する批判或いは指導者達への不信ということに目ざめさせられる。そういう中で、そのような批判を基礎づけてくれるような理論を自らの学問の中に求め、それを以て社会を批判していくという姿勢が学生の中にまた大学の中に一般的に拡まっている。このことは、深刻な課題を今日の学生に与えている。例えば、「学生運動と就職」の問題である。学生運動の中で日本の資本主義体制を批判していた学生が、いざとなるとその独占資本の大企業へ就職していくという事実をどのように考えたらよいのか。しかし、ともかく日本の大学がそのような社会的な面をもっているということは、その一つの優れた特徴であると思う。これは大学が合理的な精神を支柱としていることによるのであり、それを以て社会を見た場合、社会の非合理を批判せざるをえないという必然性が生じる。さらにまた、近代社会の中に形成されてきたものとしての一種のヒューマニズムが大学の中に漂っており、それが社会の問題性に対して反応し、批判という形をとっていく。このことは非常に健全な面をもっており、学生が社会に出ていく場合にも大学で養われたそういうものを容易に失ってはならないと思う。

（結語）日本の大学は、ヨーロッパやアメリカの大学の理念の実現の形態とはかなり違った問題を過去においても持っていたし、現在も担っている。そういう中で我々は学園における生活をしている。そういう大学の担っているいろいろな問題性、特質というものに我々も参与しているのである。従ってそういう場の中でしか我々は行動できないし、またそういう場を踏まえて我々はいろいろのことを考え、自分の生活或いは大学の中でいかに生きるかということについても考えざるを得ないと思う。（全国夏季学校主題講演要旨）（東京大学教授）

いろ旧制大学の場合と違った要請が社会からなされるようになってきている。このような社会の変化と、旧来の大学に対するイメージとの間の調整も充分に出来ていないように思われるし、このような社会的要請のなかで大学がどのように独自の理念を打ち建てるべきかも、明らかにされてはいない。

三、日本における大学の性格

以上述べた様な歴史と現在とを踏まえて、日本の大学の性格は社会的にどういう点にあるのかということを結論に二、三考えてみよう。

a、身分制の変形としての学歴

今日の大学はもはやエリート養成の場ではなくなったが、しかしやはり大学が日本の社会において特殊な地位を占めていることにおいては変りはない。大学を出るか出ないかで個人の将来の運命は相当大きく規定されるのである。

日本ではかつては身分的な考え方が非常に強かった。そういう身分制は民主主義の社会の中で次第に崩れていったが、反面、その際に身分制が近代社会の中で少しずつ変形されて残存して来た。特に日本の社会では、国家が教育に対して非常に熱心であったから多くの人が教育を受けた。そして、受けた教育の程度つまり学歴によってその人の地位が規定されて来るという関係が、大正の初年頃から次第に出来上って来たのである。これは日本ばかりでなくアジアの社会にはかなり一般的に見られる現象だと思うが、新しい産業社会或いは市民社会が充分に成長していない社会の中で、ある地位を獲得したいと思うならば、ある程度の学歴を持つことが最大の要件なのである。

b、社会階層上昇ルートとしての大学

以上と関連してヨーロッパ社会の様な階級制度或いは社会の階層的グループがかなり固定した社会では、労働者の子供が大学に入ること、例えばイギリスで労働者の子供がオックスフォードとかケンブリッジへ入ることは、殆ど不可能といえると思う。ところが、日本では大学が大体一貫して違った性格を持ってきた。貧乏でも何とか学校教育は受けられるという制度、体制を持ってきた。その典型的なものは師範学校と士官学校である。そこでは、能力がありながら貧しくて進学できない者をも、国家が全額を負担して教育した。それによって、社会の中の経済的に貧しい層の優秀なエネルギーを国家の中枢部に吸上げ、同時に社会の下層にうっ積する不満を解消してしまうというシステムなりルートなりを日本の国家は持っていたのである。また今日も、親の社会的地位がどんなに低くても、大学を卒業していて能力があれば社会のリーダーになれる。こういう社会階層上昇ルートとしての役割を日本の大学ないしは高等教育は果して来たし、又今日でもある程度果している。我々はこのことを社会全体の中でどの

がかりとして未知のものを発見しようとして問い求めて行くことをそれは意味する。あることがらの真相を明かにすべく没頭し、われを忘れて熱心に（lat. Studium）問いたずねて行く研究者の態度は Studieren という語で現すこともできよう。

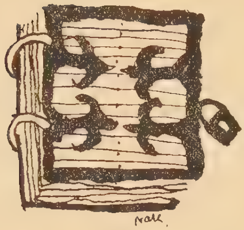
以上、学問の二つの面、すなわち「学ぶ」と「問う」を考察したが、しかしもとそれらは区別はできても分離することのできないいとなみである。「問う」ことなしには学ぶことはできないし、「学ぶ」ことなしには「問う」こともできない。区別をすれば、既知のを学び、習得するのは主としてことがらの事実性、つまり「……であること」（Aristoteles: hoti）にかかわり、「問いたずねる」、「探究する」は「何故にそうなのか」（dia ti）にかかわる。それは眼前にある事象をそのまま受け入れるのではなくて、その事象をして事象たらしめている理由、根拠、原理を探り、その先へと問いたずねて行く——この場合問いに方向をあたえるものが仮説であると言えよう——発見的な探究なのである。それで、学問は勝義においてはこのような意味における探究である。

二

ところで、発見的な探究の特質は方法的・批判的・自由な認識への努力であるという点に存し、学的認識ないし学（Wissenschaft）はこのような認識への努力から成る。

ここに方法的と言うのはおおよそ次のことを意味するであろう。あることがら（Sache）を学的に認識しようとする場合、先ずこのことがらの特定の側面、つまり認識の対象となる側面を他の諸側面から区別し、その限界を明確にする。余分のものを捨てて、ことがらの当該側面をできるだけ純粋に、単純化して対象としておく。このような抽象化の操作それ自体が実はすでにこの対象について問う研究者の問いによって導かれているのであるが、とに角学的認識の方法的追及においては、最初に認識の対象そのものが他から限られ、単純化されて設定される。次の問題は、この対象にどのように問いかけて行くかである。問いかけは勝手気ままに行われるのではない。そうではなくて、必要な答えを対象が与えてくれるように適切に問いかけるのである。それは対象の答えを受動的に待つのではなくて、対象をして答えざるを得ないように問いかけるのである。対象を「強制して」答えをもぎとるのである。このような問いかけは、例えば作業仮説や実験装置、あるいは観測のための設備などという技術的な手段を通じて行われる。この問いかけが適切でなく、対象が沈黙して答えが得られなければ、問いかけの仕方を変えねばならないであろうし、問いかけの予期しない答えが得られて新発見がなされる場合もあろう。かくして、学的認識は科学者と対象との間の技術を介しての対話の構造をもっている。

次に「批判的」とはどういう意味であろうか。それは学的認識が右に述べたような対象の抽象、技術を介しての問いと答えとの対話、すなわち認識主観と客観との相関々係というような諸条件下に得られたものであること、したがって当の認識が一定の限界内において妥当することを明らかにし、且つその限界を守ることである。方法的に到達された学的認識はその方法の条件に制約されているのであって、所与の限界を越えて己れの妥当性、真理性を要求することができない。このように限界を明かにし——もと批判（Kritik）は分ける（Krinein）から由来する——妥当性の範囲を限るために



学問することの意味

中川秀恭

I

わたくしは学問が一般にどのような前提のもとに成立するかということを問うことによって、学問することの意味如何という問いに答えたいと思う。

試みに『大言海』をひもといて見ると、学問について次のように言われている。「学問。〔学は増韻『効也』説文『覚悟也』問は、説文『訊也』とあれば、事を効いて、その理を覚り、道を訊ねて、疑を解く義〕。ものまなび。学びて、問うこと。教を受けて、学ぶこと。」ドイツ語の lernen (mhd. lërnen, ahd. lërnēn) は学ぶにあたる字であるが、英語の learn に対応し、まず「知る」(wissend werden) を、次に学ぶ、習う、覚える (sich geistig aneignen, Kenntnisse erwerben) を意味する。こうして学んだ人が学者 (der Gelehrte) であり、習得された結果が学識ないし博識 (Glehrsamkeit, eruditio, erudition) である。つまり、学問の一面は「学ぶ」ことであり、既存のもの、既に発見されたものを身につける、学んで知り、覚えるということである。これは特に文芸、史学、批評等について言われるが、広くは所謂「自由なる学芸」(artes liberales) にもあてはまると見てよかろう。そうして、このようなことを教えるのが教師 (der Lehrer, eruditor) である。ところで他方、学問には問う、探究するという面がある。ドイツ語の forschen (語根はインド・ゲルマン語系の prek-) は「探究する」を意味するが、「問う」を意味する fragen も同じ語根から出ている。forschen は専ら科学的な営為に関して用いられ、認識を追及する努力を指す。すなわち、自分にとっては未知であるが、しかし先人によって既に発見されたものを習得するのではなくて、未だ誰も発見しない未知のものを探究することと、既に習得した基礎的な知識や技術を手

の家における神学」(1)(Die Theologie im Hause der Wissenschaften) と題する就職講演を行った。周知の通り、ヨーロッパの大学はもと神学・哲学・法学・医学の四学部からなっていたが、第二次大戦後に創設されたベルリン自由大学には哲学部の外に自然科学系の諸学部があるきりであった。ところが、この哲学部に新たに福音主義的組織神学の講座が設けられ、ゴルヴィッツァーが担任者として招かれたのである。そこで、彼は就任にあたって近代諸科学と同じ屋根の下に住む神学が、大学において如何なる地位を占めるかについて自己の見解を同僚教授たちの前で語ったのである。

(一) この講演は Evangelische Theologie, 1958, SS. 14―37 に収録されている。

三

神学が他の諸科学と共に大学の一つ屋根の下に住むとき、それは何を固持するであろうか。

マックス・ウェーバーによれば、近代的な学は特別神とは縁遠い力 (die spezifisch gottfremde Macht) であって、このことは今日、よしそれとはっきり認めたわけではないにしろ、とも角も心の底では誰しもこれを疑わない (Wissenschaft als Beruf, 1919. 尾高訳岩波文庫版四二頁)。

近代的な学は神話的な世界説明の代りに合理的に認識される因果連関をおいた。そこでは、世界内的な現象が厳密に同じく世界内的な現象に導き帰えされる。すなわち、近代的な学は世界的な現象を認識することに自己を限るのであり、そのような現象を問うにあたっては同じく学的に処理し得る世界内的な諸要因以外の何ものも含まれていないような答えのみが許され、かくして世界を越えた要因の干渉にはたよらない、つまり、神に訴えるということは学的命題には現れないのである。

これが近代的な学の無神論である。それはながい間人々にショックをあたえた。何故なら、神的な干渉を含む従来の答えが、この「無神論」によって解消されたからである。近代的な学にたずさわる人はすべてこの「無神論」を告白するとマックス・ウェーバーが言うとき、彼は正しい。

しかし、かかる事態は人が次のことを知るとき、直ちにその特異な、人々にショックをあたえる力を失う。すなわち、ここで問題となっていることがらは、凡ての人間の仕事が世界内的なものに向けられている限り以前からあったし、又人間のいとなむ業のキリスト教的特徴づけにとっては本質的なものであったのである。

人間が認識と制作という仕方で世界について配慮するとき、神は現れない。つまり、人間とその認識対象の間に立ち、人間によって認識、もしくは技術の目的に利用されるような手段――例えば、魔術において神助を供儀によって呼び降し、あるいは買うという仕方で――としては神は現れない。

このような神の利用は他の宗教においてはいざ知らず、イスラエル的・キリスト教的信仰において原理的に行われた世界にたいする人間の関係の非神話化と非魔術化とによって迷信の領域に追放された。たとえ、確固たる啓蒙主義者たちが学を引き合いに出してキリスト教信仰をそのようなところへ追放しようとしても、そのことによって彼らはキリスト教に帰依した諸民族のうちに生きつづけていた異教的な神の利用の要素を突きはするが、キリスト教信仰は突い

は、学的認識の不断の自己吟味が必要である。それが行われないと独断論に陥り、そこから所謂「科学万能主義」（scientism）が生れてくることになる。

第三に、自由な認識への努力、ないし学における自由という場合の自由とは何であろうか。研究者がある答えを予期してあることがらに問いかけるとき、提示した問いにたいする答えを得ようとするのであるから、この探究の操作が特定の仮説に基づいて行われる限り、探究そのものが研究者の主体の制約を受ける。しかし、それにもかかわらずこの探究は自由に行われなければならない。それはどのようにしてであるか。先ず、この認識への努力はその認識を特定の目的に供しようとする実用主義（pragmatism）から自由でなければならない。このような実用主義はしばしばことがらの真相を明かにする場合のさまたげとなる。むしろ却って、認識がそれ自身のために追及され、認識追及の努力が自己目的々になされるときにそれは到達される。発見はそれが何に役立つかということとは区別されるのである。また、この認識追及は何時までにこれこれの成果を得よというような「外的権威」から自由に行われるであろう。なるほど、特定の目的をもって設立された研究所等においてはその目的にそわない研究は行われないであろうが、そのような研究所においてさえも許される限りの自由をもって基礎研究が行われることが望ましいということは殆んど周知のことである。さらに、学的認識への努力は当該分野における研究の伝統からの自由を必要とすることもあろう。こういう考え方、あるいは仮説の立て方は不可能だという風に伝統にとらわれると却ってことがらの真相が発見できない場合があろう。新しい発見はこのような伝統をつき破ってなされることがあるのである。ときにはまた、自分の立てた仮説からさえも自由にならねばならないことがあろう。ある仮説の下に実験をしたがどうしても答えが得られないという場合には、それに固執しないで別な仮説を立てて問い直して行く。そうすると向うから答がくるということもあるのである。あるいは予期しない答えが得られることもあろう。

以上述べたような意味で、学問、すなわち学的認識への努力は方法的・批判的であり、自由である。

＊　＊　＊

これまでのところで、わたくしは学問、ないし学を方法的・批判的・自由な認識への努力として規定し、形式的に考察した。なるほど、欧米における学とはその形成と歴史とを異にするわが国においては学をそのように見ることでつきるかも知れないが、しかし古代ギリシャにはじまり、キリスト教中世を経、ルネサンス、宗教改革、産業革命を通って今日にまでいたっているヨーロッパ、ひいてはアメリカにおける学はキリスト教信仰との折衝を経て形成されたのである。

キリスト者であるわれわれがこの夏季学校において「学問」を主題としてえらんだ所以も、それをキリスト教信仰と対決せしめつつ、その本質ないし意味を問うところにあると思われる。それで、わたくしはキリスト教信仰との連関において学が如何なる条件下に成立するかを考察するための手がかりとして、ヘルムート・ゴルウィッツアーの就職講演をとりあげたいと思う。

ボン大学からベルリン自由大学（die Freie Universität Berlin）にうつったH・ゴルウィッツアーは、一九五七年十一月十一日「学

思惟としてのキリスト教神学は学の家においては次のことを主張する。すなわち、人間の現実性、それ故にまた学が専心する世界の現実性は創造者にして救済者なる神の現実性からとき放すことができない。したがって、人間と世界の現実性は神を創造者、救済者としてもつことに成立する。学的な認識においても、技術的な行為においても神を視野から遠ざけること (Absehen von Gott) は非常に厳密な、限られた意味をもっている。そうして、そこでは学のために非常に厳密に定義せらるべき「方法的無神論」(methodischer Atheismus) が問題である。神学はこう主張するのである。

かの遮蔽は部分的認識達成のために起る限り、正しい、認められ得る意味で起る。もちろん、この部分的認識はわれわれが生きる所以の真理への問いの連関において起るが、しかしそれは部分的認識としてはわれわれの実存についての基本的な問いに答え得ない。このように、凡ての認識作業において考えられている答えは、われわれの作業の結果ではなくて、神の自己啓示の賜物であるということをキリスト教神学は主張するのであるが、それによって神学は真の答えをきくこととしての信仰を指し示す。このような指示によってわれわれの作業は、別の場合にはそれにわれわれが託しがちな誤まれる希望から覚醒され、解放される。かくして、信仰は学の必然的な無信仰性をまもる(一) (So schützt der Glaube die notwendige Glaubenslosigkeit der Wissenschaft)。

(一) F. Gogarten, Der Mensch zwischen Gott und Well, 1956, S. 307 には次のように言われている。……dass nur, wo Glaube ist, die Wissenschaft voraussetzungslos, und das ist glaubenslos, sein kann.

このことはわれわれがただの一瞬でも神を忘れることが許されているとか、命ぜられているということを意味しない。もしそうだとすれば、それは方法的抽象から独断的抽象へうつることであり、創造者としての神にたいする被造物としての世界の自己―存在 (Selbst-Sein) から罪の本来の在り方としての世界の「自―主的に―在ろうと欲すること」(Selbstständig-Seinwollen) へうつることであろう。信仰とは神が存在し、自己を与えるが故にのみ、われわれが存在するのだということを認識(エルケンネン)することである。神が現れてこない命題は凡て、信仰の認識から見るとき、それらの命題を可能にする前提――神の力強き存在と主体としての存在――がそこに現れていない限りにおいて、非本来的なものをもっている。この前提が忘れられ、それらの命題における神の不在が人間的、世界的主体存在の本来性と絶対性の表現として理解されるときに、信仰の代りに不信仰が現れる。したがって、このことは命題そのものによって決定されるのではなくて、命題がその中に立つ信仰の連関によってである。信仰は自分自身の業による自己救済の迷いから身を退けるのみでなく、自らは認識の源となることなしに、学の作業を次の二通りの仕方で規定する。一、学の作業において何らかの対象について問う人 (der Befragende) を問われた人 (der Befragte) にする。二、全体人間の現実を孤立して、自己に任せられた現実としてでなく、神の現実と結びつけられた現実として絶えず見つめつつ認識を一歩一歩進めて行くように学を強制する。すなわち、方法的抽象を絶えず繰り返し現実の中へと止揚するように学を強いる。

神学の研究はこれら二つにたいして模範を示す。一、問うところ

ていないのである。

神は世界支配の手段ではない。したがってまた、人間と世界の中間に立つ世界説明のための手段ではない。神が啓示を通して信仰によって承認され、讃美されるのは人間が彼から世界支配のための装備を獲得し、絶えず新たに獲得するようなそういう方としてである。かくして、人間はこの装備を使用することによって欲すると否とにかかわらず創造者を讃美する。

このような人間の業そのものは「無神的」(gottlos)——マックス・ウェーバーによれば「神と無縁」(gottfremd)——であるが、それは人間がこの装備によって直接世界と関係するからである。というのは、神は世界関係の世界内的な手段ではなくて、むしろその創造者であり、それをあたえる方であるからである。

マルティン・ルターが『小教理問答』(Der kleine Katechismus)において、「わたくしは神がわたくしをつくり、わたくしに眼・耳・理性その他の器官をあたえ、そうしてそれらを維持されることを信ずる」というとき、それはこのような意味においてである。

この維持 (Erhalten) は人間によって祈り求められず、感謝をもって答えられない場合にも継続する故に、一つの世界の中で信仰と不信仰とのいろいろの形態の共同生活や共働が可能なのである。それ故に、特にキリスト教的な学というものは存在しないで、ことがらに即することへの自由 (Freiheit zur Sachlichkeit) を徴表とする学があり得るのみである。

このような即事性(ザッハリヒカイト)は、その都度現象にたいして立てられた問いのために、爾余の生の諸関係の全体の連関が遮蔽される (abblenden) ときにはじめて可能である。例えば、わたくしが手を化学的に研究するとき、それが人間の体の一部であることを遮蔽するし、解剖学的に研究するときはそれが特定の人間の一部であることを遮蔽する。同様の遮蔽は凡ゆる人間の業において起る。その際、その業が信仰によって起ったか、不信仰によって起ったかは業そのものによっては知ることができない。言い換えれば、そこでは当の対象の生の連関、就中それが被造物であるということ (Geschöpfsein) が認められているところの単なる方法的遮蔽 (ein methodisches Abblenden) において起ったか、あるいは生の連関や被造物性が否定される原理的・独断的遮蔽 (ein prinzipielles, dogmatisches Abblenden) において起ったかは業そのものによっては知ることができない。

この二義性は人間が最終的な意志と信仰とをもつ全人として最も少く従事しているところにおいて、すなわち業がそれをなす生ける人間から最も遠くひきはなされ得るところで最も大である。見解を全く異にする人々の最も冷静な共同研究が可能なのはこの故である。このことは自然科学的認識において極端である。精神科学の領域ではこの分離性が少い。けだし、そこでは程度の差こそあれ人間の行為やことばの理解が問題となっているからである。[一]

(一) E・ブルンナーはこれを Gesetz der Beziehungsnähe zum Personzentrum と呼んでいる。E. Brunner, Offenbarug und Vernunft, 1941 なおゴルヴィッツアーは遮蔽という概念を次の書からとったと言っている。Georg Picht, Wahrheit und Wissenschaft, im: Unterwege zu neuen Leitbildern, 1957.

することができるだろう。」他方、ボーデルシュウィング神父はベテルの施設の婦人管理人が次年度の赤字財政の問題をたずさえてきて「その件については愛しまつる神のみをたよりにします」と言った時、頭をふってこう答えたという。「愛する姉妹よ、わたくしの経験によれば愛しまつる神ほどたよれない方はないのです。」このように信仰深く神にたよることと、同様に信仰深く神にたよらないこととの間を動きながらキリスト教的な業も神学もいとなまれる。かの方法的抽象、方法的無神論は信仰によって包まれているというほかならぬ己れの限界内で有益なのである。(D. Bonhöffer, Ethik, 1949, S. 55 参照)。

しかし、このような方法的抽象から独断的抽象が引き出され、方法的抽象が独断的抽象として解釈されるとき、環境の世界にたいする人間の関係に不気味なものが生ずる。すなわち、先ずわれわれが対象のパースペクティヴで事物と交渉し、それ自身としての事物と交渉しない限りにおいてのみ、事物はわれわれの認識や制作の対象であるということが、事物との交渉において忘れられる。次に、事物がそれ自身においても、われわれとの関係においてもわれわれの認識や制作の対象以上のものであること、すなわちそれは人間と共なる被造物であって、それの現実は神の現実から引きはなせない……ということが忘れられるのである。

フーゴー・フォン・ホーフマンスタール(1874—1929)が庭園を散策中一本の枝を見て同伴の友(R.A. Schröder)にこう言ったという。「どうしてこの葉が枝から落ちたかを厳密に知ったなら、わたくしは永遠に沈黙したであろう。何故なら、わたくしは充分に知ったであろうから。」学もまたどうして一枚の葉が枝から落ちるかを厳密に知ろうと努め、多くの貢献をなすことができる。学の認識がわれわれをかの最後の祈りの沈黙にもたらすことができないという事実が、すでに学の暫定性(Vorläufigkeit)をあらわす。われわれは学によっては「充分に」(genau)知ることができないのである。まさしくこのことが被造物をわれわれのつかみかかることから保護する。存在に暴力を加える(Seinsvergewaltigung)という近代科学にたいする非難は、学による客観化に限界があるということを意識にとどめないということによって、被造物の秘密(ゲハイムニス)と親密(ブリューダーリヒカイト)が忘れ去られる程度に応じて、科学に的中する。

学の家における神学は、方法的に人間から神を抽象し、神から人間を抽象することから独断的抽象に移行する敷居のところに立つ警戒信号である。この移行は学が迷信に頽落することである。かくして神学は学の人間的な意味(der humane Sinn)に仕える。何故なら、被造物の秘密と親密を忘れるとき、学に従事する人間は人間の秘密と親密をも失うであろうから。かくして、学としての神学――それの前提は神の秘密と恩寵であり、それの最初と最後の言葉は驚きと祈りである――は凡ての学に次のことを想起せしめる。すなわち、学の対象は人間も自然も学の対象以上のものであり、秘密と恩寵の中に深く埋められている。したがって、方法的客観化と学の方法的自立(methodische Autonomie)は恩寵の秘密を感謝をもって承認するときにのみ、神と無縁ではなくて、むしろ神に関係せる現実についての人間の仕事として正しく行われるのである。

四

近代的学をその歴史的・宗教的背景から切りはなして受け入れる

(次頁下段へ)

の神学研究者がその対象によって絶えず問われるものとなるという仕方でのみ神学は起り得る。言い換えれば、問う者の確かさ（Sicherheit）から問われることの不確かさ（Unsicherheit des Befragtwerdens）、つまりこのような対象に己れの問いをたづさえて近づこうと敢えてすることのできる人間であるのか、また対象が自己をあたえるであろうということを如何にして期待し得るのか、対象がそうしない場合己れの命題がどのような実質なきおしゃべりであるかを如何にして期待し得るのかと問われることの不確かさの中へ投げこまれるという仕方でのみ神学は生起する。学の家における神学の存在は他の学にたいして問いを提起する。それらの学の事情は神学とは異るかどうかと。二、神学における個別的な認識の努力、例えば原典批判、年代学等は啓示の歴史的できごととの連関からその意味を得ている。この啓示によって、神の現実が、またそれとともに世界と人間自身との現実が彼に開き示されるのである。かくして、個々の認識が啓示の認識からして現実の認識に整頓されるのと同じように、これら個々の認識は啓示の認識に仕えるのである。この事実が方法を絶えず問題にすることを強制し、新しい方法への自由、新しい観点、最も小なるものを最も大なるものと結びつけ、周辺的なるものを中心的なるものと結びつけることへと強制する。凡ゆる独断論（ドグマティスムス）——方法的独断論すらも——は神学の課題をはたすことができない。他の学においても事情は同じである。しかし、この事情は特に神学において顕わになる。生物学者、社会学者、歴史学者等としてのキリスト者も、神学者としてのキリスト者も絶えず新たな探究の状況において、個々のものと人間の全現実との連関にたいするまなことと可動性（Beweglichkeit）とを信仰から受けとるし、このことがまた個々の事実の意味理解と評価にたいして効果をもつであろう（K. Barth, Kirchliche Dogmatik, III, 2, S. 241 参照）。

それで、諸々の学との交わりにおける神学の協力は次のことを想起せしめるにある。凡ゆる学は対象を自ら創造せず、むしろ賜物として神——教会は彼の言の啓示において彼に聴くのである——から受けとる故に、すべての学の業が正しく理解され、行われるとき神学である。認識の仕方における礼拝はそのようなものとしてのみ意味をもつのだ、と。かの遮蔽のもとにはとどまり得ないので、それは通過点にすぎないということはたしかである。認識はそれを越えて、つまり学を越えて進む。それは本来「神のために世に仕え、世のために神に仕えること」（Dienst an der Welt für Gott, an Gott für die Welt. H.U. von Balthasar, Die Gottesfrage des heutigen Menschen, 1956, S. 52 の言葉）である。

神が世界像には属さないということ、神は認識計算（Erkenntnisrechnung）における一項目（ポステン）ではないということ、この点において神学は他の諸学と志向を一にする。神学はしかし、自らが学として聖書と教会を前提して存在するという仕方によって、神の恩寵がわれわれの業の、したがってまた学の前提であることを証しする。何故なら、神学はキリスト教信仰の教示、すなわち人間のいとなむ業においては神をたよりにしてはならないが、しかもどこまでもただ神のみをたよりにしなければならないとの教示を自分の眼前に保持するからである。バタク地方のすぐれた宣教師ルードヴィヒ・ノマンゼンはこう言うのを常とした。「わたくしは一万マルクをたよりにするのと同じように、神をたよりにするような共働者だけを必要と

近代大学の理念形成の歴史

松川成夫

一、大学の起源（中世大学の発祥）

今日、私達が大学というときに、その起りは中世の大学にあると考える。歴史的にみれば、最初の大学としては、プラトンのアカデメイヤ、アリストテレスのリュケイオンがあげられる。けれども、これらの学校はいわゆる高等教育機関としては最初のものかも知れないが、ユニヴァーシティとしての大学の起源は、ヨーロッパ中世の一二—三世紀に求めるのが普通である。そして、これには正当な理由がある。つまり、中世において自治の特権を公認され、国の中の国、都市の中の都市とよばれた学徒団体の形成を今日の大学の源流とみなすからである。

そこで、先ず中世大学について概観し、大学の起りの事情を調べてみたい。



大学ユニヴァーシティの語源であるウニヴェルシタス universitas は、元来、学問の機関や場所をさしていったのではなく、多数の人々の集団を意味し、中世社会に特有な同業者たちの組合団体や、都市内部の市民団体などを意味することばであった。中世の商人や職人は組合を設け、規約を設けて自由競争をさけ、各自の利益を保護したが、これと同じように教師や学生もまたそれぞれ組合をもうけて各自の特権の獲得に努めた。他所の土地から都市へやってきた商人の場合は、同じ他所者同志が数人集まると、非市民として相互の協力と保護のために組合団体をつくることが、公認されていたが、これと同じく、異郷出身の学生たちの場合も、彼らは非市民として市民権をもたず、そこで彼ら自身の組合団体によって自己保護に頼らねばならなかった。

このように、ウニヴェルシタスは学生が共同の目的のために一致

学問の意義(項目)

鳴海元

学問の意義を問うことは、まさに容易なことではないが、自然科学をやっている者として、日頃のまずしい研究生活を通じて感じとっていることがらを、次の五つの問題に限定して述べたいと思う。

一、歴史的考察、自然科学成立の契機、
二、原理的考察、科学の普遍性、精密性、実証性とその限界、
三、応用的諸問題、科学と技術、技術社会への寄与、
四、思想的、認識論的実存論的課題、自然の解釈、世界像と世界観の問題
五、信仰的神学的課題、科学者の実践的課題と信仰の論理的課題

これらの諸問題について立ち入って論ずる余裕はないかもしれないが、科学の時代とよばれている現代に、「学生として生きる」という主題にそって、窮極の課題を考える何かの糸口になれば幸いである。

× × ×

右のような題目のもとに講演がなされたが種種なる都合のため、本文は改めて次号に掲さいさせて頂くこととした。お詫びをして御了承をえたい。(編集委)

(前頁より)

ことによって成立したわが国の大学において、そもそも学とは何を意味するであろうか。また、神学部を有しないわが国の大学の歴史において、それに代る役割は何によって演じられるのであろうか。(神学部ないし基督教学科をもつのは数個の基督教主義大学にすぎず、国立綜合大学ではわずかに京都大学が基督教学講座一を有し、北海道大学の宗教学講座にはたまたま基督教神学を専攻する教授がいるにすぎない現状である。)

このような問いに答え、学の形成の前提を明かにしつつ、学をその限界内において最も純粋に、最も高い水準において推進して行くという責任がわが国のキリスト者教授、広くはキリスト者学徒に負わされていると思う。(北海道大学教授)

バンガロー会議出席者

竹中正夫(同志社大学教授、会議副議長)小林信雄(関西学院大学教授、聖書研究担当)長清子(国際キリスト教大学教授、講演者)の指導者と、後藤邦夫(YMCA学生部主事)魚木アサ(YWCA学生部主事)関本肇(聖公会司祭、YMCA学生部協力主事)原栄作(東京SCF主事、日基教団牧師)四竈揚(LMCC主事、日基教団牧師)木村利人(早稲田大学大学院)及びスタッフとしてN・サーバー(日基教団宣教師、LMCC主事)塩月賢太郎(WSCF主事)の諸氏が参加される。

こに従来のヴィッテンベルク型を破る新しい型の大学が出現し、やがて近代のドイツ大学の典型たるベルリン大学を生むべき先駆となった。

ハレ大学の創立やその発展に尽した人々として、トマジウス、フランケ、クリスチャン・ヴォルフなどがあげられる。彼らは当時の学者の多くが、ラテン語という城壁の背後に逃避して、自らの思想的貧弱や実際的無能をおおうていたのに反対し、講義をするとき、文献を使用するときに、母国語であるドイツ語によった。つぎに、ハレ大学の特質として考えられる点を列挙し、この大学がルネッサンス的大学から近代的大学への推移を示す過渡的なものであるゆえんを明らかにしよう。第一の点は、従来文科とか哲学科とよばれて他の学科の予備的部門にすぎなかったものが、次第にその地位を高めた。そして他の学科に対して並列的、もしくは指導的な地位を占めるようになったこと。第二は、研究や教授の自由が次第に大学の一般的原則として承認されるようになったこと。第三は、教授方法の変化ということ。つまり、従来は特定の教科書の説明を主としていたのが、ここでは新しい学問の成果を組織的に講義することとなり、またフランケがコメニウスの影響をうけてゼミナール方式をとりいれた。要するに、知識の伝達ではなく知識の生産を大学は目指そうとした。第四は、従来と同様古典の研究に力をいれるが、その態度はたんなる古典文章の模倣ではなく、古典的精神による人間性の教養を目指したこと。以上の諸点が、ハレやゲッチンゲンの大学が近代大学の先駆とされるゆえんである。

〔ベルリン大学の成立と理念〕 ベルリン大学の生みの親は、いうまでもなくフンボルトであるが、その理念の確立にはフィヒテ、シュライエルマッヘル、シュテフェンスなどの力が大きく働いたことは見のがしてはならない。このベルリン大学は、新人文主義の理念の上にたてられた近代を代表する典型的な大学である。近代以降の世界各国における大学の発達は、何らかの意味においてベルリン大学の指導と影響のもとにあるといって過言ではない。

ナポレオン軍がプロイセンを占領し、チルジット和約（一八〇七年）の結果、プロイセンはエルベ以西の領土を失い、これによりプロイセンの大学はケーニヒスベルクとフランクフルトの両大学を除いてすべて閉鎖された。こうした状況の中で新大学設立の気運が生じた。そしてフンボルトを中心に、シュライエルマッヘル、フィヒテなどの人々が、ハレやゲッチンゲンにおいて努力された原理をさらに一そう徹底させ、大学を学問の中心とすることに全力を尽した。この大学の新しい理念を示すものとしてつぎにフンボルトとシュライエルマッヘルの大学論の一部を紹介する。

フンボルトは「学校では、すべての知識は一応完成したものとして教えられる。生徒はそれを理解し受けとればよい。ところが大学においては、学問はなおまだ完全には見出されてはいないもの、完全には発見されえないものとして取扱われねばならない。つまり、大学はたんなる博識が求められるべきではなく、探求の精神こそ何より尊ばれるべきものであること、従って学問と研究の自由があくまで守られるべきであることは当然であろう。ここでは教師と学生との関係は以前と全く別のものになる。教師は学生のためにあるのではなく、両者はともに学問のためにある」といって、大学を知識の伝達の場所、教育の場所というよりは、創造的な学問研究の場所としてみなす立場を明らかにしている。

して自治的な生活を始めた時の一種の組織の名称で、今日の大学のような学校を意味するものではなかった。

学校としての大学は、これに対してストゥディウム・ゲネラーレとよばれていた。これは元来、あらゆる国民、あらゆる地方、あらゆる階級の学生が集まって、学問研究をおこなう場所を意味し、一三世紀以降一般化したといわれる。ところで、このゲネラーレはあらゆる学問の学問、原理の原理を探求するという意味でのゲネラーレではなく、そこに来て学ぶものの資格を制限しないという意味、もしくは普遍的ヨーロッパに開かれている学校という意味であった。そして一三世紀前半には、皇帝や法皇によってストゥディウム・ゲネラーレが建てられるようになり、そこにおいて好学者の学習を許可し、所定の学業を修めたものには、どこにおいても教師として講壇に立つことのできる権利を認めてからは、この権利を有する学校をとくにストゥディウム・ゲネラーレとよぶようになり、これが後の大学の公の資格となった。卒業生に対して法皇から認められた「どこでも教えられる権利」を付与することが、ストゥディウム・ゲネラーレの不可欠の条件として考えられるようになり、法皇が各研究所毎にとくに教書をもってそのストゥディウムの一般的性格を承認するという慣例が始まり、それをばストゥディウム・ゲネラーレとよぶようになった。従ってこの意味での大学は、広く一般に認められた研究の機関というような意味をもち、このストゥディウム・ゲネラーレの中に、教師や学生によって結ばれたウニヴェルシタスがあり、第一四世紀以後、この両者が同義語となったといわれている。さらに一五世紀になると、学問のあらゆる領域の総合的研究を意味するウニヴェルシタス・リテラルムのような近代的な意味をおび、やがて近代の用語としての大学ユニヴァーシティの意味が固定するようになる。

カレッジの語源であるコレギウムは、元来は貧しい学生のために設けられた寮舎であった。中世大学には修道院や教会の学校から発展したものが多かったが、学生が多くなると場所が狭くなり、そこで寮舎を使って授業が行われるようになった。やがてそこには教師も起居をともにするようになり、コレギウムは寮舎であると同時に校舎となり、組織的な制度を整えるにおよんで、学校としての大学の形をとるようになった。

二、近代大学の特質

〔近代大学の先駆〕　近代になって大学はいかなる進展をしたか。ルネッサンスの人文主義と宗教改革のプロテスタンティズムの両者の統一は、イタリヤにおいてよりもドイツの大学においてみられた。とりわけ、ヴィッテンベルク大学はその中心であるといわれる。ルターの人格的感化によって忠実な改革者となったメランヒトンは、この大学に四二年いて、この大学をはじめドイツ各地の大学の改革をし、また一、二の大学の新設にも参与した。彼は福音主義的な神学を作り上げるのに努めたのみならず、改革運動を通して人文主義の理想を実現し、また大学の教育内容の面で従来とは大いに異なるものを打ちたてた。この意味で彼は近代大学の父とよばれるが、この時代の大学の制度そのものはなお中世的伝統を十分に脱しきれない状態であった。

真に近代大学の先駆といえるのは、啓蒙時代に設立されたハレ大学（一六九四年）と、ゲッチンゲン大学（一七三七年）である。こ

偏見にわずらわされず、健全な常識をもって大学の運営に当ることができる。

また、この理事会は大学の最高議決機関であるとともに、他面ではまた議決事項を世論に対して弁護する機能をも果す。このことは大学理事会が大学と民衆の中間にあって、両者を結びつける役割をもち、大学に対しては世論を代表し、民衆の世論に対しては大学の政策を弁護する立場にあるものと見られるべきである。

さらにアメリカの大学のもう一つの特徴は、大学のサーヴィスとよばれているところの夏季大学、公開講座、通信教育などの非常な発達にみられる。この点にも学問が大衆生活に応用されてはじめて有意義となるということが根底にあるとみられる。以上のように、アメリカの大学は社会の要求に答える大学であり、真理のための研究というよりも、その応用を目的とする研究、さらにその企業化、営利化を目的とする研究に主たる関心がおかれているということができよう。

こうした傾向はたんにアメリカの大学だけではなく、多かれ少なかれ、ヨーロッパの大学においてもみられることである。ベルリン大学でさえ、学問・研究の自由の王国としての大学から、次第次第に国家の要請に答えるための国立学校へという大勢にはさからうことができず、国家主義的傾向を強めていく。そしてこうした大勢に益々拍車をかけることになったのは、二〇世紀初頭以降の自然科学をはじめとして、多くの学問分野が分化し専門化し職業化してきたことにある。

〔学問の専門分化と統一性〕　一九世紀初頭には、諸科学はドイツ理想主義哲学によって指導されていたが、一九世紀の二〇―三〇年代から実証的科学の方法がこれに代るようになり始め、今世紀初めには諸科学は決定的に実証主義の影響下におかれるに至った。諸科学を統一的理念のもとに研究する態度はなくなり、大学は関連なく孤立した研究領域にそれぞれ立てこもる個々の研究者の集合所となろうとしつつあった。かくして大学は外部からは、国家・社会の要請により、これに答えねばならず、内部からは学問の分化専門化によって従来の統一性は分裂し、学問の統一的生命体であることをやめてしまおうとするに至った。

初期の実証主義はなお諸科学間の相互関連を認めていたが、今世紀のそれはほとんど無政府的な実証主義といわれる。従って実証主義的研究の必然の結果として、研究対象が極度に特殊化し、研究態度の没価値的傾向によって哲学は諸科学の統一者としての伝統的地位を保持することができなくなった。

このことは大学の職業人養成の任務にも影響を与える。学生の全部が科学者としてその生涯を科学研究にささげるわけではなく、むしろ彼らの多くは諸々の職業に従事する実際家となるだろう。そのためには、大学における科学的訓練が妨げになるとは思えないが、すぐれた実際的職業人としてはむしろ一般的総合的知識が不可欠であり、この点からいえば、研究対象の専門分化、研究方法の実証主義的細分化をこととする現代の大学の傾向は、科学研究をその第一の使命とするという大学理念の面ではよいとして、大学が事実上は重大な課題として負わされている職業人の育成の面ではかえって背反するものではないだろうか。

さらにもう一つの問題として、学問の細分化が人間教育をも困難にするのではないか、という問題がある。中世や近世初めには、宗

シュライエルマッヘルは、学問のための施設に三つの段階を考えた。学校（シューレ）と大学（ウニヴェルジテート）と学士院（アカデミー）である。学校では、先生によって生徒に知識が授けられる。大学では、教授によって学問の理念が学生の心のうちに目覚まされる。学士院はでき上った学者たちの集りであり、学術上の意見の交換がなされ、すぐれた研究成果が社会に発表される。彼は大学の任務は学生に「学問の根本法則をすべての思考の際に意識するようにさせ、かくて自ら探究し、発見し、表現する能力を徐々に自らのうちに確立させること」にある、つまり学問の精神を身につけて、「学ぶことを学ぶ」のが大学生活の目的である。そこではたんに多くの知識を覚えることが大事ではなく、また完成した学者になることが要求されるのでもない、大事なのは、探究の精神に目覚めることであると考えた。そこでつぎのようにいうことができる。「大学は学校の後（Nachschule）であり、学士院の前（Vorakademie）であり、学校と学士院の中間に立つ。そして『学ぶことを学ぶ』のが大学の何よりの目標であるならば、そこには当然、学問の自由、大学の自由がなければならない。」そして彼はまた大学生の自由に関して「学生としての学問や学習の仕方について中等学校の生徒とは違った自由がある」といい、要するに学生は履修についていかなる強制もうけず、あれこれの講義をきくように命じられることもない、出席をしなくても叱られない、彼らは大学を出ると試験をうけたり、資格をとったりしなければならないが、それにどう対処するかは専ら彼ら自身の責任に帰することであって、他からとやかくいうべき筋合のものではない、という。またシュライエルマッヘルはカントの大学論から多くのものをうけついだから、哲学を大学の根底におこうとする立場がみられる。大学における。学者のなすべきことは、真理を常に理性の源泉から汲みとることであって、その任務はわけても哲学部に課せられている。従って哲学部は、当時の人々がよんでいたような「低い学部」（専門学部への予備コースの意味）ではなく、かえって最も高い学部であろうと考えた。

三、現代の大学の理念

〔国家、社会の要請と大学〕　現代の大学は、国家や社会の大学に対する要請のために、従来の性格を著るしく変化せねばならなくなった。つまり、象牙の塔としての大学が、より実用的であるように求められてきた。それは一つには社会の中に実用主義的な考えが生じたことにある。これはとくにアメリカの大学において著るしい。

アメリカの大学は本来はヨーロッパの大学の模倣であり、一八世紀頃までは宗教的ないし貴族的色彩の強いものであった。けれども一九世紀以降、州立大学の相つぐ設立もあって大学は急激に増加し、大学の性格の面でもプロフェッショナルな性格をもった伝統的大学に対するインダストリアルな性格をもった近代的大学の出現によって、アメリカの大学の理念は大いに拡大されるようになった。

組織や制度の面でも、アメリカの大学は元来、イギリスの大学を原型として設立され、その後ドイツの大学の影響も多く受けたが、現代ではアメリカの大学はその独自の性格を発揮するに至っている。その特徴は、大学の最高機関である。理事会にある。理事は一般に大学外から任命され選出されるのが普通である。理事会はいろいろの職域を代表する社会的に有力な名士により構成される。彼らは教育に関して素人ではあっても、大学内の各部や各教授の利害と



論争のすすめ

——70回夏季学校に参加して——

青木　茂

F兄に

小国町のD学園と東山荘との夏季集会ではいろいろな経験をしました。終始お世話さまになったことを感謝いたします。「夕陽会」の時の大兄の御奨励は私にとっても切なかったし、苦しい御気持がじかに胸底に鳴りひびいてくる想いでした。〃果して失敗の歴史であったでしょうか〃という問いかけは〃学生運動の後衛〃に身をおいている私の信仰に対しても、絶えず問いなおされ覚悟し直されなければならぬことを、そしてこの問いかけは私達が生きている限りは、限りのない試練となってしか反応してこないことをあらためて確認した次第です。ここから、この一点からでてくるさまざまの問題についてあれやこれやと反省もし後悔もしながら筆をとっているところですが、なかなかまとまりません。思いつくままに、二つ三つのことを申し上げてみたいと思います。

㈠私は信仰の「指導者」という気持をまさしく神学的にも私の実感の上からも毛頭持っておりませんでしたし、それはそれでよいことだと現在も考えています。昨年申しあげた「指導者意識の過剰」という私の批判もこの意識の根にある信仰そのものの理解や態度、そこから導かれる「理想主義的」な宗教運動や組織論に疑問を感じたからでした。丁度今から十年以上も前、はじめてこちらの大学の青年会の諸君と接した時に、その信仰の理解について私なりの考えに立って思い切って批判もし罵倒もし、アイロニカルに、シニカルにやっつけてもきました。批判とはそのまま自己に対する批判をも含んだ破壊作業です。ではどうするか、という時に十年前の彼らは文字通り自分の問題としてこれを引き受け、逆に私をやっつける程の理解力とエネルギーとをもっていたのです。しかし現在ではよほど事情が変ってきたようです。

現代の学問は、哲学をもふくめて、神からのあるいは存在からの語りかけを、先ずすべて Deus ex machina として却け、ひたすら方法論的無神論（方法論的中立主義）に立って、厳密な学の追及を目指すべきであります。これが限界をもっていることと、この追及が限りなくつづけらるべきだということとは別でしょう。この広い意味での合理主義的な学問は、このことによって同時にこの科学を科学たらしめている人間の超越的態度の内的な

教や神学によって信仰が与えられたし、一八—一九世紀初めには哲学が与えた信念や理性が大学に満ちていた。けれども、これらは科学研究における専門主義、特殊化の傾向によって破壊せられた。しかもこれらに代るべき何ものをももたらさなかった。

〔大学の生命と使命〕 以上のべたような困難な問題をもった現代の大学がなおその生命を保ち、本来の大学の使命を保ち、新しく生きてゆくのはどういう方向によって可能であろうか。

大学という語は前にのべた通り university に相当するものであるが、わが国ではこのことばはきわめてあいまいに使われている。日本の大学は戦後の教育改革によって、在来の大学、高等学校、専門学校、師範学校など、高等教育機関のすべてを包括するようになった。けれどもこのことは、在来の高等教育施設を示す一般的名称として「大学」とよんだだけではなく、もっと積極的な意味があった。その一つとして注目される点は、今日の大学は教育内容の点で、従来の大学と非常に違うということである。具体的にはそれは一般教育の重視である。一般教育とか教養というと、わが国ではとかく不明瞭であいまいに考えられがちである。しかし、ヨーロッパの大学ではこれは基本的中心的概念をなしていた。その具体的内容は国によって異り、例えばドイツでは「科学的精神」がアメリカでは「市民的教養」(good citizenship) が中核をなしている。つまり、大学の本質はたんに専門分化的知識技術の研究だけではなく、もっと基本的人間的な教養を高度に教えることにある。この点から考えて、日本の学制改革の特徴は、在来の高等専門学校の大学化と同時に、旧制大学の大学化を図ったことで、教育史的にみてまことに画期的な試みであったといえよう。またわが国では、総合大学がユニヴァーシティで、これは単科大学に対立するものと考える習慣があった。けれども、多くの専門学部のたんなる寄り合いが「大学」ではない。一人一人の学生が将来どんな専門分野に進もうとしていても、そこで高度の人間的総合的教養をうけるようになっていることが「大学」の必須条件である。もしもこのことが可能であるならば、専門学部としては一学部しかもたない大学でも、ユニヴァーシティの名に価するのである。

大学が国家、社会の要求、また大学内部の研究の特殊化専門化によってバラバラになる傾向が強い中で、いかにして統一が考えられるか。大学がいかにして生き生きした大学、真の意味でのユニヴァーシティになるか。

早急な結論に走るのはいけないが、私は中世大学の項でみたようなウニヴェルシタスとしての大学、つまり教師と学生の団体、協同体としての大学になること、また大学が一般的教養、高い人間的教養を目指すこと、これらが現代の大学問題解決の一つの方向になるのではないかと思う。一般的教養というと、何かあいまいなもの、専門的教養の下位にあるものといった印象を受けやすい。しかし、従来のいわゆる教養主義への批判は、今日の実用的思想が大いに支配している時代には当然なされるし、また批判も必要であるが、その批判が、そのまま教養の意味まで否定してしまうのはいけないと思う。教養というものは、人間が職業をもつことによってバラバラに引きはなされるのに対して、人と人とを結びつけるという意味をもつからである。

（全国夏季学校主題講演要旨）

（東京女子大学助教授）

くるのです。

(三)新制大学の一、二年生の一般的レベルにおいて、特に女子学生に対して、現代のプロテスタンティズムが直面しているきびしい問題を直接レアルに誠実にぶつけることは果して正しいのか。問題の圧倒的な重みでつぶされながら耐えているのだということを理解していただきたいと願うことは現実的な方法であるのか。

もちろんそのような批判的破壊的作業だけでなく集会全体としてみれば、信仰とともに希望が、耐えることとともに喜びが語られ、とりなしの祈りが行われております。〃なんじおそれるな〃という開会礼拝の時のことばは集会全体にとって極めてレアルな意味をもっていた筈です。しかしその意味が、つぶされながらも耐えていかねばならぬという批判的な姿勢と結びつかない場合、即ち前述の論争や対立が、それとして正しく機能しない限り、批判は無責任な放言や不毛な破壊、シニカルな揚足とりに終り、希望は幻想に、はげましは麻薬に終ります。

この緊張に耐え得ない、あるいはこの緊張が意味する高度に専門的な（むしろ哲学的な）問題の理解にたえ得ない一般学生のレベル、特に女子学生のレベルにおいて〃福音伝達の方法は如何にあるべきか〃を非神話化や非キリスト教化とは丁度反対の角度からとりあげていかなければならないのではないかと、少くとも私の今までの職業意識からまさしく私の体験として直接にみちびき出されていた方法が反省させられているわけです（つまり私は国立大学の極めて非神話化された（別の神話は沢山ありますが）非キリスト教化された雰囲気の中で福音の問題を主として人間の側からのみ扱っていたのです。

この場合〃人をみて法を説け〃と言わんばかりの現実主義に近い立場でこの問題を扱っているのはカトリック教会のようです。東山荘から降りてきた晩、この夏の上智大学における神学講座及び国立（くにたち）の修道院における黙想会との前後十日間にわたる修養会に参加してきた同学の友人に逢いました。彼は最初プロテスタントでしたが前述のような緊張に耐えられないことを特に身近かな手痛い経験を契機にして痛感し、自分の専門上の研究をもふくめてすっかりカトリックづいている友人です。彼によればプロテスタントからカトリックへ転向する人々の主なる理由の一つがこの点にあるというのです。私の疑問に対して彼はカトリックの微に入り細をうがった現実主義をいろいろ説明してくれました。私はその時、小国のD学園で大兄が語られた無教会主義の人のある種の〃エクスタシス体験〃のことを思い出していました。問題はやはり、私たちの教会にあるのであり、それは前述の論争や批判がけんかとして正しく機能する、つまりコムュニケーションが牧師と信徒の間に正常な形で行われるか否かにかかっているのでありましょう。夏季学校の問題は実は教会に内臓されている問題の一つの変種なのであり「指導意識の過剰」とはそのまま現在の私たちの教会の組織論にむすびついていくのです。〃論争のすすめ〃は〃教会の生命と使命〃にとって死活の問題でありましょう。

では前述のような緊張に耐え得ないのが人間の現実なのであり——その故にこそ〃学問的禁欲〃も有効な意味をもってくるでありましょうが——その人間を「死への存在」としてもう一度方法論の中に追い込むことは哲学者的な「職業意識」のみが耐えうることであり、宗教はどこまでも手放しの〃救い〃でなければならないでしょうか。

実際大学一、二年生の素直な疑いを知らぬ信仰をもっている人、特に女子学生に対し

問題性と裂け目とを露呈せしめるものではないでしょうか。このような露呈によって切り開かれた新らしい地平に、いわば限りない豊饒さが絶対的な貧しさに転化するような零点に、即ち疎外の極限に、立つことにおいて、来るべき何物かに対して謙虚に耳をかたむけるということの外に、学問と信仰とは結びつき得ないように思われるのです。あるいは問いがそのまま答えであるようなきびしい境涯にさんさんたる真昼の光りを浴びて立つとでも申しましょうか。それが少くとも近代科学と合理性の行きつく彼方であり、歴史的にもそれの精神的母胎となったプロテスタンティズムに課せられた態度、即ち「現代」の告発者であると共に同罪の被告人たるものの責任であると思われます。

この事に基いて私は今回の夏季集会において結局は私の信仰理解として学生諸君に解説をし、揶揄し皮肉や冗談を交えて語ってまいりました。それでよいのかという信仰にとって本質的な問題が常に片一方にささやきかけていましたし、それを常に問題としてあらわにする為に論争や批判がもっと活潑でありたいと願ったのですが、それは結局期待はずれであったようです。そしてこれが失敗であったということから、私自身の喋ったことも、その態度をふくめて失敗であった、少くとも非常に危険なものであったということを、幾人かの、口を緘して語らずただ不安げに私の説明に疑惑のまなざしを送った年若い学生諸君の表情を思いうかべながらほぞをかむ思いで思いかえしているのです。「他人の魂の深所を配慮することにおいて果してお前は謙虚であり、祈りに近い気持をもっていたかどうか」について〃道徳的〃に反省しているというだけではありません。私は全く予期しないままに、信仰の導き手であることを余儀なくされ〃指導者であってはならない〃ということをたえず口にする指導者だというまことにやり切れない場所におかれていたのです。しかも神の言葉を口にしなければならないのです。逃げようとは思いませんが、この立場は、大ゲサに言うことが許されるとしたら、バルトがロマ書研究を書かねばならなかった時の問題状況によく似てくるように思われるのです。

(二)非常に緊密なパースナル・コンタクトを必要とする問題が限りなく大きく拡がってきてそれについて充分に話し合う為にはプログラムがつまり過ぎていることを感じます。学生諸君が自分にとって一番関心のある問題を、とぎれとぎれに語り出すのは集会が始まって三日目ぐらいからです。もちろんそのような問題を一般的に表現する術を心得ている人は別ですし、分団の話し合いのレベルとしては相当進んだと思われる頃、全く予期しないような形で原初的な問題をもってまいります。そしてそのような問題が実感として胸底深く沈澱していればいるだけ彼らはその問題を討論の主題と結びつけてゆくほど理論的に訓練されておりませんし、特に女子学生の場合にその素養の欠如が目立ちます。私にできることはたかだかその問題の解説らしいものに過ぎませんが、それさえも結局は補講のような形で別誂いにして一人一人の学生諸君と話し合いをしなければなりません。しかもTutorは分団と聖書研究グループの二つをもっていますから、それぞれに補講を要するとして時間は最低限二倍を必要とします。無限責任に近いような問題を主観的に熱烈なはげましや慰めで糊塗すべく私たち全部がおかれている信仰の病的な危険な状態は非常に多すぎるようです。「十字架を背負って歩くのだ」というコトバが語られる時、それはいささかコッケイであるか、マゾヒズムめいて聞えて



分科会のすべて

—問題の分析・検討・集約—

はじめに

第七〇回日本基督教青年会同盟夏季学校、第五一回日本キリスト教女子青年会全国学生カンファレンス・合同集会は、一九六一年八月二十一日から二十五日まで五日間、御殿場市東山荘において開催された。全国から、学Yを中心に学生基督教運動に連なる指導者の方々と学生二〇二名が参加し、開会礼拝から閉会礼拝に至るまで豊かな恵みに支えられ、力を与えられて山をくだった。集会は次のような内容のものであった。

主題　「学生として生きる」
主題聖句　「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さったのである。だから、堅くたって、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない。」（ガラテヤ人への手紙五章一節）
牧師　渡辺信夫氏（東京告白教会牧師）

プログラム

一、聖書研究「ガラテヤ人への手紙」
宮本武之助氏（東京神学大学教授）

二、主題講演
「日本社会における大学」
隅谷三喜男氏（東京大学教授）
「近代大学の理念形成の歴史」
松川成夫氏（東京女子大学助教授）
「学問の意義」
中川秀恭氏（北海道大学教授）
「学問の意義」
鳴海　元氏（同志社大学教授）

三、研究協議分科会（テーマと指導者）
1、大学の機能——大学と社会
鳴海　元氏（同志社大学教授）
2、大学の自治と自由
中川秀恭氏（北海道大学教授）
3、技術革新時代における大学
隅谷三喜男氏（東京大学教授）
4、産学協同
桜井信行氏（青山学院大学教授）
5、学生運動
徳久俊彦氏（東大ＹＭＣＡ・ＯＢ）
6、キリスト教主義大学の問題
長　清子氏（国際基督教大学教授）
樋渡雅弘氏（東北学院大学講師）
7、地方大学の特質
大島孝一氏（岩手大学助教授）

て、その人の魂を配慮するというおそれを持ちながらも、現代プロテスタンティズムが直面している問題状況をぶつけたり、信仰の分析的理解が、自己によって立つ土台を限りなくけずり取ってゆくことだということを、僅か四日や五日の集会で説くということは、いわゆる Fundamentalism とは丁度反対の方向に立ちながらも気狂いめいた所作かもしれません。しかも私としては、D学園での閉会礼拝の時のとりなしに対して、私もまた此の問いかけに対して（使徒行伝十二章十五節）気狂いめいた形でしか応答し得ないこと、即ち分析的批判者が陥り易い最大の心情的欠陥は本質的に気狂いになり得ないひややかな傍観者の態度なのだということを教えられ、さとされた結果であっただけに、ほぞをかむ思いというのもあながち誇張ではない複雑なやり切れない痛みを憶えるのです。この過度の緊張から胚胎するいささか病理学めいた徴候は、政治現象に適用された場合、ナチズムに現われた道徳的シニズムと熱狂主義およびアングロサクソン的偽善とが生れてくる共通の社会心理的根底であると指摘されていますもっと別の現実主義に眼をひらかなければならないのでしょうか。

四私が「合同集会」に問題を感ずるのは前述のような理由に基きますが、それは「合同」をやめることによって除去出来るものではありません。「合同集会」を特に女子学生の側が望んでいることには尤もな理由もありますし、結局問題は学生基督教運動全体として担われ解決されなければなりませんから、「合同」をやめることには賛成致しません。現在のプログラムをそのままにして日数をもう少し延ばして、せめて一週間位にしたらと考えています。夏季学校のためのワーク・ブックの編集をふくめて主催者側の準備は大変行き届いたものでしたが、たとえば事前に学習すべき参考書の通読などを現実に果していない学生が多いようでした。主題講演の題目や聖書研究の内容を、原理的な問題の分析や反省から始り具体的な問題に近づいてゆくように配置しプログラム上の講演の展開に即して分団の議論も進めるように工夫したらどうでしょうか。相当の時間を自由時間や消燈後とは別に講師との個人的話し合いにあてられるよう、つまりプログラムの内容を現在程度にして日数をのばすか、日数がのばされない時には、プログラムをへらすかしたらいかがなものでしょう。

全くの思いつきのようなことを書きならべてみました。来月はこちらで御会い出来ることを楽しみにして居ります。

くの問題をはらみながらも、新学制によって男女共学が大学において実現している現実からの要請に応えるものとして、また統一学生基督教運動形成への試金石としてこの合同集会は歩みをはじめ、今年でその三回目を迎えたのである。

今日の現実の中に学生基督者としていかに闘い、いかに生きるか、これはわれわれの運動の中で問いつがれてきた、そして今後も問いつがれていくであろう恒なる課題である。われわれはいま、今日の現実の中にあってこの課題といかに取組んでいるであろうか。合同集会の実現によって統一学生基督教運動形成への一歩が試みられ、また昨年の安保問題に対する対決を迫られた状況の中に、われわれはむしろ統一を欠き分裂に傾く多様性をわれわれの運動の中に見出し、現実の問題に立向うときの無力感を自覚したのではなかったろうか。この無力感の克服がわれわれの戦いとなった。この無力感――「キリスト者」であるが故の無力感！――はどこからくるのか。この行詰りを打開しようとする試みは、まず学生基督教運動の本質を問い直すという古くしかも新しい課題に取組むという形をとってあらわれたのである。

このような状況の中で、この課題と取組むてはじめとして、学Y現状分析に関する全国的なアンケートが昨年秋学Y前常任委員会によって行われた。これは実際的な目的としては、一年間の活動の反省、全国各地の学Yと常任委員会とのコミュニケーションの回復、次年度の全国的運動の計画立案の資料収集などのために試みられたのであるが、その根底には学Y運動の存在意義を本質的に問う一つの試みとしての意図を有していたのである。今年の一月大阪郊外の藤沢会館で開かれた学Yの全国委員会では、このアンケートの結果から学Yが現在内包している問題を相互に貫徹しあうべき四つの領域に分けて現状分析のための研究分科会がもたれた。

一、学生YMCA・YWCAにおける聖書研究――その意義と方法

二、学生伝道の問題――主として学生間のコミュニケーション

三、大学問題――大学における学Yの意義と使命

四、政治社会問題に対する学Yの態度

以上の四項目がそれである。各分科会においてはいたずらに理想論にはしって現実から浮上ることなく、全国の学Yが当面している危機的な問題を実状のままにとりあげて協議することに努めた。そして夫々の問題領域の組織的な研究をさらに進めていくべきことが確認されたのである。この三日間にわたる協議の内容は報告書としてまとめられ、画期的な成果として各方面からの評価を得た。

この全国委員会においてこのような背景の下に今年の合同集会の準備がはじめられたのである。そこではまず主題に関する協議がなされた。学Yの、学生基督教運動の本質を問うことから出発して相当明確にされてきたわれわれの運動の擁している問題を、いかに整理して、この問題をさらに発展させる方向に合同集会の内容を、即ち主題を決定するかが協議の中心であった。そこで示された主題の方向は協議における次のような発言の中に見られるであろう。即ち、「アンケート、現状分析によれば、学Yの共通の問題は個人の信仰、信仰の確立深化ということである。従って神と私との主体的問題を追求したい。」「信仰は主体的実存的であるが、信仰そのものも信仰の働きも共同体の中の共同の働きとして現実化されるものである。信仰における個人と共同体の関係は択一の問題ではなく、両者のダイナミックな統合にある。そこで昨年の

8、一般教育の問題
青木　茂氏（東北大学講師）
9、人間形成におけるサークル活動と学Y
竹内　誠氏（大阪YMCA主事）
四、日韓学Y交流の夕、WSCFの夕
五、学Yの夕

七〇回を迎えたYMCA夏季学校を記念して、石原　謙先生に感話を伺った。尚第一回の出席者　牧野虎次先生は所感をよせられた。

以上のプログラムを含んで五日間、毎朝の礼拝、毎夜の晩禱によって一日がしめくくられ、又第四日目夕刻には夕陽会がもたれた。全体の始めと終りは開会ならびに閉会礼拝によってしめくくられた。

特にこの合同集会における研究協議分科会の協議の報告を以下に掲げるのであるが、その前に今年の合同集会がもたれるに至った背景と、その中で研究協議分科会がもたれたことの意義とを説明することからはじめたいと思う。

七〇年の歴史をもつYMCAの夏季学校と五一年の歴史をもつYWCAの全国学生カンファレンスとは夫々別個の生い立ちをもっている。YMCA夏季学校は、一八八九（明治二十二）年夏、京都の同志社においてウィッシャード校長のもと全国から四六二名の参加者を得てその第一回が開催された。その主題というべきものは、伝道——特に学生あるいは、知識人に対する伝道の問題であった。この学生伝道、学生の福音理解の深化の課題は、その後今日に至るまで夏季学校において、さまざまな歴史的状況の中で異った形をとりながら繰返し問い続けられてきたものである。

また第一回夏季学校は最初の全国的な基督者学生の連合の動きでもあった。じ来、学生基督教運動の全国的協力の実はこの夏季学校を通して挙げられてきた。日本基督教青年会同盟結成の動きもここから生れ、同盟組織結成後も実質的な全国的協力の推進力として夏季学校の果してきた役割は大きいのである。

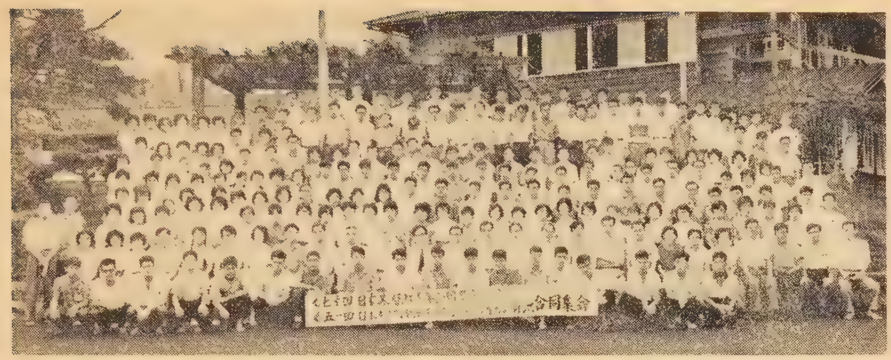
また、第一回夏季学校には百名近くの女子学生が参加して男女共学の実をあげていることも注目すべきことである。この第一回以来今日に至るまで七〇回に亘って、めまぐるしい時代の変転の中に、夏季学校は聖書研究を中心として、その時々の時代の波の中に学生としていかに闘い、いかに生きるかを求めつつその歴史を刻み来ったのである。

一方、YWCA全国学生カンファレンスは一九〇六（明治三十九）年青山女子学院において開催された第一回夏季修養会によってその歩みをはじめた。一五〇名を数えたその参加者は、当時の女子高等教育機関に学ぶ女子学生を中心に一般女子青年をも加えて構成されていた。YMCAの夏季学校におけると同じように、学生伝道——特に女子学生としての福音理解の深化がその伝統的な課題であり、またこの学生を中心とした運動が日本YWCA運動の先駆的な役割を果したのである。この夏季修養会は、その後もYWCAの最も重要な仕事の一つとして毎年行われ、これを計画し、これを助け、これに参じた人々に与えたものは大きくかつ強かったのである。しかし明治以来の日本の女子高等教育の性格、その与えられた社会的位置、意義によって、この運動が性格づけられてきたという面も認められるであろう。

このように、同じく主にある運動ではあるが、生い立ちを異にし、夫々独自の歩みをたどって来たYMCA夏季学校とYWCA全国学生カンファレンスとは一九五九年以来合同で開催されることになった。二つの独自の性格をもった運動を一つに結びつけることに多

して一の意味は、われわれの生を許された場であり、信仰の現実的契機であるところの学生としての存在、また学生としての存在を決定づける大学の現状さらに大学を容れる日本社会の現実をあるがままの姿で客観的に認識することにあった。また「生きる」は、信仰の主体的実存的問題を聖書に学ぶことを意味するものであった。そしてプログラムにおいては、前者は大学と社会の現実の客観的分析、認識のための専門的な講演と研究協議分科会、後者は「キリスト者の自由」をテーマとする様な聖書研究という形で、根底においては礼拝に支えられ、祈りに支えられつつ、夫々探究していくことが確認された。この両者は夫々信仰の現実的契機と信仰的契機ともいわれるべきものであり、窮極的には信仰者の主体において統合されて信仰の事実となるものであるが、しかしこの統合ということは、安易に用いられると厳しい問題追求の態度をなおざりにすることの言訳にすりかえられる危険性がある。従って、みだりに主体的ということが強調されて問題探究の厳密さと科学性からの逃避がなされないよう、安易な統合を警戒するように集会内容、プログラムを検討すべきであることが語られ、確認された。

このような基本線に則して、常任委員会がプログラムを検討して前に掲げたような内容のものを作成し、集会が開かれたのである。プログラムは四つの主題講演、九つのテーマ別研究協議分科会、聖書研究、それに開会礼拝、毎日の朝拝と晩禱、夕陽会、閉会礼拝などの礼拝を骨子として組まれた。まず隅谷教授の「日本社会における大学」、松川助教授の「近代大学の理念形成の歴史」の二つの講演によって現在われわれがおかれている大学のもつ問題領域に広く目を開かれ、次に参加者各自が自ら選択したテーマの分科会において、その広い問題領域の一面をとらえて徹底して批判的に事実を分析し、問題の客観的認識に努める。それと同時に、中川教授と鳴海教授による、夫々哲学者として、自然科学者として「学問をすることの意義」をいかに考えるか、の講演から、学生たる存在の意義を大学の現実の事実分析に求める作業(の方法)への一つの忠告、主体的な呼びかけを期待する。という順序をプログラムは意図していた。一方において宮本教授の指導による「ガラテヤ人への手紙」研究は四日にわたって毎朝行われ、参加者はまず十名程の分団にわかれて読み合せをし、一堂に集って講演を聴き、再び分団にわかれて問題を語りあうという方式がとられた。分科会で語られる現実の問題との結びつきを考慮に入れての形式であるが、この方式は学Yにおける聖書研究の方式として示唆に富むものであると思われる。合同集会の根底を支える礼拝は渡辺牧師の指導の下にまもられた。社会や大学の現実問題と対決し、事実分析をおし進めていくとき、そこから逃避する場をではなく、現実問題の中にますます冷徹に、またますますねばり強く立向っていく力を礼拝からわれわれは与えられるのである。今年はこの礼拝のために心を砕き、祈るところの蔭の奉仕者として礼拝委員が選ばれ、毎晩もたれる晩禱をも担当した。また晩禱はとりなしの祈り(intersession)としてまもられ、世界平和のため、教会と教職者のため、日本の国のためなど祈るべき事柄を規定して公同の祈りをもった。これは、現実をはなれて信仰がありえないように、共に生きる隣人、そして彼らと私とすべてにかかわる世界の現実をはなれて祈りがありえないことを特に公同の祈りという場においてわれわれに想い起させるに充分であったと思われる。



合同集合参加者全員

主題「共に生きる」において意図されたことと同じ内容をもう一度深く追求したい。」「信仰は現実的な契機、媒介を必要とする。われわれは現実の社会の認識や社会に対する関心態度を見極めなければならない。」「学園における証の群、学生であるということにわれわれの共通の基盤がある。その基盤に立って学Yは成立つ。従って学生としての応答、責任が明確にされなければならない。また、大学共同体として社会に対する責任がある。この二点を学Yは考えなければならない。」（以上、全国委員会報告書による）ここにおいて、今年の合同集会の内容となるべき問題が幾分整理されたように思われる。それは一つには個人の信仰の主体的な問題である。「信仰とは何か」「私は信じているか」との問を抱いて、われわれはその解決への道として聖書を読むこと、聖書に聴くことを知っている。しかし、聖書の研究、殊に学Yにおける聖書研究の意義と方法が大いに検討され研究されねばならないということが強調されていることは、反面、原理的にも技術的にも大学における基督者共同体においてなされる聖書研究の意義、存在理由が曖昧であることを示し、またこの曖昧さに対する多少のあせりがあることをも示していると思われる。またもう一つの問題は、大学問題及び政治社会問題に対する学Yの関心態度の問題である。われわれは、信仰の現実的契機としての現実問題に対して目覚めているべきであるとの共通の理解に立つに至っている。信仰に生き、基督者としての生を実現することは、われわれ学生にとって学生としての生を全うすることに他ならない。従って、学生としての日常生活の中に自らを集中することとともに、あるいはそのことの中に、大学の中にあり、またその大学を容れる日本の社会に生きる学生としての私の存在の意義を公式的にではなく多様に主体的に追求することがわれわれの課題となるのである。

全国委員会が終り、主題の検討は各単位Yに持ち帰られた。三月になって東山荘に地方委員と常任委員が集まり、主題決定のための地方常任委員会が開かれた。常任委員会から主題案として、信仰の主体的実存的問題を問題とする「キリスト者の自由」、学生の現実を問題とする「学生とは何か」、この両者を結ぶ意味で「責任ある学生」の三案が提出された。そして協議の結果、主題は「学生として生きる」と決定された。この主題の「学生と

ばならず、学生教授の質的低下を来した。第二に大学教育の中に一般教育課程が設けられたことによって、分化発展して行く科学の統合と広い識見を持った市民を育成することにおいて、ある程度の役割を果したことはたしかであるが、これによって専門教育の時間が食われ、教育内容が広く浅いものになり、又教授不足から一般教育や、学生の補導に教授を使い過ぎるために、目的たる真理の探求が脅かされつつある。第三に一般教育においてマスプロ的教育がなされ、大学の一つの目的てある学問を通じての学生・教授相互の共同体の中での結びつきが困難となり、この困難の中にも学生教授の交わりを持とうとする例えばカウンセラー・アドバイザーグループ・補導教官制等の便を計ってあるが、高等学校教育のゆがみ（これは大学の試験制度に問題があるのだが）によって、大学生の間に、大学問題に対する意識がうすく、せっかくの機会も無駄になっている現状である。特に単科大学においては一般教育は外部講師によることが多く、科目数に制限があり教授との接触は益々困難となり、短期大学においてはこれに時間が足りないことが加わって問題をさらに大きくしている。第四に総合大学といわれている大学の問題点であるが、各学部間の交流は殆んどなされておらず、学問の共同体たるべき大学が単に単科大学の寄り合い世帯と化しており、分化発展される科学が広い視野において統合せられるという学問の真の意義が認識されていない。

以上の外に私立大学において理工科系の学部が少ないことは私立大学の教育における大きな問題であるし又社会問題でもある。又、国立・私立を問わず言えることであるが財政的困難によって教授の不足、設備の不備がおこり、大学教育に大きな影響を及ぼしている。例えば最近では産業技術の急速な進歩に伴い産業界での研究がそれについて進んで行くが、大学においては設備の不足によって研究が進まず大学が学問によって社会をリードして行けなくなっているのではないか。

又我々が忘れてはならないことは戦後国家主義権力から解放され、始めは民主的な運営が始まったかに見えたが大学が再び前とは逆った形で権力からの圧力を受けつつあるということである。それは特に教育学部に顕著に表われているが、厚生補導の強化によって思想統制がはじまりつつある。これは一つの例であるが、現代の情勢について何も知らない学生に向って主体的に本当の教育について考えている学生、教授の活動について、やたらに左翼呼ばわりし、その結果いわゆる善良な、主体性のない教育者が作られて行くのである。しかも学生の主体的活動には圧力を加える。

例えば「純粋にアカデミックな研究会を学外には関係なく、学内だけで持つから開かせてくれ」と補導委員長の所に行くと十分理解してもらえるように説明したにもかかわらず「どうしても開くというならお前たちの就職の責任は持たん」と脅迫されるのである。これに対して我々は学生代表と教授会の話し合いの会を持っているがなかなかうまく行かない。

我々は以上のような多大な問題を持った大学に学んでいる。我々はこうした現状にコンプレックスを感じたり、失望したりしているのみでよいのか。断じてそうではない。我々はこのような現実をふまえてはじめて現実に生き得るのではないか。ここにおいて再確認しなければならないことは、その宿命として、あくまでも分化発展し、事実を事実として究明する科学と取り組むことが大切であり、そのことによって時代の要求に少しでも答え得る

以上のような内容のプログラムの中でもたれた研究協議分科会は、根底において礼拝と祈りに、また聖書研究に支えられつつ、徹底して批判的に大学の現実におけるわれわれの問題を観察し、分析し、認識するという方向づけを与えられていたのである。分科会のテーマは、今日日本社会においてわれわれの学生としての存在を性格づけている問題の中から九つに整理してとりあげられた。そして特に、大学の問題が社会の問題との動的な関連においてとらえられるべきであること、即ち、我々は大学の中にある学生として大学の中から社会の問題を認識するのであるが、このことが社会の問題の認識を弱めるように働くのではなく、むしろこのことによってわれわれが大学の歴史形成に積極的に参与しうるように働くべきであること、が考えられるよう期待されていた。しかし、果して分科会における実際の協議がこの方向づけに則って徹底して批判的に行われ洞察豊かな知識をもたらしたか、或いはせいぜい信仰の現実的契機に対してわれわれを啓蒙したに止まるか、は必ずしも明らかではない。そこには方法論の問題、プログラムの組み方、参加者側の準備などの技術的な問題などさらに検討されるべき事柄が多く残されている。一応このようなところから出発した分科会の協議が、どのような道筋をたどり、どのようなものを生みだしたか、またこの合同集会でとられた問題追求の方法論が、或いはその方法論と実際にとられた方法とのギャップが、その結果としての協議自体によってどのように評価され、どのような新しい方向づけを加えられているかなどは、各分科会の協議報告の中から読みとられるべきであろう。(東京常任委員会)

大学の機能—大学と社会

(第一分科会)

この分科会でのねらいは、第一に大学の理念の歴史的変遷を学びその中に大学の機能の変化を見る。第二にその機能変遷に時代性が如何に関係しているかを知る。第三に、現代の大学が如何にその機能をはたしつつあるかを見、大学の社会的存在たることを認識し、その上にたって、学生である自分を、もっともよく生かす方法を考えることであった。

第一、第二の点については、四つの講演において学び、その内容をあまり批判もせず、話し合うことが少なかったことは、我々の考えの足りない所であった。そこでここでは特に第三の点について考えてみることにする。

現代の日本の大学においては、アメリカの大学理念に関係が深く、その目的を指導的市民の一般教育に置き、ワークブックによると一、職業教育二、知識の進歩、真理の探求、三、一般教育を通しての学生と教授相互の共同体内での結びつき、四、学生生活の健全なる発展等以上四つが均衡を保ち続けるときにおいてのみ最大限に機能が果されるとあるが、本分科会においては、この表現は平面的に解釈し勝ちなのでこの四項目は深い内容を持ちダイナミックな関係にあることを話し合った。

このような理念を持つ現代の大学は如何なる状態にあるのか？ 現代の大学は殆んど戦後の学制改革により、日本の実状をあまり考えないでアメリカの制度を取り入れ、旧制の高等学校・専門学校・師範学校・専攻科までも大学に統合されたり昇格されたりしたのである。その結果として、まず全体的に言えることは、多くの学校が大学に統合昇格されることにより、大学数及び学生数がおびただしく増加し、それに伴い大学の運営上に大きな問題が生じて来た。その具体的問題として第一に学生数の増加に伴い教授を増加しなけれ

く、そのおもむくところ学生を人格者としてみるのでなく、一個のいうならば商品としてみる傾向が生じている。それはマスプロ講義、極端なスポーツ奨励、高額な授業料といった現象に端的に見られ、学問をせんとする意欲を減じさせている。またこれに密接な関係をもって商業主義の蔓延は学生の勉強意欲を喪失させるのみか大学の存在自体を真理探究の場から一つの立身出世の階梯としての場へと変化せしめ、学問の意義を単に知識の獲得といった本来学問そのものからすれば従属的なものであるものへ変化させ、学問の自由を蚕食しているのである。また、マス・コミュニケーションの異常な発達は大学の正しい社会批判を行う機能を麻痺させ、社会の動きを見透す力を失わせている。

以上の如く分析していくと、痛感されるのは研究者自身の「学問の自由」に対する意識の低さ、意志の脆弱性である。学問の自由を蚕食する外部的力はいろいろあるが、それに対する内部の抵抗力の脆弱性が一番問題になるのではなかろうか。このことは次に考えようとする「大学の自治」の問題においても痛感されるのである。

次に「大学の自治」という問題であるが、この問題は先に述べた如く学問の自由と密接な関係をもったものである。それ故学問の自由を失わせるものと大学の自治を脅かすものとは密接な関係をもっているもので、これらを別々に論じるのはかえって現状の認識を誤らす可能性があるが、しかし便宜上分けて考えると次のようなものがあげられるのではなかろうか。

即ち、よくいわれる如く学生運動が大学の自治を内部から侵すという問題であるが、一体大学の自治とか学問の自由というものは市民的権利、基本的人権と密接な関係をもっており、学問の自由、大学の自治とかいった問題は基本的人権の擁護の上に成立するものである。たとえば戦前の日本の大学の例にあった如き、またアメリカのマッカーシズムにみられるごとき、そこにおいては大学の自治、学問の自由は、思想の自由という基本的人権を放棄した上での形として守られてきたといえるのである。一体このような「大学の自治」「学問の自由」は真のものか反問せざるを得ないのである。学生運動の基本的目標は、学問の自由を守るための基本的人権を守る運動となることであり、その限りにおいては正当と思われるが、ただ社会に対する情勢判断が充分でない場合、学生運動は大学の自治を警察権の介入、政治的圧力の介入といった形で内部から崩していく要因となることがあるのである。

また大学での自治の運営の仕方であるが、大学を構成する重大な要素である学生の自治参加が許されていない大学が多く、また最高自治機関である教授会にしても充分民主的な運営がされているということは必ずしもうなずき得ない点が多い。たとえば教授の任命に関していえば、助教授、講師の教授会への参加が認められていない大学では勢い助教授達の自由な発言がなされない状態を生みだしている。このことは教授—助教授—助手といった、大学での因習、徒弟制度といった民主的ならざるものが未だに多くの大学を支配していることを示している

一方、私立大学においては多少事情が異り、理事会の権限が強く、理事に選ばれる者はいわゆる政治的実力者と呼ばれる者が多く、大学の自治が産業界、財界の手に移り、大学の自治といっても形式上のものになっていく傾向がみられる。

それでは、真の学問の自由とは何であるか。ここで学問的真理というものを考えた

のである。しかしそれと同時にその限界に気がつかねばならぬ。一般教育をここに生かし学問の真の意義を見ようではないか。学生時代にまずこのことに徹することによって、大学に学ぶ意味を見出すであろう。では我々はただ勉学するのみでこのような大学の現状を黙して見ているのか。否。ここであげた問題はごく一般的な問題であって、我々のいる個々の大学においてはまだまだ多くの問題がある。我々は学生としてこれらの問題に常に具体的に目覚めて学友に呼びかけ大学に働きかけて行くよう確認をなした。大切なことは我々がこうした問題に常に目覚めていることである。そして我々は一人ではこうした問題を解決できない。

大学の自治と自由　（第二分科会）

分科会で吟味検討された事柄を要約すると以下の如く報告される。

「大学の自治と自由」という問題に入る前に、まず「大学の自治」「大学の自由」とは何を意味するのか用語上の吟味確認をした。大学とは真理探究、教育の場と定義してよいと思うが、この真理探究、教育は学問の自由を前提としてはじめて成立するものである。学問の自由とは、批判の自由、研究対象選択の自由、研究方法論選択の自由、発表の自由、教授の自由を内に含むものである。また大学の自治とはこの学問の自由を保障するために大学の管理、運営を大学人即ち大学構成員自らによって民主的に行うものである。その例をあげれば学長の選挙権、教授、助教授などの選任権を有するなどである。また学生の側からする自治とは学園の自治である。しかし、この学園の自治とは学問の自由を支えんがための自治であり、いわゆる治外法権とは区別して考えられなければならない。

以上のような認識の上に立って、現実の大学の自治、学問の自由を脅かしているものにどのようなものがあるか、現状を分析した。現在学問の自由を脅かすものは、戦前の京大事件、矢内原事件にみられるような、また戦後においてはレッド・パージなど、また近きにおいては愛媛大事件にみられるような直接的な政治的圧力としてあらわれるよりも、むしろ目にみえない形で国家権力の圧力とは無関係の形であらわれている。学問の自由は法律的には一応まもられているが、研究者がより高度の研究をしようとした場合、現在においてはその研究を継続しようとした時に生活ができるといった保障がない。勿論研究対象を異にすることによって事情は異る。工学部の場合などはこの逆であろう。そこでは産業界からの積極的な保障が会社奨学金という形であらわれている。しかしこのことは逆に研究者のとぎすまされた学問的良心を曇らせる働きをしているのではないだろうか。要するに生活の不安定という、一見学問とは何ら関係のない経済的な力が、学問の自由を間接的にではあるが強力に支配しているのである。また、文部省の方針として大学に格差をつけている。いわゆる学科制と講座制大学であるが、講座制においても、特に学科制においては研究するに充分な予算を与えられず、研究の必要性が否定され、教育の場としてのみの大学に制限されようとしている。この文部省予算の僅少さということは、必然的に産業界と大学との関係を密接なものとし、現象的には教授が会社顧問となったり、会社からの委託研究にのみ専念しようとする傾向を生じさせている。これは学問の自由への挑戦であり、学問するものの内部よりの自由の放棄である。また私立大学においては、現在その建学精神は失われ大学の企業化の傾向が著し

たのである。このような技術革新は、社会に取入れる場合に全く有益なものばかりではなかった。この導入に際して大きな社会問題が起っているのである。例えば、産業革命時の熟練労働者の失業、一九二九年からの世界恐慌等が適例である。このような訳で、我々も現代における技術革新の種々の問題を取上げなければならない。まず三つの大きな問題に大別すると、1、景気変動に耐えうるか、2、中小企業にとってどうであるか、3、労働界に対する影響はどうか、ということになる。まず第一については過去の大きな経験を通して企業内におけるオペレーションズ・リサーチによる綿密な調査法の発達、又国家的には財政政策の発達によって相当に回避出来ると思われる。特に市場調査によって生産と消費のバランスコストの設定等による調整によって相当修正出来ると思われる。企業間の競争による過剰生産には特に気をつけなければならない。第二に労働界に対する影響であるが、確かに工作機械の発達、自動制御の採用によって直接生産にたずさわる労働者は減少する可能性が大きい。しかし新しい製品、例えばプラスチック、合成繊維、電子計算機等による新しい雇用機会（生産、販売、原料供給等）を得ることになり、むしろ雇用機会が多くなる可能性を持っているのである。又、非生産部門の労働力は増大して行く可能性を持つのである。新しい技術により機械が高度化すると自然に技術者の高度化が必要になってくる。労働者ですら専門知識が必要になる。それ故に高卒の労働者が出現するのである。従って未熟練労働者や老年労働者の転換等にはむしろ大きな問題になるのである。賃金制においても問題になり、最低賃金制の確立、完全雇用政策等の確立が必要になり、現在それは進行中であり、所得の格差はむしろ小さくなる傾向すらある。第三に中小企業の問題では、オートメーションの設備は非常に大きな資金が必要であり中小企業にとってはとても不可能な場合が多いのである。それ故に大企業の系列に入るか又は大企業と競合関係にない企業でないと存立がむずかしいという事になり大きな問題になる。

経済的な面での問題はこのようなものであるが、技術革新の他の面での影響として社会的心理的なものがある。現在、人間疎外という事が問題になりそれに対して人間関係論（ヒューマンリレーション）という学問が発達して来ている。このように技術革新はその産業構造に非常に大きな変革を与える。そのような社会において、我々の大学が如何なる影響を受けているかを分析することは非常に意義深いことである。

技術革新下の社会では専門職業家が出現し、人間形成の機能を失しつつありかつ専門職業家養成の機能を大きく伸ばしつつある今の大学に学ぶ者は、人間関係の内面的触れ合いの場こそ与えられないが、現存の社会構造の中では確実な地位を与えられ、その意味では自分を立てることができるし、それは社会では新しいエリートとなっている。又、企業の能率化が進めば、先にも述べたようにレジャーが生じる。しかし社会は技術革新により機械化し人間の自主性は失われつつある。そしてしかもこれは「能率化」によって得たレジャーによっても回復し難いもののように思われる。この点に関しては又後でふれたく思う。

こうした社会の中で大学は如何なる変化をしているか。一口に言って大学は専門職業家の養成所と化していっているといえる。高度生産をする社会はそこに従事し得るような組織人としての能力を養うことを大学に求めるのである。そして日本の資本主義体制の中に

い。科学的真理はその非完結性という性質を有することが特徴である。従って、その非完結性を鋭く認識し、常に自己批判的であり、謙虚であるといった態度、いわば真理に対して開いた態度、そういった態度からでてくる科学者相互の遠慮のない批判、それが学問の自由の内容をなすものであり、また学問の自由を守るものである。反対に学問、科学を絶対化する、たとえばマルキシズムを完全無欠なものとして信奉するといった態度、或いは科学万能主義などの態度はそれ自体が誤りであるばかりか、学問の自由を根底的に喪失せしめるものである。

しかし、先述した科学の非完結性を鋭く認識するということは一体どのようなことを意味するのであろうか。それは、歴史を学ぶことによって得られた、或いは学問することによって深く学びとりうるような一つの説に対し、他の説があり得るという認識を通じての非完結性の認識という意味ではなく（勿論これは必要なことである）、唯一の絶対者を知ることによって、被創造物の被創造物なることを知ることによって得られる科学の非完結性に対する認識、この認識をもった者こそが真理に対して開いた態度をとりうる者であり、科学を絶対化する危険におちいらないものであり、真の意味で学問の自由とは何かを知るものであり、それを守り得る者である。

このことこそ、われわれ学生キリスト者が「大学の自治、学問の自由」という問題に関っていく場合の基本的態度を示唆するものではなかろうか。

技術革新時代の大学　（第三分科会）

この分団の構成メンバーは、その殆ど全てが、工科の学生と社会科学系の学生であって、両者が各々の立場から、このテーマを非常に違って理解してこの分団に集ってきたようであった。他のテーマについても言えると思うが、事前の説明が必ずしも充分でなかったことは残念である。かくして我々の討議は最初から、スムーズに運ぶという訳にはいかなかったが、とまれ以下に話された内容を、発題をはじめに、まとめて見た。分団の雰囲気をこれで伝えるのは難しいが許していただきたい。

現在のレジャーブームと云われているものは何を意味するものであろうか。多分これは社会生活の向上、生産力の向上ということから来ていると考えられる。かつて考えられなかったものの発展、例えば原子力の利用、オートメーションの採用などはこの結果起ってくる生産力の発展と増大、これは何から来るかと言うなら、ここでとり上げる技術革新である。

技術革新とはシュンペーターの経済発展の理論の中にあるイノベーション（革新）という言葉によって与えられているものである。これは新しい発明、技術の採用によって生産力の増大、生産方法の質的向上等によって、社会構造をも変革することを意味するのであろう。

現在は第四の技術革新の時代と云われているが、それを証明するものとして種々の革新がある。戦後、新しい技術、新しい燃料、原子力、オートメーションの導入によって生産力は激増した。これによって人類に富を与え、人間に労働手段の質的向上により余暇を与えることになった。とにかく技術革新は既存の生産方法を全く革新するのである。歴史的には第一は産業革命であり紡績、蒸気力の利用、第二は鉄道鉄鋼の時代、第三は電気通信の技術コンベアシステム等が台場して来た。これ等は生産を飛躍的に発展せしめて来

同好者の集まりであり、共同体という性格をもって出発した大学が、現状において、破壊されつつあるという状況に対する不満の形として生れた、という傾向が実質的に強い時にどうしても、逃避的性格を免ぬがれない。こうしたところで為される問題解決が、どうしてもその本質に迫り得ないのはある程度仕方があるまい。ところで、一般的に、サークルという範疇で、仮りに、出発したとしても、我々の学Yは、この問題にどう対処すべきであろうか。学Yは、学内の一般サークルの逃避的性格を、たえず、チェックしつつ、敏感に、大学の持つ問題の中心を認識して、学内にアッピールすることにより、サークルの問題意識の方向を、中心に向けるべく、努めるべきである。その限りにおいて、学Y自身は、極力、逃避的性格の解消に努力すべきであるという意見が出されたのは、注目に値する。勿論その際、学Yの基盤たる、キリスト・イエスの福音に、立ち戻る必要があるのは、いうまでもあるまい。学Yの中にあって、我々が、学生生活を送る際に、メンバー、個々の問題として、大学で学ぶ我々の責任と、その自覚の重要さを指摘しつつ、ただ単に、清貧に甘んずるといった態度を、すてむしろ、ある意味では、責任を自覚しえないような状況下にあっても、その責任の在りかを求めていくという姿勢の中にこそ、キリスト者としてのあり方がある。そしてそれに耐えうる力を、学Yが、我々に与えるものでありたいという願いと、その努力の必要さを、我々は確認し合った。又我々は同時に、自からの現状を良く見極め、必要に応じ、時を得ては、大学や社会に対して、積極的な発言をなすべきであり、ここに我々の〃学生として生きる〃の一つの面があることを銘記したいと思う。

産学協同　（第四分科会）

協議に先立って、学生発題が行なわれたのであるが、問題が、ある一点にしぼられてはいたものの、現象そのものに対しては、一般的認識が、極めて薄い点を考慮して、学生発題も、協議の出発点を付ける程度に止った。まず、学生発題においては、アメリカで起った産学協同の問題が、今や日本の大学における課題となりつつある。それ故、私達は、この分団で、産学協同のテーマを通して、社会構造を解明しつつ、大学と社会の関係、さらに進んで、その関係の中に現実に生きている、私達自身の在り方を求めてゆきたいという希望が出された。産学協同における問題点は、大学の独自性が失なわれないか、社会の要請に対して、大学側は、主体的なプランを持っているのかどうかという疑問、又産学協同といった事柄が、生み出されてきた母体ともいうべき、科学史に於ける技術革新が、必然的にもたらすであろう人間疎外の問題を、与えられたテーマの中で、如何に捉えて行くべきであるかという問題提起がなされた。次に協議に入り、先ず、この産学協同が、産業界の側から、盛んに大学に対して働きかけられている現状に注目して、何故産業界は、かかるプロジェクトを推進することを迫られているかを見た。その結果、理工系学生の質的、量的不足が、技術革新の波を受けて、決定的となった。殊に、その質的な面において、技術革新の驚くべきテンポの速さにも耐えうる人間が、要求されているということ。それ故、産業界は、現在の学生の狭い専門的知識と技能の補強、中堅技術者の不足を補うといったことを当面の目的としているのではないかということが明らかにされた。話をさらに発展するに先立ち、私達は、産学協同を口に

おいて要請されるのはすぐに役立つ職業家であり、大学ではその面の機能のみが強調され他の機能は次第に失われている。更に、戦前技術者養成の機能を果していた旧制専門学校が戦後新制大学になったということも上の傾向を一層強めた一因になっているのではなかろうか。もっとも本来大学はその学問本来の性質としていわゆるデモーニッシュな、人間性を破壊し、無視し、方法論的にではあるが無神性を呈する。しかしそこをくぐり抜けた所に人間形成が成されるべきであり、大学の有すべきこの大きな機能が少くとも現在日本の大学では見られない。

こうした今の大学の中で我々は現実に次の事を自らの身辺に感じる。すなわち、大講堂でのマイクによる講義に端的に見られる講義の一方交通とマスプロ化、大学の数の増加ということも手伝って、マスプロ講義以外に能がない大学教育者、その故に又ますます無味になり申し訳程度に行われる一般教育科目とそれに対する学生の無関心、時代と共に広範囲にわたってくる必要基礎科目の知識の断片的皮相的且つ盲目的吸収等々である。これ等に関してワークブックにも挙げられていた各問題点と同時に又次のような事も考えられる。現代の社会の風潮によって学生は自らの殻に閉じ込もり思想、悩みを外に表さない。更に講義にリアリティーが感じられない。かくして、教授達との内面的な接触がなされなくなっている。ここに我々は、大学内での共同体的人間関係の喪失を痛感する。この人間関係の問題を、技術革新の中で捉えるときに、一般的には、前にも触れた如く、職業の細分化、機能化による自分の役割に対するプライドと情熱の欠如、マスコミの発達による人間の主体性ある思考の停止等により、人間にとって生きるに欠くことの出来ない、人格性は、次第に軽視される傾向にある。

今こういった人間疎外を考える場合に、技術革新といったような外面からの疎外状況と、人間自身の内面の疎外状況の二つに便宜的に分けて検討してみた。前者はすでに見た如く極めて、社会的・歴史的な面をもつものであり、これを阻止することとは出来まい。むしろこういった疎外状況から解放される鍵は、後者にあるとして、特に後者に焦点を合わして問題性を追求して行くことにした。技術革新に依って、今後、ますます増大するであろう、社会的疎外状況は、かっては、「象牙の塔」であるとして、自他ともに許していた大学に対しても、容赦なく、迫りつつある。今日我国に存在する大学の中のあるものは、こうした社会的、歴史的な挑戦に対して、既に戦闘意欲を失なって、盲目的に従うことにのみ汲汲としている大学が、皆無であるといえようか。

こうした状況下にあって、大学で学生として生きている我々は、如何にこの現実を認識しつつ、これに反応を示しつつあるのか。若し我々が、いたずらにこうした大学の動きに同調して、仮りに、積極的にこうした状況に協力をしないまでも、黙して語ることを止めたとすれば、そのことは大学の自己放棄に協力することと、結果的に同一視されることになる。そして、こうした一連の大学の自己崩壊の過程を通して、そこに生活する我々自身も又、学園における人間関係のきまずさ、学生同志のコミュニケーションの不足といった事態に苦しまざるを得ないのである。こういった状況を打開する具体策の一つとして、サークルといったものが考えられるのであるが、はたしてサークルがこの問題の解決に寄与しうるであろうか。ここで検討しなければならないのは、サークルが本来的に有するところの性格である。サークルは、一般的にいって、

大学の理念といった面から、日本においては、産学協同が如何に捉えられるかを考えてみた。大学の理念は、大きくいってドイツ的探究的理念、アメリカ的実利的理念の二つがある。アメリカでは比較的スムーズに入り込んだ、こういった協同形態が、日本においては、形式的には、アメリカの教育制度にのっているけれども、実質的には欧州的、ドイツ的色彩がかなり強いために必ずしもスムーズに入り込まない。アメリカにおいては、一般社会人からなる理事会が、大学の最高決議機関として存在しているが、ここでは、社会の要求と、一体化する傾向があり、それに対する反対の動きも、かなり強く出てきている。然し、アメリカでは、一般的に、受入れ体制が、整えられており、学校も、アカデミック・スクールとプロフェショナルスクールの分化さえ見られる。一方ドイツでは、工学部は、大学の学部ではないという極端な見方もある程で、果して、日本としては、どういった方向に大学が向けられていくかが問題である。ともかく、日本において、東大工学部と実業界との結びつき、近畿大学で原子炉を日立と共同で、運転しつつあるという事実もあり、次々と生じてくるケースみずからが、徐々に答を出してゆくであろう。学生という枠の中にあって、直接社会の中にはない私達としては、立場によって異る条件を充分考慮して、大学本来の目的と実業界の姿と、日本の社会の現状という三角形を意識しつつより良きあり方を追求して行くべきであろう。今後の対策としては、中堅技術者が不足していることは事実であり、ドイツ的理念であろうと、アメリカ的理念であろうと、この社会的要求に応えて行く必要がある。そこで、高等専門学校（技術者の養成）の設立に、充分注目してよい。これは、グラデュエイト・スクールとは別に、入学者たるものも、実践教育というものに意を得てゆくことを前提とすれば問題はなかろう。人間疎外はそれぞれ違った形で、常に存在するであろうし、それは機械化し、組織化された中で、生活していかねばならない人間として近代文明の中では避けられない問題故に、その機能化された中で、全体との関連において、自分の与えられたパート(役割)を自覚することにより、有機的な存在として自らを把握し解決してゆかなければならない。こういった問題意識をもって、常に批判的に〃産学協同〃という命題を追求して、その解決策を求めてゆくべきであるといった協議がなされた。

学生運動 （第五分科会）

本来的にいえば、学生運動の中に、一般サークル活動も含まれるが、私達はいわゆる学生運動である自治会活動を中心に考えた。

㈠ 現在の学生運動の分析と問題点

現在の学生運動は多くの問題点をもっているが、現象的にみれば次の三点にまとめられる。

(1)学生運動の分裂
(2)活動家と一般学生の間のギャップ
(3)学生運動からの転向と脱落

(1)の原因としては㋑イデオロギーの相違、たたかう目標（敵）の相違、㋺戦略、戦術の相違、㋩外部の一般政治、社会運動の影響、等が考えられる。(2)の原因としては、㋑一般学生の意識の低さ、㋺活動家の独善性、特に、勉強するという、個々の学生の基本的立場を認めず、学生運動としての統一性を欠いていること、㋩あまりにも活動家に前衛意識があること等が考えられるが、㋑が特に強調されねばならない。(3)の原因としては、㋑現実的問題と信念の 葛藤（就職）、㋺フラストレー

するものの、本当に、その実態を把握しているのであろうかという、素朴な疑問が生じたので、まずその元祖であるアメリカにおける産学協同の実際を知り、次に、日本では一体どうなのかという現状分析を行うことになった。前者においては、産業界が、大学に研究費用を出すという形での財政的援助、正課授業の中における実習の重視、産業界からの研究委託、企業と大学との人的交流、企業と学界との研究交換及び、共同研究、育英資金、夜間公開講座等の提供に依る産業人の産業教育、ビジネス・スクールの設立といったものが、具体的なものとして、指摘された。後者においては、産業界から大学に対するプログラムというものは、日本の産業界が、伝統的に有する偏狭さのためか、ほとんど見られない。それに対して、大学側はこれも一部の大学、ある学部においてのみであるが、公開講座、育英資金、大学教授の産業界に出向いての、講義等が、行なわれており、産業人の再教育の機会を提供している。最近、この両者の歩みよりにより、通産省産業合理化審議会、生産性本部、などが生れて、徐々にではあるが、両者の協力体制が、整えられつつあるという点が指摘された。このプロジェクトが、実際に行われている学部を挙げると、次の如くである。理工学部——実習、委託研究、教授のひきぬき、経営経済一般——会計学、経営者養成、ＩＢＭ、農業化学——実地教育の徹底化。ただここで、産学協同というものを、私達の問題として捉える際には、その滲透の度合が、その深さにおいても、特に、その質的な面において、相当相違があることを、注意すべきであるという発言があった。以上の討議を綜合しつつ、今一度、私達は、最初の出発点に戻って、産学協同の意図するところが何であるかを考えてみたのである。そしてそれから、大きくいって、三つの立場が明らかにされた。第一は、会社側から、協同として伸びてゆくことの実利的な意味、第二は、学校側から協同として伸びてゆくことの意味、例えば、資金援助による研究設備、施設の補充拡大、実業教育の促進、第三は、もっと広い社会的見地から、国家的、合理的、経済的伸長の意味を考えて行く立場がそれである。しかし、これは、このプロジェクトを肯定してという前提があるのであり、現実には、こういった産業界との協力は、大学が本来的にとるべき道でないとして、むしろ非協力こそ、大学の真の使命をはたすことにとって必要であるとしている大学も少くない。彼らが、反対するのは、このプロジェクトにより、大学の自治がおびやかされ、教育の不動性、学問の自由が侵害され、その結果、本来、社会に対して超越性を保ち、批判と指示を与えていくべき大学が、支配階級の追従にのみ、汲汲としなければならないのではないかという心配があるからに他ならない。こういった見方に対しては、大学がはたして従来のような形での社会的エリートの地位を固守すべきであるか。又大学が、その独自性を主張するためには、むしろ、積極的に社会の中におりて行き、その中で、社会に対して、指導性を与えて行くべきであり、もし、大学が、社会の中に止まることに耐えることが出来ないとすれば、はたして、大学の発言に対して、社会が、どれ程の権威を与えるであろうかという点に、批判が加えられた。それに加えて、産学協同というプロジェクト、そのものが、社会からの今迄の大学教育への批判を含むものであり、それに対する我々の批判は、社会の現在の姿を客観的にとらえ、その上での、社会の中にある大学への批判になるということを見逃がしてはなるまい。私達は、ここで、少しく観点を変えて、

勢、軍備拡張、核兵器保有の増大等世界的な危機の中にあり、日本においても、日米軍事同盟強化、自衛隊増強、核ミサイル化等平和に逆行した動きの中にある。太平洋戦争二回の原爆を経験した日本国民にとって「もう戦争はしたくない」というのは、学生のみならず国民的感情である。私達学生はこれら国民的基盤の上に立ち、その感情を単なるムードとしてとどめるのではなく、平和をおびやかすものをしっかりととらえ、積極的に戦っていかなければならない。特に最近、憲法改正の動きを中心に、文教政策、マスコミ政策、労働民主団体政策を通して、戦争政策をおし進めるために分裂工作が進められている。我々学生はこういった事態を正しく見極め、一般国民としっかりと手をにぎり、平和の願いを実現しなければならない。

「民主主義」の課題においても、政防法を中心として、民主団体の圧迫、分裂工作等が進められている。今日、日本において、民主主義は形骸化か実質化かの大きな曲り角に立たされている。我々は、この民主主義の実質化の芽をつぶさないためにも、企業、地域共同体、家庭、学園等々、我々の日常生活の中へ、民主主義を浸透させることが何よりも必要である。特に婦人はこの責任の半分を担っているのであり、この意味で日本の女子学生の果さなければならない役割は大きい。又互いの人格を尊重し合うという民主主義の根本理念において、私達キリスト者としての役割が強調される。

以上「平和」において「民主主義」においても我々学生は極めて大きな責任をもっている。我々は「学生として」の正しい立場をしっかりととらえて、この責任を果していかなければならない。そのためにも、学生一人一人が統一ある学生運動に結集し、教官、職員と共同し、又他の民主団体とも手をとり合ってその役割をも果して行く必要がある。このことは又「大学の自治・学問の自由」を守るためにも必要である。

(三) 学生運動における学Yの態度

去年の安保闘争の経験は、我々学Yのメンバーにとって、一つの反省の契機となった。我々はこの安保闘争の中での学Yの状況を反省しつつ、学生運動の中における学Yについて考えてみた。

学Yとして声明を出し、デモをしたところ。学Yとしては活動しなかったが、各自一般学生として共に活動したところ。学Yとして議論したが具体的には活動しなかったところ。全然無関心であった学Y。ミッションスクールにおいて、学Yとして活動しようとしたが、学校側の反対にあったところ。等々その状況は千差万別である。我々はこの中から、大なり小なり色々の問題点を見出すことができるが、次の二点に関しては問題性を痛感したのではなかっただろうか。

(1)積極的に活動した学Yを含めて、全体として「受身的」であった。我々学Yは、このような社会問題に対して本来的に「受身的」な態度しかとりえないのだろうか。

(2)受身的にしろ社会的政治的問題の重要性を感じたが、信仰の本質的な深さとの関係において、不安があった。我々がこのように現実の社会において政治社会問題に深くかかわればかかわるほど信仰の深さが真に必要とされるということ。以上の二点である。

我々学生キリスト者は、現実社会の中にあって、現実の大学の中にあって、キリスト教福音信仰を証しするために、召し出された者である。このことは、この世の社会そのもののために、大学そのもののために我々が存在せしめられているということであり、従って「証し」も、この現実の本質と深くかかわる

ションの解消として学生運動がなされていること、（一部ではあるが）等があげられる。

以上三つの現象的問題点の外に、この三つの現象的問題に本質的な影響を与えている第4の問題として、学生としての主体性ある運動になっていないことをあげなければならない。これは、(イ)一般学生、活動家共に、学生であることを本質的に理解せず、偶然に学生であることから出発していること、(ロ)大学そのものに対する理念がないこと等々がその原因として考えられる。

(二)　戦後学生運動が果たしてきた役割と現在の学生運動のもつ意義

以上色々な問題点にもかかわらず、私達は、戦後学生運動が日本社会の中で果してきた役割を高く評価すると共に、現在の学生運動のもっている意義を高く評価しなければならない。戦後学生運動は、「平和と民主主義、より良き学生生活のために」のスローガンのもとに進められてきた。平和に関しては、「軍国主義教授の追放」に始り、「再軍備反対運動」「原水爆実験反対」「砂川等基地化反対闘争」「安保改定反対」「ミサイル基地化反対」等々の闘争を通して、又、民主主義に関しては、「学園の民主化（学生自治会の結成、学長の公選等）」に始り、「レッドパージ反対」「イールズ声明反対」「破防法反対」「警職法反対」「選挙法改悪反対」等学園の自治を守ることと並んで、積極的に平和と民主主義のためにその役割を果してきた。特に、一九五六年「砂川（基地化）闘争」を中心にくりひろげられた原水爆基地化反対闘争は、日米軍事同盟強化反対のために、又原水爆禁止の願いにつらなる強い国民運動の一翼を担ったものであった。様々の困難の中にあって真に大衆の一員として戦ったこの運動は、強力な弾圧下にあって、失敗したとはいえ、国民の中に大きな反響を呼びおこした。そして結果として、国民をして原水爆基地化に対する強い反対の決意を示させ、基地拡張問題をこれ以上伸展するのを防いだ。又それと共に、党派を越え、各階層を一致させ、平和と独立、民主主義のための統一行動がおこり、警職法並に安保体制反対闘争の地盤が築かれていった。

一九五九年〜六〇年「新安保阻止闘争」は日米軍事同盟の再強化という平和への脅威に対する反対運動として、又民主主義をふみにじった議会運営に対して広く国民的反対運動へともりあがった。その過程において学生の果した役割は、「国会乱入」「六・一五樺美智子さんの死」など国民一般に与えた影響は非常に大きなものがあったが、勤評・警職法等につらなる一連の反動体制の危機を感じとり、日本の民主勢力の中にあって確かに大きな位置をもつものであった。その後「新安保体制」強化のためにも、一層の反動化が推進され、治安維持法のむし返し政防法をもち出して大衆運動を弾圧し、又憲法改悪によって日本を核武装させ戦争への危機へ導く一連の政策に対して、学生運動は闘っている。

一九五〇年に起ったレッドパージ反対イールズ拒否闘争において、学生運動が、大学の自治と学問の自由を守るために戦ったことも、又高く評価されねばならない。東北大に端を発したCIE・イールズの反共講演拒否、教授追放レッドパージ反対闘争は、当時全産業に起ったレッドパージに於て勝利を得た数少い例の一つである。

以上戦後、学生運動が果してきた役割と意義をみたのであるが、現在も又、これらの運動の上にたって、二体制間の対立と危機、国内政治の反動化の中に、「平和と民主主義、より良き学生生活」のために戦っている。

「平和」に関しては、ベルリンをめぐる情

受けさせないという強い態度を取っている。この結果学生はしいられて出席するだけて神への讃美も感謝もなく後の方では悪い時には週刊誌を読むといったような有様である。こういう状態は大学も知らないわけではないだろう。いろいろ批判を受けつつもあえて強制的に行なうところには何か意味を見出しているとも考えられる。たとえば真の礼拝は教会てのみ可能であり、大学においては教育的な意味を含めて学生にキリスト教を伝え理解させる為の礼拝であると考えられているのではないだろうか。反対に自由出席にしている大学では出席者は在学生の一割程でキリスト者教授、学生の出席も多くはなく考えなければならない事である。礼拝についてはこの他にそのマンネリズムに関する問題があげられる。これはキリスト教主義大学だから必ず礼拝を守らねばならぬといった考えの下に単に形式的なものになって来ている結果ではないたろうか。又ノン・クリスチャンが礼拝を担当したり、教授が研究の一端をひろうするような講義化した礼拝もあるし、常に伝道集会化した礼拝もある。

以上のようにキリスト教主義大学での礼拝にはいろいろな問題が見られる。どうある事が一番いい事なのかはっきりした結論は出なかったがやはり礼拝は人数はあまり問題ではなく、たとえ小人数でも神を真に心から讃美し感謝する人、又、神を求める人の献げるものであって大学の中でたとえ小さくても真の礼拝が献げられるところに意味があるのではないだろうか。唯この場合全学に対する呼びかけを絶えず忘れない事が必要である。

次に人間教育について問題となった。人間教育は勿論学問していく事の中から得られるのであるが交わり（学生間、学生教授間）の果す役割は大きいと思う。現在の大学においては真の人格的交わりはほとんど得られないといわれる。勿論キリスト教主義大学も例外ではない。学生数の増加、講義のマスプロ化は学生に大学共同体としての意識を失なわせ悪い意味の個人主義を助長している。主イエスを頭と仰ぐ共同体であるキリスト教主義大学においては、お互いを神に創られた人間として全人格的に受けとめ真の交わりを持つ事が可能でなければならない。しかし大学全体がそうなっていない現在私達キリスト者学生は相手に対して本当に精神的関心を持ちその問いかけに対して耳を傾け相互間の対話を大事にしなくてはならないと思う。教授との人間的交わりは学問を通して、共に学問の道を歩む者としてなされるべきであるが、その接触の中で教授の信仰、その人間性から得るものは非常に大きいと思われる。又学生も教師も共に一キリスト者としてあずかる礼拝において真の互いの交わりが間接的にではあるが出来るのが本当の姿であると思われる。

次にキリスト教主義大学に於て学問がどうとらえられるのか、信仰と学問とのかかわりについて討論された。原理的には中川先生の御講演をうのみにした格好であった。学問の世界というものはあくまでも方法論的無神論がつらぬかれるのであるが学問する主体がその学問が絶対的なものではなく限界を持つ事を知り又信仰を持つことによってその人が全人的に学問することになるということが正しいのではないだろうかと話された。私達の大学において信仰の名の下で、あるいは人間教育の名の下に学問追求のきびしさとかその学問の弱さがかくされていることはないであろうか。宣教の使命を持ちつつ大学とは学問をするところであってそこに学ぶ私達学生はもっと真剣に学問しなければならない。勿論学問性とか知性の名の下に信仰の生長がさまたげられるようになってはならない。学問が絶

ことなくしてはなされえないのである。教会の主であると共に、この世の主であり、大学の主でもあり給うイエス・キリストを証しすることは、まさにこのことに外ならない。

現実の社会の中にあって、現実の大学の状況にあって、深く生きることを求められている我々にとって、本来的に「受身的」であることは許されないことである。それは問題点の(2)の意味においても、信仰の深い本質において統合されるべきことである。

我々の現実は、学Y自身の問題意識の低さのために、自治会活動等に参加している学友の足を引っぱっているというような状況である。学Yは内面化してはならない。むしろ現実の社会に対して、大学の状況に対して、自治会活動等を通して積極的に働きかける必要がある。学Yは、信仰の深さにおいて、交わりの深さにおいて、そのようなメンバーの真のささえとならなければならない。（本来的には教会に連る。）「学Yがささえとなる」とは、学Yが全体として、現実社会、大学の現状に対して問題意識をもち、積極的にかかわっていることを意味している。そして、機能的には学Yメンバーの一人一人が、自治会活動等に参加し、学Yは真にそのメンバーの現実に生きるささえを与えるものとなるべきである。

四、当面の問題提起

我々の討論の中で十分になすことができなかったが、当面の残された問題として以下の点をあげておきたいと思う。

(1)、現実の社会状況を正しくとらえるために、学Y内で社会科学研究会等を作る必要があるのではないか。

(2)、ミッションスクールでの学生運動に対する評価はこのままで良いのだろうか。

(3)、我々の求めた学生運動の中での学Yのあり方と教会との関係はいかにあるべきか。

(4)、教授等との交わりの確立と、大学の理念目的の追求を新しい学生像形成のために、我々は学生として、真に求める必要があるのではないだろうか。

キリスト教主義大学の問題
（第六分科会）

この分団の出席者は三八名（集会出席の各キリスト教主義大学から一名は参加していたと思われる）でディスカッションは三つに分れてなされたが発題会は合同で行なわれた。そこで第一にキリスト教主義大学という言葉はおかしいのではないか、キリスト教はイズムではないからキリスト教大学という方が正しくはないかということがいわれた。しかし一応この言葉が現存のクリスチャンカレッジを指すものとして議論が進められた。発題されたのは次の三つの大きな問題だった。第一はキリスト教主義大学においては宣教が目的か、教育（かくされた形での宣教を含む）が目的なのか、又キリスト教的人間形成が目的か学問が目的かという問題。第二は信仰と学問について二つが原理的にどう関係するのか、又私達の実際の問題としてどういう形をとるのかという問題。第三は信仰も学問も人間形成もキリスト教的ムードにひたっているのみではないだろうかという問いかけであった。

分団に分れてからのディスカッションは具体的な問題から進められた一番大きく取り上げられたのは礼拝の問題であった。真の礼拝はいうまでもなく霊と真をもって献げられる神への讃美と感謝である。しかし一般にキリスト教主義大学で行なわれている礼拝は真の意義が失われている事が多いと思われる。現に或る大学では、強制的に出席させて出欠をとり週二回以上の欠席がある場合は試験を

学において、ここに学Yが一つのサークルとして大きな意味をもつと思われる。学Yの中にもいろいろ問題はあるが、学Yが話し合いの場をもち、広く求める人をうけいれる態度を要求されてくる。学内における聖書研究、ノンクリスチャンを交えた話し合い、学外への働きかけなど、種々の活動の中で最も大切なことは、たとえ表面には見えなくともその底にいつもキリストが生きているものでなくてはならないということである。機関誌が有効に使われるよう考えなければならない。特に一県にいくつもない大学の小さなグループとしていつもはりきった力を得るために先輩との交流が強く要求される。また先輩も大学卒業とともにクリスチャン卒業ということからまぬがれうるわけである。世の荒波にもまれながらも、図太く信仰を持ち続けられるだけの強さを各人がもてるまでに強くなければならないのである。

次に、地方に大学があるということについて考えてみた。卒業生を受入れられないのに一県に一つの国立大学はつくられ、乏しい研究費にあえいでいる。「広く地方の文化を向上させる」という理想と、この情ない現実との大きなギャップをいやでも認めなければならない。はたして本当に地方にあるということは必要なのかと考えざるを得なくなる。しかしやはり必要だという答が出てくる。地方にいなくてはできないその地方の理解という点である。土地にへばりついて生きている人々の生活感情と実態はそうたやすく理解できるものではない。これを無責任に都会文化で染めあげようとするところに大きな問題があるのである。地方大学はその社会を認識、理解し、社会も大学に大きな期待をかけてくる、こういう理想をわれわれはもっている。これから時間をかけてこの理想と現実とのギャップをうめて行かなければならない。

ただ、ここに誤解されやすい一つの問題がある。それは「地方でもじっくり落着いた研究はできる。さわがしい都会よりも静かな田舎でやった方がよい」という考え方である。一応もっともらしくきこえながら、これほど地方大学を別荘地か何かのように見た甘い考え方はないともいえる。地方には地方のよさがある。そこでなければできないこともあり特色も持っている。研究もたしかにやれるだろう。しかし現実をもっとはっきり見なければならない。今の不満足な欠乏だらけの大学を何とかしなければならないという気持を先に持ってもらいたいのである。このままに放っておいて前記のようなことばが出てくるところに中央集権的文化の無責任さを感じるのである。

地方大学において学生としてのびのびと学問することができるようになるまでに、また学生キリスト者として真に生きられるようになるまでに、われわれは熱意と誇りをもって現実を生きて行かねばならない。

一般教育の問題

（第八分科会）

第八分科会では一般教育の問題というテーマの下に熱心に討論をした。まず第一に我々は一般教育の大学に於ける現状を再認識するという所から始めた。此処で我々は現状の一般教育に対し制度の面あるいは内容の面からの不平不満を経験による事実を通して存分に（講師学生共に）ブチまけた。その中、最も辛辣なのは、授業に対して教師学生共に熱が入っていない。教師はティーチングマシンだし学生は最早サブリーダーにしかなり得ない。という意見であった。一般教育が理念としては非常に重要視されているのにもかゝわらず現状は極めて軽視される傾向にあるという実

対視されないこと、そして学問が自分に与えられた使命につながっていくものである事が必要である。

最後に政治問題に対してキリスト教主義大学が積極的に何らかの態度をとったり発言したりすることがありうるだろうかという事が話されたがキリスト者であってもそれぞれ立場や考え方の異なる多くの人々の集りである大学がそのようなことは出来ないと思われる。唯そこに属するキリスト者が個々の信仰的決断によって何らかの政治運動に参加する事は大いにありうるわけである。大学においては一人一人が福音の真理に生きる生き方、考え方の根底として把握すること、そして実際の行動においてそれに基いて主体的に決断していく事を学ぶのがキリスト教主義大学における人間形成とも言えるわけである。

以上のようにディスカッションとしては三分団まちまちであり話題も具体的なことがより多く取り上げられた。この中で私達の間に明らかになって来たのは、大学は学問追求の共同体であってそれがキリスト教主義にたっており主イエスが大学の主であっても、そこではやはり学問が真剣になされなければならないという意識が生じて来たように思える。そしてそこで同時に宣教の使命を負っているということ——ここでいう宣教とは伝道のみを意味するのではなく交わりを通しての人間形成（キリスト教的人間像を形成）を意味する——を忘れてはならないし、学生一人一人に生きてゆく為の本当に正しいものを与えるように呼びかけていかなくてはならない。しかし学問は学問、人間形成はキリスト教でという姿勢でいいのだろうか。大学の本質である学問をキリスト教的ムードの中にいい加減にする事の誤まりは明らかになったが、学問とキリスト教に真の大学としての結びつきがなければ本当のキリスト教主義大学になりえないのではないだろうか。現実問題として礼拝問題等を取り上げることは勿論大事であるが、このようなキリスト教主義大学の本質論、そのあるべき姿の追求がこれからもっとなされる必要があるのではないだろうか。

地方大学の特質

（第七分科会）

まず最初に、「地方大学」という言葉が曖昧に使われていて、具体的にどういう大学をさすのかはっきりしていないということを強く感じさせられた。メンバーの中にはキリスト教主義大学、伝統ある医学部、問題をもつ学芸学部などさまざまの学生がいたので、「地方大学」という言葉のもつニュアンスは別にして、「地方にある」という点から考えることにした。

まず、いわゆる地方大学にあるといわれる劣等感というものから考えてみた。そこには入学時からある劣等感とともに、不満足な講義からくる「いらだち」とか「あせり」のようなものがあるのに気付いた。新制大学として出発したばかりで、伝統もなく、講義数も少く、その内容も設備も貧弱であり、自分のやりたいことに打ちこめないということである。また、学芸学部などには、教官も学生も少しも興味をもてない、意味のないような講義も、資格を得るためにやらなければならないという問題がある。特に貧弱な講義の多いといわれる地方大学においては、その不足面を補い、より多くのものを得るためにサークル活動が重要な意味をもってくる。これを逃避といってしまうことはできない。学生同志の話し合い、またできれば教官も交えた話し合いが、大きな支え合いの場となってくるのではないだろうか。

無気力になりやすいといわれている地方大

基盤とするが故に、教養と信仰の問題は、学問（理性的、科学的知識の体系）と信仰の問題になる。ではその場合、学問と信仰の関係はどうなるのか、という問題につき論議した。此処で話した事は次の様なことである。

ⓐ他の一般科学の体系の中での神学的位置づけはどうなるのか、ⓑ神学部のない日本の大学でこの問題は科学の自己批判による外は個人の問題として信仰と学問の関係を問うていいことになる。ⓒ此の様な個人の集りである人間集団は Organization になるのか Co-mmunity になるのか。ⓓ方法論的無神論に立つ現代科学はその中に人間疎外の問題を含むとして、その場合の現代人の自己疎外の問題をどの様に考えるか、ⓔ信仰と学問の問題は信仰が自己疎外を克服することが出来るかどうかの問題に代ってゆく。ⓕこの問題に対し自己疎外の徹底、即ちその克服過程であるとみるか、それとも自己疎外を含む人間的理性を超越した、より一般的な Perspective に立つ信仰は可能であるかどうか、といった問題であるが、問題がかなり高度にわたって進められたため、一般的に飽和状態、いや消化不良の前兆さえ出て、とてもまとめることが困難であった。協議としても結論を得る迄には達しなかったので此処では問題が提出されたという所にとゞめ、問題は今後の研究課題として残して置こう。

人間形成の場としてのサークル活動と学Y

（第九分科会）

三つに分けて発表する。第一に人間形成とは何か。第二、人間形成はサークル活動の中で（この場合、特に学Yを取り上げるが）一体どういう形でなされているか。第三、学Yの運営の問題。

まず人間形成とは何かということだが、大学の三つの機能としてワークブックには、一般教養と職業教育と人間形成があげられているが、その三つの中でも特に学Yを含むサークル活動には人間形成の面があげられるので人間形成とはどういうことなのかそれを定義づけてみた。人間形成は、授業、ゼミナールで得られるような知識的なものを自分のものとすると同時に、ウイズダム（智恵）の涵養を図るということであるというところに意見が一致した。能力を拡大しながらウイズダムを自分のものとしていく、そのウイズダムの涵養の手段としてサークル活動があげられるのではないかということである。ウイズダムの涵養には、人格の確立、道徳的成長、将来社会的人間となるための訓練、そういったものがある。そしてそれらを涵養するためにサークル活動があるのではないかということになった。又、人間形成をするための手段として、特に学Yに限ってあげてみるならば（学Yに限らず、私達クリスチャン学生として）、最も良いクリスチャン以外に人間形成は望めないといったような強硬な意見も述べられた。

二番目の人間形成はサークル活動、特に学Yの中でどうなされているか。まず学Yと他のサークルとは一体どういったことが違うのだろうか。他にも種々な文化的サークルがあるが、人格の完成は、どこのサークルでも目指していることである。特に学Yにとっては、信仰の追求ということが他のサークルと一番異った点として上げられるのではないかと思う。学Yについて考えてみると三つの面が考えられると思う。証し、交わり、奉仕。信仰の追求を根本に置きながら、証しと交わりと奉仕、この三つの面を拡げて行くのが学Yであるまいかということになった。人間形成はそういった学Yでどういう風になされるかということだが、まず学Yに入るにしても、

に嘆かわしき結論に至ったその原因を次に掲げて置こう。(a)、マスプロ化された現代の大学においてはとにかく人数が多すぎて教師と学生との間には極く例外的なものを除くと何らコミュニケーションの成立つ余地がない。(b)教育制度の模倣にその欠陥がある。(形式だけの模倣では内容が伴なわない。) (c)、予備校化した高校に学んで来た我々に一般教育の重要性とか、存在意義について正しい判断を下し得る能力がすでに養われているかどうか疑しい。(高校からの悪循環) (d)、受入側大学当局の怠慢、(e)、中告制度、(f)、出席率が"優"を支配する現状。(g)、学部間教師相互の人間関係。等々

さて次に我々はかく暴露された現実に対して如何に対処して来たか、又いかにすべきかについて、論じた。これは行きつく所、現在の状態のまゝの一般教育が続けられゝば定めし教師も学生もその質は低下するであろう。それを防ぐ唯一の手段は両者が共に自分自身で勉強する事であるという事であったが、次にそれに如何に対処して来たか又いかにすべきかにつき二、三の具体例を示めそう。それは、ⓐ一般教育そのものに対して我々学生の主体性、積極的な姿勢が見当らない。仮りに一般教育に対する価値を大いに認識し授業に出ても凡そ人間形成などと云う一般の理念とは程遠い貧弱な内容では失望せざるを得ない。ⓑ一般教育の設定そのものにも問題があるが、人間形成という意味に於て全く裏切られた一般教養に対するむなしさをゼミナール、サークル、あるいは、学Y活動の中で補って来た。ⓒ現在における一般教育の実情はとても我々を勉強する様にはしむけてくれない。然し我々は環境が勉強させてくれるのを待つのではなく、一般にしろ専門にしろ、我々自身の勉強し、学ぶ、本を読むという態度が環境をも漸次作りかえてゆくものだと知るべきである等々であったが一般に如何に対処して来たかという所では、卒論を前に、又は、就職問題を控えて、又その他色んな問題に接し今、広く学び広く考えかつ広くまとめるという一般教養の必要性を痛感再認識しているというものが多かった様だ。そこで第三に我々は更に一歩進んででは、現状はこうではあるが元来一般教養とは何かという問題にふれてみた。

これは一般に一般教育の理念あるいは存在意義というものに対する我々の考えをまとめたものになるが出来るだけ分科会で使われた言葉をかりて表現すると次の様な見方があった。

ⓐ一般教養は文化の進展と共に幅広くなる、知識の量、これについてゆけるだけの幅広い知識を生み出すもの、ⓑ学問には基礎学的なものと、応用学的なものがあるが、その中で一般教養とは広く社会に適応して行くために必要な Wisdom 的なものを学びとる事である。ⓒ共通の話し合いの基盤となって広く人格的な交りの場を作り人間疎外、人間関係の分裂に和解をもたらすもの、ⓓ綜合的に広く学び考えかつまとめていく力、綜合力を養成するもの。等である、然し此処では(分科会ではの意)一般に云って一般の教養が言葉の理解だけで終ってしまい、現実に生きる問題としては全く消化されていない様な傾向があるが教育の目的が、概論だけに終っていいものかどうか、現状を分析する事以外に何ら公けの意味に於て積極的な打解策が講じられないのは何とも憤慨やる方ないと云った感概もあった事を記しておこう。

最後に第四では講演あるいは聖研に対する感想批評を通しながら「教養と信仰はどういう関係に立つか。教養を支えている Wisdom を学問的知識 Knowledge と分けて考えた場合、教養という一個の全体的智恵は信仰を

規定しうるのか、又逆に、宗教団体であるとして、その中で満足出来るのか、という点である。こうした原理的な一つの混乱が、プログラムの面に反映されると、前記の学Yは聖書研究のみで、満足すべきなのかという問をめぐって多くの意見が出された。しかもこういった疑問の裏には、実に多くの問題が隠されていることを、私達は注目した。ただ、はっきりいいうることは、私達は、信仰故に、その実践が許されているのであって、逆は成立しないということ。その意味から、必然的に、聖書の研究が要求される訳である。私達が、より良き聖書の勉強のために用いられるべき、他の多くのプログラムが、若し聖書研究のもつ厳しさを避けるための口実として存在するといった事実が若しあるとするならば、私達は大いに反省を要する。聖書研究が学Yの中心的プログラムであると指摘するとき、それは単なる原理ではなくて、むしろ実質であることを確認した。最後に、この分科会で現われてきた一つの点、ミッション系の大学が、学Yをサークルとして把握する傾向に対して、他の大学では、サークルに対抗するアンチとして、学Yを考えているという傾向かあったことを添加して報告を終りたい。

LMCアジヤ会議

来る十二月十五日から廿七日までインドのバンガローにおいて「世界学生基督教連盟アジヤ会議」(World Student Christian Federation, Asian Conference on the Life & Mission of the Church) が開かれる。主題は「今日のアジヤにおける我らの奉仕への召し」(Our Calling to Service in Asia Today) が掲られている。これはよく知られているようにWSCFによって一九五七年以来進められている「教会の生命と使命」研究企画の一環をなすものであり、昨年フランスのストラスブールで開かれた協議会に連なるものである。しかしこれがいわゆる〃激変する社会〃として緊急の諸問題をはらんでいるアジヤの地域会議であるという点においては、寧ろ一九五八年の暮から五九年初頭にかけてビルマで開かれたラングーン会議に接続する。

ストラスブール会議は Teaching Conference と名づけられラングーン会議はその前駆的企画をなすものであった。 Teaching Conference と名づけられたとについては必ずしも指導する者とされる者といった意味ではなく、互いにきびしく学び合うという点で他者の指導に従い自主的な研鑽をなすということではあったが、矢張り幾分、その道を厳しく戦って来た信仰の先輩に学ぶというニュアンスがあった。(ストラスブール会議報告は本誌六号に詳しい)

これに対して今回のバンガロー会議は、この特異な地域における教会の働きを学び、かつ学生キリスト教運動がそれに上りうる道を知ることが目的としてあげられている。従って強調点が若い指導者の訓練と、行動に対する積極的な方策を発見することにおかれていることは或る程度年令の限定を設けたことによってもうかがわれる如く、いわば従来の成果をアジヤ地域のそれぞれの国で真に豊かに実らせるべく相互に理解と学びを深め合う性格をもつものと云えよう。

聖書研究は、フイリップ・ポッター、小林信雄、バルド・ガランドの三氏により、講演は長清子氏ら八氏により行われる。特に「今日のアジヤにおける革命と宗教」という主題で基督者、マルキスト、ヒンズー教徒の立場でなされるパネルディスカッションが注目されている。

普通のサークルに入るにしても、自分自身の生活態度ということを真剣に問いつめて、それからサークルに入るかどうか、といったことを問題としなければならないと思う。サークルに属する前に、自分はこの世の中に何故生きているのか、何の為に生きているのか、そして大学にあって、一体自分は何をなしたらいいのか、そういった自分自身を振り返ってみることによってサークル活動の中における人間形成というものが、実現されるのではないかと思われる。特に学Yでは、そういったサークル活動の中で、人間形成の方法として、まず一番初めに上げられるのは、話し合いである。話し合いなしには、絶対に人間形成ということは上げられない。話し合いによって人間形成はなされる。例えば、聖研だけではなくて、レクリェーションの場を設けるとか、チームワークを取るような、皆の心の結びつきを導くというようなプログラムを提し進めていくところに心のつながりが徐々にできるのではないかといったことがあげられた。聖書研究だけではなく。話し合いの場所をあちらこちらに作ってやることによって人間形成はなされるのではないかということだった。

他のサークルでも人間形成はできないことはないが、やはりキリスト教の信仰に立つ他には、本当の人間形成はできないのではないかという反省がなされた。

学Yの運営に関して問題になったことは、学Yの閉鎖性ということであった。学Yは普通のサークルと違って信仰に基いて批判してから活動する。ところが他のサークルでは文化的なものを中心にして進めていくから、非常に大胆な活動もできる。学Yの批判性、慎重性が退嬰的活動に通じるとすれば他のサークルと全然かけ離れたものになってしまうのではないかという懸念が生れるのである。学Yの独自性をできるだけ生かしつつ他のサークルのもつ文化的な要素も取り入れながら行ったらよいということだった。学Yの閉鎖性という言葉が生じたがこれは端的には学Yのことは、他のサークルの人はわからないということでもある。又、学Yの寄宿舎がある特殊な雰囲気を作る傾向があったことから閉鎖性が生れたのではないかということも語られた。そして、解決策としては、例えば救ライ活動等の種々な奉仕の場に、文化的要素も取り入れながら行ったらよいということだった。学Yの閉鎖性という言葉が生じたが、これは端的には学Yのことは他のサークルの人には分らないということでもある。学Yの寄宿舎が或る特殊な雰囲気を作る傾向があったことから閉鎖性が生れたのではないかということも語られた。そして解決策としては、例えば救癩活動等の種々な奉仕の場に学Yはぽつんと立っているのではなく、どんどん入って一緒の人間として考え合って行く、そのようなところから学Yの独自性も発揮でき又その閉鎖性も打開されるのではないかということに意見が一致した。

学Yの現状については、各学Yにおいて、聖研、ワークキャンプ、募金運動、ミーティングループ等上げられたが、どれもが、会員は沢山あっても二割程度もっと少い参加者が実状ではないかということだった。交わりが少い、学Yに入っても、学Yが冷く感じられる、ということも上げられた。そして具体的な問題を語り合いながら学Yの本質、もしくは目的といったものが今一度考え直された。学Yの目的の一つは、信仰の育成とそれに基づく実践である。そういった目的意識をもつ学Yが、他のサークルと一緒に活動して行くとき、問題になるのは、はたして学Yを一般サークルの如く文化団体として自からを

なビル、重工業の発達、百貨店の商品、海外市場の開拓等、戦後米国の投資と日本人の勤勉が結合してもたらしたすばらしい成功を示してくれる。しかし、過ぐる安保問題を中心にした日本と米国の関係は、たとえ安保問題とそれに関わる国内政治情況が複雑であるとはいえ一つの笑うべからざる事柄である。

皆がいっていることは、日本は中共において生産される廉価な綿も買いたいし、米国経済圏内の商品市場も失いたくないということである。いずれにしても、各種の基幹産業および重工業の拡大生産、消費物資生産率の急激な上昇、百貨店の様々なセール等は日本の経済力を誇示している。大衆生活の安定は月賦販売の発展によって実証される。職業野球団の旺盛な活動は大衆がレジャーを楽しんでいることを示している。若い学生達の登山熱もそれを示している。日本の生活様式が余りにもアメリカ式であるということは全く予想だにもしなかったことで、私には本当に驚きであった。家庭用品、食料品の種類が印で押したようにアメリカ式になっていた。都市であると田舎の町であるとを問わずに大衆食堂では洋食が主であり、日本固有の料理は高くて庶民の手にとどかないと聞かされた。日本の外で聞いていた日本文化の固有性といおうか、禅や仏教等を通しての日本の精神的風土を都市生活とか、知性人の思想の中で発見することは困難であった。

私が接触した学Yの学生の多くは、経済学専攻の二、三の学生を除いて殆んど倦むことを知らずに実存的自我確立を目指している。しかし、その問題性はヨーロッパ的発想法が強く反映しているように見えたことである。ある集会で出会った日本の旧約学者のひとりが、日本の神学は日本精神を固有にならしめている自然に対する関心に、神学的課題を見出すということによって進められなくてはならないといったことは私にとって大変興味あることであった。

私の二ヶ月に亘る日本滞在は主として学Yの諸種の夏季集会であったので、私の印象もそれに強く基いているとみてよかろう。日本の学生基督教運動はその歴史的性格と組織内容において、YM・YWCAを通じての唯一の全国的運動体であるという点にその特殊性を持っており、どこの国にもないパターンを持っておる。同時に、運動の持つ内容と傾向もやはりWSCFの所謂"Federation thinking"の核心を最も堅固に緊持していると見てよい。それ故、キリスト教のメッセージ(福音)とシチュエーション(大学)の動的な関連性が、その儘学Yの核心として生かされている。学Yの関心と問題性は大学社会と離れてはその意義を問い得ないし、その活動は大学における召命意識を土台にして、プログラムも大学の学問の統一性や目的性と流れを一つにしている研究活動に重点が置かれている。この点に関して、私は日本の運動をうらやましく思った。両国の運動を比べてみると、韓国の運動はたとえ韓国の社会が日本に比べてはるかに緊迫しているとはいえ、思想的、倫理的裏づけの弱い行動に流れ易いという点で日本とは対照的である。

こうした日本の学Y運動の堅実さはどこからくるのであろうか。私のみるところでは、それが日本の学Yを支えている歴史の重みによっていることは勿論であるが、同時に現在の学Yを導いている強力な良き指導力を重要視しないわけにはいかない。日本の学Yは大学という場に足場をもつ教会の有機的共同体として育てられねばならないという神学的理解をもっている。こうした理解が大学社会において具体化されるためには大学の成員である指導力に俟たねばならない。日本の大学に

日本の学生キリスト教運動と交って

姜（カン）玟（ムン）奎（キュウ）

韓国学生のYMCA、YWCA、KSCMの代表団六名は日本の学Yの招きにより、七月十五日までには日本に到着していなければならなかったが、一ヶ月遅れて八月十五日になってしまった。私は、幸に、アメリカ留学の帰途、一行に合流したので、訪日のための面倒な手続きに煩わされることなく、予定していた七月初旬に羽田空港の土を踏むことができた。私は代表団の到着を待ちながら、予定されていたプログラムに独りで参加しなければならなかった。

私個人のことになるが、私にとって日本の土を踏むのはこれが始めでなく、三度目にあたる。最初は、一九五二年秋、韓国動乱が最悪の事態に至り、共産軍が韓国の南端、釜山を残して、全土を席巻した時であった。私は学徒義勇軍に召集され、九州のある山奥で、敵後方奇襲作戦の軍事訓練を米軍によってうけたのであった。勿論日本上陸のための旅券手続きもなく、平服をぬぎすて、軍服に着替え、武器の支給をうけることで、上陸の準備は終っていた。直ちに汽車に乗せられ、別府を過ぎて、翌日の早朝、到着したところは古い日本軍の演習場であった。あちらこちらに立っている軍事望楼が秋のすすきに囲まれているのが印象的であった。

第二回目は、昨年七月、フランス・ストラスブールで開かれたWSCFの世界協議会に出席の途上であった。日本入国管理法により中継旅行者に与えられる七二時間の滞留許可を申請したが、羽田の入国管理官は韓国人に対しては適用されないと告げたので、翌日には離日しなくてはならなかった。あらためて両国の関係に悲哀を感じた。

この度は、早くからの日本YMCA同盟学生部の親切な御協力により、初めての入国査証による入国をゆるされた。韓国の三〇代にとって日本は必ずしも疎遠の国ではない。その言語、生活風習、文化様式等は十七年前の古い記憶を呼び覚してくれるのに充分であった。日本がわが国に残していった生活文化や社会制度は断片的にはその儘旧態依然として保持されているのに、日本においてはむしろ古いものを脱ぎすて、新たに変革しつつある生活や人間の気質をみて、私は異国的情緒を感じた。

日本が戦後の経済再建において示した成功は西独と共に世界の驚嘆である。東京の巨大



南北統一論。(5)、将来の日韓の新しい関係論。その晩の討議内容と私のそれらに対する意見を述べるスペースを充分持てないことを残念に思うが、過去の日韓関係に対して披瀝された二つの日本側の意見を述べないわけにいかない。一つは明治学院大学学生、落合則男君のいったことであったと思うが、「過去日本の韓国植民化において、二つの国を侵略国あるいは被侵略国という問題でみるよりは、そういった悲劇をもたらす過去の国家主義を両国の共同の敵として排撃しなければならない」ということであった。もう一つは同志社大学の小野教授のいったことである。「六〇年前、韓国には近代化過程に必要な民族資本の形成ができていなかったので、一歩先んじていた日本の資本が経済の法則によりそれに作用したのだ。」という発言であった。過去の不幸な歴史に対して日本の若い世代が連帯的責任を感じながらも、前向きの姿勢をとろうとしているこの二つの発言に私は心を熱くされる経験をした。大体において、将来に対する関連や対策のない過去の批判は無意味である。それよりはむしろ、われわれがキリストにあって持ち合うことのできるこの貴重な対話こそ、必ずや二つの国の利益や自尊心のみを擁護しようとしている国際的対立感情を克服させるであろう。具体的な方策のしたがわない概念的主張とか、単なる寛容がいままで教会でよくみられる態度であった。国家間に存在する権力政治とか、経済法則のもつデモーニッシュな力を冷徹に見ぬき、それを指摘しながら進むほかに解決の方法がないのではなかろうか。

私にとって予想外のショックになったのは社会的少数者としての在日韓国人同胞の問題であった。同胞の大部を占める零細民のみならず、比較的成功したといわれる事業家も学生もみな社会的差別待遇に堪えられないでいる。広島で会ったある同胞事業家のいったことによると銀行からの融資は殆んど不可能であるということである。さらにこの人達の経営している工場の労働組合が加えてくる圧力は資本家に対するものでなく対韓国人闘争の気分がむしろ強いということであった。それ故にこの人達はこうした問題に煩らわされることのない遊興飲食に関係する業務をえらばねばならないという。大学卒業の韓国人学生の就職難は日本の経済ブームによる求人難とは何ら関係がないようにみえる。在日韓国人の法的地位問題にしても、青年の将来に対しても、何ら具体的対策をもたない彼らの祖国に対する不信と国家に対する懐疑は彼らの生活に暗い影を投げている。彼らにとって国籍というものは個人を拘束する役割しかもたない。私が出席した在日韓国人教会の青年修養会で、愛国心ということがしきりに論議されていた。しかし、日本で生れた二世は国語も知らなければ、民族文化も知らない。東山荘で会った二世女学生と韓国代表の学生は日本語でも国語でもなく、下手な英語で意志の疎通をはからねばならなかった。しかし、悲劇はそこで終らない。京都である晩、韓国人牧師と一緒にタクシーに乗った。偶然にわたしどもは運転手が韓国人であることを知った。そこで牧師は「みんな韓国人同胞ですね」といったところ、運転手は「いや、みんな朝鮮人同胞ですよ」といった。小さなタクシーの中にまで南北の対立による憎悪が満ちていた。二つの世界の対立はこのタクシーの中にまで侵入して、分裂をこの小さな世界で繰返している。タクシーの外は暴風雨であった。われわれが解放の喜びにおどっているとき、国土両断の悲劇が既成事実としてわれわれを待っていた。在日同胞たちは彼らをしばって

（次頁下段に続く）

はこの方面で多くの神学者でない指導教授をもっている。さらに学生キリスト教運動の場でなされる神学者と一般教授達の対話は、それがその儘学Yの生命となり、動力となっているようにみられた。この点で日本の学生キリスト教運動は学生と指導者の相俟った大学基督者運動に転換されようとしているのではなかろうか。私も招かれて出席した東山荘での基督者教授協議会の気運にしても、各地区の学Yの傾向がそういったものを指向しているようである。

日本の「教会の生命と使命」委員会は、その組織内容において教会と外国宣教団体が学生キリスト教運動に関わる道を開いた点で具体的成果を収めているようである。所謂「宣教の神学」において常に提起される問題の一つは教会と学生キリスト教運動の関係である。学生キリスト教運動は教会の生命と使命の内において遂行されるけれども、それのもつ組織と構造は教会から自由である時に、むしろ教会に対するより良い奉仕ができるという確信をわれわれはもっている。しかし、この確信がともするとパリッシュと大学の関係に誤解をもたらし、時には、組織としての学Yと教会がそれぞれの組織の法則性にとらわれ、相互の有機的関係を充分にもち得ない傾向にあった。どの国における学生キリスト教運動もこの問題をかかえている。日本の「教会の生命と使命」委員会が教会との関係において、こうした問題と取組むことにおいて、教会と学生キリスト教運動の相互の更新になると思うが、「教会の生命と使命」研究企画を、その意図するところからみる時に日本のそれはたしかに一つの新しい指標であると思う。

私は滞日二ヶ月間、関東、近畿の二つの地方夏季学校、東山荘の全国夏季学校、そのほか二三の集会に出席して多くの学生と交る機会を与えられた。そこから見た日本学生キリスト者の共通性は、つきることを知らない実存的主体性確立への意慾と聖書研究への真摯な態度にみられた。関東地方の夏季学校で大学三年のある女子学生は四種類の異る聖書改訳版を対照しながら聖書を研究していた。近畿の夏季学校で提起された非神話化論は活潑な討議を呼びおこし、その方法論よりは本質論的批判が強く、非神話化によってその神話論的表象の背後にある歴史性を解消してしまうのではないかという疑問であった。私の言いたいのは討議内容よりも、むしろ学生達の神学する態度の真面目さである。学生キリスト教運動の目的を信仰の訓練と証し、この二つの統一においてみるならば——この二つを切り離して考えられないが、日本の関心はまさしく前者にあるといわれよう。個人の主体性確立ということが個人の内向化をもたらすこともあり得る。キリストの愛に生きるということが人間と人間の〃出会い〃において生かされるとすれば、私のうける印象では日本の学生はこの〃出会い〃が困難であるように思われた。これは私が外国人であるからだけでなく、日本の学生相互間の問題でなかろうか。お互いがもっている最後のカードを相手に見せようとするよりは、お互いが相手のを見せてくれることを待っている感じである。そして既存の社会的秩序とか価値体系に対する学生の不信感は私の予想したよりもはるかに強かった。

東山荘における夏季学校の最後の晩、「日韓交流の夕べ」が持たれた。そこで日本の学生が提出した五つの質問内容は、われわれ両国が立っている社会的関係と両国が直面する問題性に対する関心と焦点をありのまま反映するものであった。(1)、韓国学Yは何故反動的役割しか果し得ないか。(2)韓国の感情的反共に対する不満。(3)、平和ライン の問題。(4)

でに聞いていた。しかし、わたしたちは最初に多少とまどった。その洗練されたやわらかいあたりはわれわれのとは味わいが違っていた。博多はこんどの旅程の出発点であり終りを飾ったところであった。そして、親切もそこが始まりであり、終りでもあった。私が日本訪問から得たものを一言で表わすと、日本人から親切をうけられるようになったことである。二〇日後、博多についた時には豊かな気持で言のやりとりができた。

　日本の気候はほんとに暑かった。室内でも緊張した雰囲気のときを除いてはいつも体は汗でぬれた。日本の風は汗をとばしてくれるのでなく、太陽の湿気を額に運んでくるだけであった。

　こんどの旅行では汽車だけで六〇余時間ものった。車が動くとおもわず目は窓の外に向うものである。きれいな平野が展開される。そうかとおもうといつの間に列車は海辺を絶壁にそって走っている。ほんとに長細い土地であるということが地図と相俟って私に印象づけられる。わたしは国でも旅行はあまりしないほうなので良くは知らないが、飛行機にのると東海（訳者註日本海）と西海（黄海）が同時に見渡せるということである。長細い二つの国が極東を占めているという地理学的見解は知らず知らずに一つの考えに導いてくれる。こんなに、長さにおいても同じであり、最も近く位置している国が何故ことあらたに"隣人"ということを云云しなくてはならないだろうか。事実、わたしは日本に来て外国に来たのだという気分を殆んどもつことができなかった。第一歩を印した日本の土、博多は釜山に似てもいた。しかし、それよりも歓迎に出てくれたかたの顔は外国人というには余りにもわれわれと似ていた。言葉が同じであるならば殆んど見分けることができないだろう。だからある日こんな失敗を演じた。日本語がぜんぜん駄目であるわれわれ女子学生三名が最初に食堂車を訪れた時のことである。ある美しいウェイトレスが近づいて来て、にっこりと何か言った。おそらく何を召上りますかと言ったであろう。しかし、唖同様のわたしたちはすまない気持をこめてほほえみかえした。彼女は頭を振りながらもう一度親切にも繰返えした。不幸にもわたしたちの言葉には微笑しかなかった。わたしどもは三回も続けて微笑で答えたことになる。わたしたちの微笑に彼女は顔をあからめ、がまんがならないという表情をした。おこらしてしまったのである。もし、わたしたちが外国人であることを知っていたならばああもおこらなかったであろうに。だから京都に行った時にこういったことを覚えている。「日本と韓国は結局疎遠な感情を持たず、真の隣人として生きるべく特別に創造された二つの民族であることを直接に感じとることができました。もしわれわれが隣人であるところから遠く離れてしまった過去を卒直に認めるならば、それはとりもなおさず創造主の御意にそむいたというわれわれの罪の告白になりはしないでしょうか。」

　連鎖的に、こんな考えが私の心にしのびよってきた。「お互いをよく知らないので誤解が生れるということもあるが、反対に知り過ぎて誤解を生むということもありうるのである。」と。結局、前者も後者も理解の狭さを告白するにすぎない。事実、お互いの理解の誤りも多く発見した。お互いがもっている知識は"車に乗換える"以前のものであった。そのほかにあるのは無関心か、あるいは我田引水の一方的思考と、こうしたものがもたらす歪曲された意識が全てであるような気がした。勿論、こういったことがその儘相互理解と隣人を再発見しようとするわれわれの交換



日本を訪ねて

張　裳

「車を乗換えたのだ！」この想いは博多から東京に向う特急に乗って、車の入口にある〃一九五八〃という数字に目がふれて以来私の心をとらえた。一九五八とは三年前ではないか。前後、十五、六年間に日本は何回車を乗換えたであろうか。戦後、最初に乗換えた車には苦難も多かったであろう。鉄道の方向も変えねばならなかっただろうし、運転も未熟であったであろう。こうした短想にひたりながらも、視線はたえず変ってゆく窓外に向けられた。

　暮色につつまれた農村の家家が目の前を通り過ぎる。屋根の上には無数のトンボが飛んでいるようにテレビのアンテナがならんでいる。あんなにアンテナが林立しているならば家がもう少し大きくなくては……。木が鬱蒼と茂った山山が近ずいてくる。全ての木が鍬をいれたように整っている。これはほんとうにうらやましい。数学を学んでいる頭には碁盤のように区切られている農地が気にいった。虚勢をはっている案山子が早いと思われる程、稲は青い。

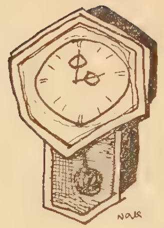
　博多から特急にのって以来、わたしたちの二〇日間はずっと特急生活をしたことになる。親切な接待もそうであったし、急がしいことでもそうであった。そうして、わたしたちの想いを縫いあわせるにも超特急でなければならなかった。東に西に走っているうちに短い言をえらぶようになった。「親切である。」「ちゃっかりしている。」「現実的である。」「明朗である。」「ほんとに暑い。」などなど。日本人の親切であることは有名であるのです

（前頁から）

いる現実から脱け出て、個人の自由と幸福に対する正当な権利を渇望している。彼らにも出エジプトや栄光への脱出の夢はある。しかし、彼らのゆくべきところはない。祖国はすでにかれらにとっては異国であり、言語にも文化にも面識がないからである。

　自らでどうすることのできない問題と心を暗くする在日同胞の境遇を考えながらも、日本学Ｙの多くの学友、教授、そしてあらゆる面で心をくばってくれた主事たちが示した親切は、私どもの訪日の全印象を温いものにしてくれた。わたしどもの一行が博多に向う途中、汽車が下関に三分間停車した。この瞬間をねらって、東山荘の夏季学校で一緒であった神戸女学院のある学生は息せき切ってホームにかけあがり、われわれを探し求めて心のこもった贈物を託してくれた。うっ積した怨みや悲しみがあったとしても、この瞬間の温い親切は全てを氷解させてくれた。さらに、去る三月、訪韓した日本代表達の特別な友情が記憶にあたらしい。こうした交りこそ両国をいつまでも繋ぐものではなかろうか。

（韓国学生ＹＭＣＡ主任主事）



現実に生きる学生キリスト者

沢田允明

㈠

私は今日の大学の教職にある者として、大学とは一体どんなものかということから話をすすめてみたい。今日私達のおかれている大学の現状は非常に不満足な点が多いのだが、それだけに、大学の歴史や理念について考えなければならないことが多いのである。

日本の今日の大学は戦後発足したいわゆる新制大学という制度のもとにおかれている。しかし大学の理念というものは、果して一時代における制度の中でだけ捉えてよいものであろうか。絶えず向上し、研究し、或いは教育を行って行こうとする人間の学問への努力の結晶として大学の理念は考えられねばならないであろう。だから、例えば、「今日我々は新制度の大学に学んでいるのだから、新制大学の理念に忠実でなければならない。」というように考えるならば、それは本当の大学の発展、人間の学問研究の発展、そしてそれを通しての人類の発展は望めないであろう。戦前の日本の大学も、戦後の大学も、ある一時期の時代的制約のもとにあるわけで、これらに絶対性を付与することはできないのだということは、最初にはっきり考えておかねばならないことである。

今日一般に大学の理念を考えるとき、私達はまず中世の大学にその具体的な源泉をみる。その一つの典型はボロニア大学であり、他の一つはパリ大学であるといえよう。ボロニアはローマ法皇のひざもとに近く、ここに法律学者が集まり、又その講義をきくために各国の学生達が集ってきた。彼らには市民権がなかった。そして自分達の自由を保障し、団結して権利を守って行くために自治制度が発達してきた。Universitas という名で呼ばれているのは、必ずしも大学というものだけを意味していたのではなく、今日でいうならば組合団体というようなものがその主な意味であると云われている。

プログラムの意義とその必要性を再確認させる。私が身をもって感じたことのなかにこんなことがその例となるであろう。戦争に熱狂したのはいつで、今になってあんな平和主義を主張しているのか？あれは一つのジェスチャーではないだろうかという危惧は〃車に乗換えた〃という事実を認めようとしないところからくるのではなかろうか。私が広島を見た時にこうした疑問は一掃された。われわれの反共が六・二五の悲惨な戦争の所産であるように日本の主張も同じような一つの戦争体験からくるものであるとの理解が成立した。

われわれはいろんな地方を旅行しながら、立派な施設などを見学した。そこから学んだことも多かった。しかし、最も深い印象を与えたものと、希望をなげかけてくれたものは日本の友との間でかわされた対話であった。クリスチャンという共通の出発点をお互いがもっていたので、お互いの誤った理解を解いていく時に感ずる心の痛みを〃理性的思考〃という手続きを経ないでも解きほぐしてくれる多くの友に接した。このような感情の底を流れるものは人間のもつ真の心のきずなではなかろうかとひとりでうれしさを禁じ得なかった。若い世代のわれわれはこの交りあうきずなに信頼をよせようではないか。

東京に到着以来、わたしどもは〃あのね〃という気分に生きた。親切な挨拶をかわしたあと〃あのね〃の間隔をおいて再び言葉を継ぐという意識をもつことがあった。本当に日本は〃あのね〃の社会である。そしてこの社会の全てのことはこの言を経てなされる。

〃あのね〃！　やわらかさとかしこさが交叉している言である。日本社会は本当に親切と実利主義が交叉して調和をなしていくという印象を強くした。（ソウル梨花女子大学生）

日韓学生基督教運動交流企画を終って

キリスト者は既に与えられた和解の恩寵の事実にもとずき、世にあって世のやわらぎのため働くことを召しとして受けとっている。日本のSCMはWSCFにつらなるものとして、この和解の務めを覚えており、戦後は特にアジア各国と相剋する国民感情と思想の闘争をこえて人間と人間、教会と教会、運動と運動の出会いのために努力を続けてきた。

最も近接する韓国とは政情のしからしむところにて、両国人の往来は不可能であったが、その時にても我国SCMに働く両国民以外の働き人を通して両国SCM・教会の接触をつづけ、印刷物、図書等の交換を通しても時の来たるを待ちそなえていた。又時あるごとの執りなしの祈りが捧げられてきた。

時満ちて去る二月には彼国学Yより両委員長を「教会の生命と使命」指導者協議会に迎え、三月には同志社大学　小野高治教授以下六名の代表を彼地に派遣、初の学生レベルにおける両国のSCM邂逅の機会をもった。八月には韓国SCMより教授、主事各一名、学生五名を迎え、東京における「アジア社会の特質とキリスト教」と題するゼミナールを皮切りに、夏季学校カンファレンス、地方連盟夏季学校、各地学Y、市Y、教会訪問、個人的な対話を通してはかりしれない賜物を与えられたと信ずる。

この企画の遂行途上、政情変化による幾多の困難が発生し関係者の努力は大変なものであった。幸い資金も豊かに与えられた。特に学生諸君の拠金は戦後の募金の最高額に達した。今ここに感謝をもって、この企画全体の成果を主の栄光に帰し奉る。

が守られ、学問の自由が獲られてゆくためには、教師も学生も事務職員もみんなが一つに団結していることは、最も大切なことである。しかしその「学問」が自分の栄誉のためにだけなされるようになったならば、そのようなエセ学問は一体守るに値するだろうか。

(二)

ところで日本の大学はどうであろうか。日本の大学が制度化されたのは明治十九年である。明治の革新期に当って学問への要求は各所各層にほうはいとして起ってきたが、政府はこれに一つの型をはめていった。森有礼は、「教育は小学校から大学に至るまで、その人のためにするのでなく、国家のためにしなければならない」と述べている。伊藤博文は「将来我が国の治安をはかる」ために学校令を布いたのであった。この中で発展してきた大学は当然学問の自由を大幅に制限されていた。帝大卒業者は特権階級として優遇されてきたが、果してその中で安住してきた者に今日の史上に名を残している者がどれだけあろうか。歴史の進歩に力を借した者がどれだけあっただろうか。大学の数もふえ、その卒業者の増してくる中で、もはや初期の様な特権を享受できなくなってきた中で、真の創造的な人間が生み出されてきたのではなかっただろうか。又、帝大という象牙の塔の中で、文部省は果して学問の自由に手がつけられなかっただろうか。事実はそうではなかった。もっとも特権的な東大においてさえも、学問の自由は内部外部呼応してほり崩されていった。

戦後、国家目的を中心とした大学制度は廃止された。新しい制度は表面的には個人の個性を尊重し個人の能力を伸して行くことを目的としているようにみえる。教育をうける自由は新制大学の数を以てしても判るほど広く与えられたようである。だがそれでは、何故学生は旧設大学へ集中したがるのだろう。それは新制大学の理念が、実際にはその理念の宣伝者によってさえ本気に考えられていないからである。表面上は同じ大学であるといわれながら現実には大学の階級制度がつくられているからである。国民の前に討議されることもなく、研究中心の講座制大学と、教育中心の学科目制大学とが現実に差別をつけられ、更に、今では再軍備と同じように、既成事実として合法化されようとしている。即ち、大学院大学と大学と短期大学とにはっきり格づけをしようという動きがある。なる程、昔の様な露骨な国家主義ではない。しかし、ここにもちこまれた大学間の差別の思想は、何よりも大学の理念の分裂をもたらす。大学院大学の学生は古い日本の大学の様な特権意識をもち、エリートとしての将来を約束される。新制大学の大部分は、古い専門学校や師範学校の如く限られた分野の教育だけをうけて、従順な技術者や型にはまった教師にならざるを得なくなるだろう。短期大学の学生は、もはや大学であることを望む気持さえ起らないようになるに違いない。今日学Yにみられる多くの学生や教師達の自由な交りは、次第に優越感や劣等意識によって分裂してくるだろう。そうなっては生き生きとした創造的な学問への情熱も失われてしまう。私達はこのような動きに対して、はっきりとそれを防がねばならない。そして、そのためには、「新制大学の理念がこうだといわれるから、そうするのだ」というような受動的な考え方であってはいけない。そのような考え方が身にしみついてくるとき、次に大学令が変ったら、「その通りでございます」というような態度になってしまうであろう。私達は今日、教師も学生も、本気になって、大学の果すべき歴史的な役割を考えて行かねばならない。自分達の受けている

勉強のために、研究のために、そして生活のために一致して必要な条件をつくり出して行く集団、それがユニバーシティと呼ばれるにふさわしいものなのである。特に気をつけておきたいことは、学生の組合がこの大学の中心として運営の実権を握っていたということである。教師は一種の特権階級的な意識で学生から遊離して行ったのではないかとも言われている。この点やや後でつくられたパリ大学では教授と学生は一緒になって一つの組合をつくっており、共同して研究、教育の活動をやり、そのために必要な権利を守り、或いは拡張するためにそれを阻むものと烈しく対決し、行動して行ったのであった。このような伝統がいわゆる大学の自治を裏付けており、単に与えられた枠内でだけ自治活動が行われてきたというものではないということは今日も私達のよく考えるべき点であろう。

ボロニアは始め法律学がその中心であり、パリでは神学が中心になってはいたが、やがて大学の発展の過程では、学問研究に不可分のこととして他の諸学科がこれにつけ加わり、リベラル・アーツと今日呼ばれているような様々な教養を身につけることができるようになった。従ってユニバーシティと呼ばれるには一般にたくさんの学部があって、互いに専門を尊重し合いながらも一致して一つの大学の運営や教育に当っていることが必要なのである。このようにいうと、単科大学はこれと無関係だと思われるかもしれないが、大学の発展の中では必然的に他の諸学部を必要とするものであって、形式的な名前はとにかく、実質的な内容においては綜合大学と異った理念をもつべきものではない。今日みられる多くの短期大学であっても、やがて総合的な研究と教育の場として発展させることを理想とすることは決してまちがっていないと思う。大学の伝統とはそのような努力を通して創られて行くものであることを忘れないでいたい

こうしてみると、「学生だから大学の運営に口出しするな」とか、「教師は教師、学生は学生」として、学生は教師のお説を承わるものだというような考え方はおかしな話である。学問をする人間という立場は教授であろうと学生であろうと同じである。同じように共通の真理或いは科学を求めて努力して行く場こそ大学であろう。成程教師は学生よりも、その専門のことについていくらかよく知っていることが多い。しかししばしば、教師は学生から考え方や着眼点について教えられることがあるものである。又それだけの自負心をもって研究する学生がいなければ大学とはいえないであろう。教師と学生の間の差別なく自由に話し合えて、指導者との間に対立意識もなく共に運営して行こうとする方向をねらっている学Yの夏季学校といったものも、単に職業に就くための形式的な通路としてしか考えられていない日本の今日の多くの大学よりも、はるかに大学らしい萌芽をもっているのだということも皆でよく考えてほしい。

しかし大学の自治ということは、それだけでは学問の自由の保障とはなり得ない。中世においても、大学の自治獲得の運動の中で、大学は国家と烈しく対立することがあった。そのとき大学の側に立ってこれを擁護したのはある時期には教会であった。しかし大学の自治が一般に認められると、今度は教会が大学を統制するという一面がでてくる。そしてルネッサンス以後はこの点で教会と大学の対立が起るときに、時として大学が自主的に、教師の追放や異端制限を行った記録もある。特に教授会が特権意識をもって、自分達だけで学問の自由を守るのだというような考え方になるとき、「大学の自由」は大学の自治制度の形式を通して失われて行く。大学の自治

第二に日本と同じような状況下にあったドイツではどうだつたろうか。「白バラ」の主人公ショル兄妹は、若い頃ナチスの青年運動に参加しながら、ユダヤ人達の悲惨さに気がついたときはっきりと自分達の考えを行動に移しはじめたのだ。彼等は仲間や教授達と共に反戦ビラをくばり、逮捕され死刑に処せられる。だが「親衛隊の幹部と党に追従する者らの演壇に背を向けよ。」ということの響きと、日本戦没学生の手記とどんなにちがっていることだろうか。日本の仏教的基盤と全く違ったものがそこにみられるのではなかろうか。

最後に、キリスト教とは全く無関係だが、中国の学生運動を描いた「青春の歌」という小説に現われた人間像を見よう。日本軍の侵略を憤っている学生達も、自信の欠如や焦りからやがては虚無的になったり、或いは良心を売って敵の手先きになって行く者さえ出てくる。その中で少しづつ目覚め、誠実に地についた運動を進めて行く女子学生（林道静）を中心に、一群の学生運動家の群像を描き出しているこの作品は、今日の日本の学生にも教える所が多い。例えばその一章で、マルクスの著書などに感激した林道静が、「党へ入りたい」というと、党員の青年に、「貴女は自分のうさばらしの為にそう考えるのではないだろうか。本当に大衆に服務するということはもっと苦しい道なのだ。」と批判されるところがある。私はこのことばの中に、中国革命の一つの精神的基礎を見出した。学生運動が現在の日本で必ずしも前進しないで、現実には後退しがちな原因の一つには、多くの活動家にこのような落着いた自信が欠如していることもあるのではなかろうか。とかく本当に自分で生活をしていない学生達の、頭だけの理解では本当に大衆を動かすことはできない。私達の学問をする態度にも、又、種々の社会的行動の中でも、この点はよく気をつけていたいと思う。

私達の毎日の生活の中でも、戦争とはちがっても、やはりある極限状態に追いこまれることが多い。その時の私達の行動を以上の様な例と比較して考えてみることは大いに意味があると思う。又、学Y運動の中で動いている私達が、一時的な興奮に駆られた言動をしている事が多くはないだろうか。ある時は衝動的に「社会のために」と動き廻り、又ある時は「霊的」な興奮を求めて、感傷的な、或いは病的な祈りをくり返したとしたら、そこからは何が生れてくるだろうか。そこに出てくるのは「疲れ」や「虚脱感」以外になかろう。私達は、「本当」に神を愛し隣人を愛するとはどのような事か。―をいつもよくわきまえねばならない。それはいつも卒直に行動しながら、それに対する神と隣人の声をきくことによって可能になる。今日私達の周りには正義と良心に反することがまことに多い。又、私達が真に「奉仕」しに行かねばならぬ場所も実に多いのである。そこで私達の義は「異邦人に勝らねばならない」であろう。

私達の周囲に見られる大学や、その中で送られる学生生活がどんなにみすぼらしく、又我々の学Yの交りに於てさえどんなに歪んでいようと、私達はそれが私達の働くべき場所として与えられていることをはっきりと意識せねばならない。私達は神の真実であることを知る故に、落ちついて、めざめた理性をもって行動しよう。本当に人類の幸福に奉仕すべく、学問の内容をより豊富にし、学問をする姿勢を正しくし、友の交りをより深め、必要な社会的行動をも惜しまず、未来の学園生活をゆたかに築きあげて行く努力を、一人一人、そしてみんなでたすけ合って続けて行きたいと思う。

（中四国学Y夏季集会主題講演）（愛媛大学文理学部助教授）

又は行っている教育や研究は一体どのような意味があるのか、そして、大学が創造的な機能を果すにはどうすればよいのか。恐らく私達は辛抱強い研究と実践の後でなければ、明快な解決は得られないだろうし、既製の大学の理念だけでは到底今の現実を解決して行くことはできないであろう。だからこそなお、ささやかでもその運動を始めて行かねばならない。駅弁大学などといわれても、古い高校、専門学校、師範などが、みんな一つの大学となっているということは実によいことである。お互いに離ればなれにされ、意志を通じ合うことなく自然に分裂させられていた者達が、今では互いに理解し合う基盤ができている。古い伝統という名のもとに出てきがちなセクトの意識をすてて、教師も学生も Universitas の形成に力を尽すべきであろう。現在の大学にある、具体的に現われている様様な欠陥は、その努力の中で、一つ一つ具体的に解消して行くのである。

(三)

戦時下に高校・大学の生活を送った私からみると、今日の学生生活は非常に恵まれたものにみえる。しかし時々ふれ合う学生達から話をきいてみると、やはりそれぞれに大きな悩みをもっていることに気付く。特に地方大学では、貧しい中から全く独力で生活し、勉強している人も多く、しかもそのアルバイトの条件も大都会と比べて非常にわるい。又、私の様に生物学をやろうという学生の中には、昔の私などが感じなかったような根本的な懐疑も抱くことがあるようだし、単にアカデミックな態度だけを押しつける事は無理であるし、誤りでもある。しかし、それは、勉強しなくてよいということではなくて、これからの学問の在り方を考えつつ勉強するべきものだと思う。そして、みんな大多数の人達はそれなりに一生懸命やっているのであろう。実際に、大学生の手記などを読んでみても学生の本質はそう変っていないし、学生らしい理想主義をもって生きていることが感じられる。ただ社会構造や制度の変っている現在我々教師には理解に苦しむような現われ方をすることが多いのであろう。しかし同時に私が学生時代にもっていたような甘い生活態度も今の学生達で根本的に変っているとは思えない。私達も一種のヒューマニズム教育はうけてきたが、戦争や貧乏についても、ただ呟やくだけで、一歩前へ進むことができなかった。今日の学生運動やサークル活動もやはりその弱さをもっているようだ。学生発題の中でも出てきた「学生の限界を守りながら」という言葉にはその響きが感じられる。五年前には殆んどきかれなかったこの言葉は、近頃の、「学生はその分を守れ」といった批評に対して申しわけのように云っているうちに、だんだんとそれに流されて了ったような感じをうける。私はキリスト者学生は流されてはならないと思う。その流されない根拠こそが信仰なのだから。

この点に関して、戦争という極限の状態におかれた学生達の態度について三つの例を引いてみたい。

まず、「日本戦没学生の手記」からある特攻隊員の日記をみよう。彼は宮沢賢治の「鳥の北斗七星」に托して愛と戦と死について考える。彼はたしかにヒュマニティを見失ってはいない。しかし、「その憎まねばならない理由を見出せない」ながらも「正々堂々」と出撃して行くことによって、彼は結局あきらめに陥っている。美しい感傷も自己弁護にすぎない。彼に同情して涙を流すことはできるが、彼の態度からは一つもヒューマニズムを実現する力はでてこない。これは実に私自身の反省でもある。

は、福音は本来われわれに何を語りかけているのかという問であり、それを、福音は二千年前に何を本来語りかけたのか、を問うことによって答えようとすることであった。キリスト教の福音は、抽象的な神の義や愛や罪の救いやにかんする教義に終るものでなく、解決できない悩みを負った人間を生かしたことばである筈である。つまり、福音は真空の中に生きたような抽象的人間に語りかけたのではなく、あの時代、あの社会の中での問題性を担った人間の、その問題性に語りかけたものである筈だ。とすれば、聖書その他の古代キリスト教の文献は、その語りかけに答え、それによって生きることができた人間の生きた記録であるわけであり、その意味で聖書は全面的に歴史の一部分を構成する。だから、聖書につたえられた福音の「ことば」も、その時代と社会の当面した問題とその問題性の表現に制約された形で今日に残されている。とすれば、我々の問いは、福音はどのような時代の如何なる社会に生きた人間の如何なる問題に対して語りかけたのか、ということになる。二千年前の人人のこのような状況とその問題性を「歴史科学の力で」構造的に把握し、それによって福音のメッセージの本質をつかむことができるならば、今日この資本主義社会に生きている我々のどのような問題状況に対して、福音は何を語るのかということが、「我々のことば」で聞きとることができるようになる筈だ。だいたいこのような問題意識がわたくしを西洋古代史研究に向かわせたものであったし、今も尚信仰者としての自分の第一の問題は平たく言えばこんなところになろうかと思う。

　ところで、この問題を考えて行くために、キリスト者に独自の研究の道筋があるわけではない。先程「歴史科学の力で」と書いたところに現われているように、歴史学の上で先程の問題を考えようとすると、それは当然科学としての歴史学の方法と技術と概念を用いなければならないし、また歴史学の学会には学会の研究史があり共通の研究課題がある。その中に身をおき、そのような共通の研究課題を共に考える作業に従いながら、学問の世界で客観的に認められる道筋を歩みつつあのキリスト者としての問題を追求してゆく、ということが、この際の「歴史科学の力で」ということの意味である。

　それならば、言うところの歴史学の方法と技術と概念とは如何なるものか。「学問」とか「科学」とかいうものを抽象的に理解するのではなく実際どう行うことなのか、を分っていただく一例として、かんたんにのべてみよう。

　今日、歴史研究に従っている人たちの研究方法は必ずしも一様ではない。歴史研究は史料を経験的な素材として過去の人間の生活・社会・文化を認識しようとする学問であるが、このさいに、認識主体の問題意識をミニマイズに局限し史料そのものの中から過去の生活をそれ自体の価値に従ってありのまま客観的に浮び上らせることができるしそうすることが歴史認識の客観性だ、と考える人と、同じく史料の語るところを重視しながら、認識主体の問題意識からの問いかけをはなれては歴史認識はありえない、と考える人とがある。各時代を描くに当ってそれぞれの時代の価値尺度でそれぞれの時代を全体として浮び上らせればいけない、とする文部省の教科書検定官の立場が前者であるし、彼らによってしばしば偏向だとしかられる教科書執筆者の立場が後者であるのは身近な例で、いずれも一つの歴史の観方であるには変りはない。

　前者はよく「実証主義史学」の名でよばれることがあるが適当で



歴史学の研究とキリスト教の信仰

弓削 達

近畿学Y夏季学校の主題は「キリストと私」とされ、「上にある知性」という副題がついていた。学生諸君による「主題の説明」を読むと、その意味は、だいたいつぎのように思われた。キリスト者は学生として証しなければならないが、その証しが学問・理性・知性の外で行われるのはおかしいので、知性の場でなされなければならない筈だ。しかしどうも自分たちの信仰生活をふりかえってみると、現実には応答の生活は知性の外でなされており、信仰によって新たに生かされてあるべき知性の領域においては、一向に信仰とかかわりのない生活がつづけられている。人間の知性がゆるされて生かされ、その場においてキリストへの告白とキリストを証しする生活がなされる、という風にはいかないものであろうか、というような意味のものに思われた。私は、この設問の背景にある学生生活を知性の生活ととらえる前提に疑問を感じ、学生生活の中にも現代の普遍的な人間の問題が感ぜられて然るべきだ、と思ったのであるが、私も学生時代に似たような問題の周りをぐるぐる廻っていたことを想い出し、多少の参考になればと思い、学問研究を業とする現在の私の具体的な研究課題や、それと私の信仰とのかかわりあいのしかたについて恥をしのんでお話したのであった。しかも、神学者や哲学者のような抽象化の能力が乏しいので、きわめて具体的なままでお話した。今、編集の委員よりそれを原稿にせよとの御注文であるが、講演内容にかんする物質的痕跡が手許に見当らなくなってしまったので、記憶を頼りに大体の内容を要約することでお許しを乞いたいと思う。

× × × ×

西洋古代史を研究しようと考えるようになった動機は、私には信仰者として感じていた問題を追求しようとしたことであった。それ

は、自己全部を商品として売らねばならないプロレタリアートであり、かれらこそ批判的革命意識をもちうる先進的階級である。而もかれらは全社会を解放することなくしては自己を解放しえない。このような社会革命の可能性と必然性を証明するために資本主義社会の理論的分析と歴史的発展段階の理論がうちたてられたのであった。

このようにマルクスは資本主義社会における人間の問題を「疎外」としてとらえ、それの解決を社会体制変革の方向に求めたのであったが、これに対してウェーバーは「疎外」に当る分析原理として「合理性」を選んだ。ウェーバーによれば、ピューリタニズムの職業倫理に触発された目的論的合理性、すなわち、窮極の価値（神の栄光をあらわす）を追求するための手段として生活を合理的に組織化する「精神」は、資本主義の勝利を促進したものであったが、合理化の一層の進展は手段の体系の一層の組織化をすすめ、ついには人間としての窮極的価値追求の目的も手段の体系の専制支配に服することになる。この過程の人間における現われは人間の「専門人化」である。ウェーバーはこのようにマルクスが「疎外」としてとらえた人間の問題を「合理性」「専門人化」としてとらえたのであるが、マルクスと異って、「合理性」の積極的な生産性を決定的に肯定し、ただ合理化された組織的世界にたいして自分一個の人間として反抗し主体的に目的を貫く、という範囲内での解決を求めた。そしてこのような組織の非合理的専制への抵抗が学問の上で展開されたものが独自の「社会学」であり、彼の社会学は手段の体系をなすすべての制度・組織・施設・概念に対する無条件的信仰要求を破壊するためのものであった。他方ウェーバーは、あのような人間の問題を生み出した資本主義社会がなぜ西ヨーロッパ近代の特定の時処において生まれたのかを追求するために、他の民族と社会と時代になぜ資本主義、（類似の現象がありながら）が育たなかったかを問い、かれの社会学は歴史の舞台で展開される。古代社会に対してもなぜ「古代資本主義」が生育しなかったかの諸条件を、古代の諸共同体構造の中に探求し、独自の古代社会の構造的把握が展開されたのである。

ウェーバーも歴史認識における一回的な個性に認識価値を認めるかぎり歴史主義の子であると言いうるであろうが、資本主義社会における人間の運命を窮極の問題とし、そこから歴史の構造的理解（単純に史料をして語らしめるにとどまらない）をうち出しているり、生産力と生産関係の弁証法による史的唯物論をうちたてたマルクスと同じく、歴史認識における認識主体の問いかけに認識論的意味をみとめる立場に含めることができる。今日多くの歴史家がこのような鋭い「問いかけ」による絶えず新しい歴史の構造的理論的把握を志しているのも、楽観を許さぬ今日の人間の問題状況を思う時、故なしとしないのである。古代史研究においても、現代的な問題意識からの問いかけと絶えず新たに作られてゆく構造的・理論的な仮説が重ねられているのであり、そのような仮説の提示と史料研究に基づく仮説の吟味に今日の歴史研究の姿がある、と言えると思うのである。そしてそのような研究の焦点、共通の課題としては、古代史では、古典古代の自由なポリス共同体とアジアのデスポティズムの道はどうして岐れたかの問題、ポリス共同体の形成と衰退、更には世界帝国の成立に至る実証的・理論的研究、古代王権の物質的諸基礎とそのイデオロギー的背景の問題、古代の社会構造として

はなく、その特徴はむしろ、歴史における特殊な一回起的なものに認識価値をみとめる意識と、史料の意義と価値は史料そのものの中から汲みとることができるとする認識論とにある。史学史の上ではこの立場は「歴史主義」とよばるべきものである。この歴史主義的立場は、認識主体の主観的な問題意識に認識論的意味をみとめる立場よりも、より客観的認識であり無色・不偏向の史観であるように思われがちであることは、先程の文部省の教科書検定官の言動によい例がみられる。しかし、それは大変な錯覚であることは、すこし史学史を学んだものならよく知っているところである。そもそも歴史的生における個性尊重という歴史主義的立場は十九世紀初頭のドイツ近代歴史学によって歴史学の中に確立された立場であったが、その思想的な背景は、説明しがたいもの・非合理的なもの・歴史的なもの・所与のもの・などへの愛着と関心に支配されたドイツロマンティークにあった。そしてドイツロマンティークがフランス合理主義への抵抗であったように、ドイツ近代歴史学もフランス啓蒙史学への意識的なアンティテーゼとして自己を確立したものであった。そして後者が各生活分野の綜合的把握を志し、中世的な「神の光り」ではなく「理性の光」を価値規準としての人類の進歩を信じ、その立場から現代批判を行ったのに対して、ドイツ近代歴史学は、後のランケの言葉で有名な「各時代は神に直接する」という立場で、進歩ではなく「発展」として歴史を理解し、すべての民族・文化・人物にそれぞれ固有の価値を認める「個体性」の理念を打ち出したのであった。ところでこのような学問運動を推進したフライヘル・フォン・シュタインがナポレオン征服下のプロイセンの解放のために身を挺し、ドイツ民族の独立と統一を終生の念願とした政治家であったことからも分るように、ドイツ近代歴史学の個体性の理念も発展の概念も、実はドイツ民族の価値と個性をそれ自体の中からみいだそうとする民族主義的な側面を強くもっていたのであったしかしシュタインがこの目的追求のためにドイツ史の大史料集編纂にふみきり、少壮学者ペルツを指導者とする有名なモヌメンタ・ゲルマニアイ・ヒストリカの刊行を開始したことは、歴史主義的な歴史観にも超時代的な価値があるのではないかと思わせる原因となった。というのは、この史料集刊行にさいしてとられた厳密な本文批判を中心とする「史料批判」の方法は、史観をこえたすべての歴史科学の基礎的技術として確立されたからである。このようにドイツ近代歴史学は「史料批判」において不朽の伝統と基礎をおいたのであるが、歴史主義的な史観が前述のような状況下に生み出された一つの史観であってけっして客観性の主張をなしえないものであることは注意する必要がある。

今日の歴史家のうち他の一群の人々は、もとより史料を重視しつつも、今日的問題状況の下にある認識主体の問いかけの認識論的価値を重視する人々である。かれらにとっての理論的指導者はマルクス或はウェーバーである。この両者はいずれも、資本主義社会における人間の運命を最も深刻に考え、その問いかけをもって夫々の全学問体系が築き上げられていったのであった。マルクスは資本主義社会における人間の問題性を「疎外」としてとらえ、その根源を商品生産の発生に求め、商品の支配の結果、人間関係は売り手と買い手の関係と化し、商品生産者と労働者との分離、労働者における人間と労働との分離が現れてきたことを最大の人間の問題と考えた。そしてこのような人間否定と疎外を極限において具体化している者



交わりにおける自己

谷口隆之助

現代の宗教的反省にとってもっとも重要な問題のひとつは、宗教をもう一度人間の問題にかえし、それを人間経験の事実に準拠させることによって、人間生活における宗教の意義を再確認することにあると思われる。いまこの意図に沿って、しかしただひとつの点に焦点をしぼって、考えておきたいと思う。それは、宗教を生起させる人間経験の事実とはわれわれの一般的な人格経験の事実であり、そして人間経験における宗教の領域とはわれわれの一般的な人間関係の領域である、という点である。〈交わりにおける自己〉という表題をわれわれは特に〈人間関係における自己〉の問題として考えたいのである。

宗教的態度は〈交わり〉という言葉でもっともよく表現される。交わりとは、もっとも現実的には、人間相互の関係を意味する。そして宗教的反省を生みだす人間経験の基礎事実は、この人間相互の関係の事実にほかならない。言いかえれば宗教経験の特質は、他の人々を自分自身との関係において経験し、また自分自身を他の人々との関係において見出すということにあるのであり、しかもその関係は決して一方的ではなく相互的であるということである。たとえば、〈人をさばくな。自分がさばかれないためである。〉というイエスの言葉も、この人間関係における価値づけの相互性を強調するものであると云いうる。宗教の世界においては自分が他人を価値づけるだけではなく、自分もまた他人によって価値づけられるのであり、そのことの明瞭な自覚において宗教は成立する、と云ってよい。逆に云えば、宗教の領域とは人間関係における相互性の領域なのであり、ほんらい人格の相互関係になりたつ人間関係はその構造自体においてすでに宗教的なのである。しかしわれわれが相互的な存在であることがあまりにも当然の事実であるゆえにわれわれはかえってそのことに気付かないでいるのであ

の奴隷制の問題、などがあげられるであろう。

今日、歴史研究に従おうとするかぎり、たとえかれがキリスト者であって本稿の冒頭にのべたような素朴な問題をいだいて古代史研究に入った者であっても、右のような歴史学の方法と技術と概念を自らのものとし、歴史学共通の課題を追求する歩みを共にすることが彼の社会的な責任となるのであり、またキリスト者としてのある問題を考えるのも歴史学界共通の課題を追求する歩みの中で行われなければ「歴史科学の力で」問題を解いたことにならないし、そのようなキリスト者としての設問自体が歴史学における市民権を獲得することすらできないであろう。いわんや、マルクスにせよウェーバーにせよ資本主義社会における人間の運命を問題とするかぎり、あのキリスト者としての設問と無縁の問題観にたっているのではないとすれば、問題追求の道は自ずから明かであろう。

ここで夏季学校の主題に立ちかえって「知性」ということを「歴史研究」とおきかえて考えるとどういうことになるであろうか。まず、キリスト者はそれらの学界の課題と共に追求するに当って特に違った研究や貢献の仕方があるか、と考えてみるに、技術的・史料的研究においては殆んど絶無であるといってよかろう。現代的な問題状況からする問題設定とそれに基づく歴史の構造的再構成についてはどうであろうか。キリスト者は人間の運命についてとぎすまされた良心を持っている筈であり、その限りにおいては一層するどい設問と仮説がなされるはずであるが、しかし今日のような深刻な問題状況下にあっては非キリスト者もまた、（時には非キリスト者の方が一層深刻に）鋭い問題意識に目覚めているのである。これらの点においてはキリスト者はキリスト者なるが故に歴史研究において特別な貢献をなしうるとはいえない。そればかりではない。もしキリスト教信仰を「べからず」的な律法として受けとっているかぎり、信仰は学問のさまたげにさえなる。ここではキリストがすべてのものから（「宗教」からさえも）我々を解放したことに目覚め、すべてのものから自由なとらわれない心で真理に従う素直な心を信仰はもたせてくれることを常に憶えなければいけない。信仰がこのような自由を与えている時にのみ信仰は信仰者の学問研究によく働くであろう。

このように考えてくると、夏季学校の主題が「知性」の場におけるキリスト者の証しをゾルレンとして前提していることに問題があることに気づくのである。キリスト者学生や研究者は「知性」の場で是が非でも証しをしてゆかねばならない、と前提することは、ウェーバー的にいえば人間の全人を分割し「専門人化」した人間観を肯定した立場にたつことであり、マルクス風に言えば「疎外」の肯定の上に立っていることになると言えないであろうか。私が歴史研究を選ぶに当って感じていたキリスト者としてのあの素朴な問題は決して私の「知性」の場における証しではない。キリスト者たる学生も学問研究者も一人の人間としてそのおかれた場所にあってキリストを証ししなければならない。それは確かである。しかしその場とは、けして「知性」などという狭いところではない。それは「知性」をして人間自殺の武器とさせず、真の「知性」、人間に人間の真の価値をさとらせ幸福を約束する「知性」たらしめることを教えるところの、人間に人間の価値を復権させる窮極のものを指ししめすことのできる凡ゆる場である筈である。

学問をぬいては学生生活は考えられない（七三頁下段へつづく）

慮のし合いであり、援助のし合いであり、また和解である。それは聖書の中で隣人への愛とよばれる無条件の配慮であり、この無条件の配慮を、もっとも正しい意味で宗教的行為と呼ぶのである。単に自己の属する宗教集団のためになす行為でもなく、単に宗教的戒律に服従する行為でもなく、人間であることにたいする無条件の配慮がほんらいの意味においての宗教的行為なのだという反省は、とくに現代においては極めて重要な反省である。なぜなら、現代におけ宗教のゆがみはもっとも多くこの反省のずれから生じると思われるからである。

ところで、以上のような問題次元における反省と努力とが、真の宗教的な反省でありまた真に宗教的な努力なのであるが、実際、人間相互の調和はまことに破れやすいものである。むしろ、さまざまの局面における人間生活の現実は、この調和がまた交わりが破れているところにあると云ってよい。それゆえ実際の問題として宗教のたずさわる積極的な仕事は、常にそこに和解を達成することにある。云いかえれば、交わりにおける自己のもっとも宗教的な活動がそこにあるのである。いま問題を単純にするために、この自己の活動を、共同生活を営む二人の人間の関係において簡単にみておこう。この場合、この二人の関係がうまくいかなくなるということは協力すべき二人の意志が衝突し、その結果二人は互に自分に帰り、孤立することを意味する。そして二人は交わりを焦点とした反省をなさざるを得なくなる。しかしその反省はもはや相互的ではなく孤立しており、交わりを回復しようとする反省活動も相互的ではなくなる。自分が他によってそこなわれたと感じるからである。そのためその反省における自然の傾向は、他を責め、破壊の責任を他に帰し、和解をますます困難にする。それゆえこのような状況が根本的に変化しない限り和解は生じない。そこで単なる妥協ではなしに真の交わりが回復さるべきであるならば、そこでどちらかが自発的に心をかえ、自発的に和解の行動をおこさなければならない。ここに宗教的なディレムマと逆説とが生じる。しかしそれはわれわれの人格関係における事実なのであって、宗教における中心的な観念のほとんどは——たとえば、交わり、反目、離反、罪禍、ゆるし、和解、等等——すべて人間関係における普遍的な生活経験に準拠するものであることをわれわれは深く洞察する必要がある。

問題はまだまだ残るわけであるが、以上のべたことがらは、もう一度宗教を人間の問題として反省し、現在における宗教のあり方とまた宗教における各個人の生き方とを考えよう、という場合のひとつの問題として提起したものにすぎない。（東北連盟夏季修養会講演より）（宮城学院女子大学教授）

（七〇頁からつづく）であろうが、学生生活は学問の生活だけではあるまい。学友との赤裸々な関係を通して人間の普遍的な問題が露呈されているのではなかろうか。孤独、エゴイズム、無関心、憎しみ、要するに窮極的には反撥することを除いて人間と人間とのつながりが失われている現実、愛も交りも成りたちえない人間の現実が、学園生活の現実ではないであろうか。このような現実に目を開き、その解決をしないかぎり「知性」さえも人間を傷つけるものとなることを、学園の中にあって叫ぶ者こそキリスト者ではないであろうか。そしてそのことを効果的に訴える道は、すべての者と共に生きる生活を実践する愛の共同体の樹立ではなかろうか。キリスト者の証しとはそれではなかろうか。

（神戸大学文学部助教授）

り、むしろその上に生じる他のさまざまのことに心をうばわれ、意識を集中するのであるが、宗教的な態度とはこの忘れられている根本の事実を意識にもたらし、そこに真の相互的な関係を実現しようとする態度なのであって、〈自己〉の宗教的活動とは他者との真の交わりに入ろうとする努力にほかならないのである。そしてそこに宗教固有の問題が生じるのである。

まずわれわれの人間関係のなかで、もしわれわれが他人に効用価値しか与えないとすれば、その関係は拒否されるか、また自分も他人の道具とされるか、とにかくそれは自分の目的のために他人を利用しあう関係となる。しかし人間関係ということが人と物との関係ではなく人と人との関係であるということは、われわれのそれぞれが固有価値をもつものとして関係しあうということなのであって、それをわれわれは〈交わり〉とよぶのである。もちろんわれわれの協力的な活動においては互に他のために効用価値をもつものとしてあることが必要である。それでなければ協力ということは成立しない。しかし一方的に他人を効用価値において見ることは、自分が主人となり他人を召使いとすることであって、それは協力を不可能にする。また他人を絶対に自分に奉仕させないようにすることも同じように協力を不可能にする。協力はかならず相互に召使いとなる相互の奉仕においてのみ成立するのである。

しかし協力ということはそれ自体としては必ずしも宗教的活動であるわけではない。主義を同じくし、階級を同じくし、国家を同じくし、民族を同じくし、宗教を同じくし、信仰を同じくし、またなにか目的を同じくするという、任意に設定された共通の基盤においても協力は成立するのである。極端に云えば、なにかの犯罪グループにおいてさえ協力は成立するのである。この場合、宗教を同じくし、信仰を同じくするということで成立する協力は他のものとは違って宗教的な活動だと考えられるかも知れない。しかしそれは早計である。なぜなら、実際問題として、宗教を同じくし信仰を同じくするという理由にもとづいた協力は、その理由だけで、宗教を異にし信仰を異にする人々との協力を不可能にするからである。それは、主義を同じくし階級を同じくし国家を同じくし民族を同じくするゆえの協力が、主義を異にし階級を異にし国家を異にし民族を異にする人々との協力を不可能にし、それらの人々にたいしてはかえって敵対関係にたつのと同じである。それはわれわれの人間生活における、あるいはわれわれの人間関係における、ひとつのわなだと云ってよい。一般にわれわれはすべてが同じでないと協力もできないし交わりも結ぶことができないという錯覚におちいりやすいものである。そして一般にいわゆる宗教すらその錯覚をまぬがれ得ない実状である。そのためにひとつのいわゆる宗教的なグループのなかに政治的な意見の対立や、興味や関心の相違があらわれると、たちまちそのグループの協力は崩れ、交わりは不可能になる。そしてその崩壊した協力や交わりを恢復しようとして意見の統一や関心の一本化が強調される結果になる。しかしそのようにして再び協力や交わりが恢復されたとしても、それは単にひとつの閉鎖的な交わりや協力にすぎないのであって、決して宗教的な交わりとは云い得ない。

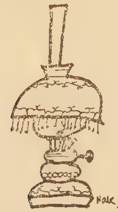
では宗教的な交わりとはどのようなことであろうか。それは、意見の相違や関心の相違や階級の相違や主義の相違や国家や民族の相違や、また宗教や信仰の相違にもかかわらず、ただお互に人間であるということにもとづいた相互の固有価値にたいする相互的な配

かくも自分の生命は躍動しないのか、何故自分の信仰は力とならないのか、「大学における証し」というが、一体自分はどのような証しをなしえているのか。何故かくも私の中に歓びがないのか。そもそも私の信仰は何ものなのであるのか。私にとって自明であった筈のキリストは、私にとって真にキリストであるのか。

従来学Yの歴史の中でも、福音理解の仕方、信仰者としての生き方を求める一つの類型があった。それは、先ず福音を原理的に学び、それをキリスト者として自己の生活に適用してゆこうとする態度がそれである。しかしそこには深刻な挫折があった。われわれの多くの先輩たちは、「福音の原理的な事柄と自己の現実の生活」との隔りがますます強く自覚されて、その克服に苦しんだのである。このように福音の原理を現実の生活に適用してゆこうとする倫理化した方法においては、結局は自分は到底福音にふさわしくは生きられないという苦痛こそ増せ、福音による自由は得られなかったのである。

同じような苦しみと不安を経験しているわれわれは、今回の夏季学校において、福音追求の態度として一つの新しい方法を試みた。とは言っても、この態度はいくつかの青年会においては自覚的にその歴史の中で試みられ、確かめられ、また現在も受け継がれている態度であるが。しかしこの態度こそ福音追求の本道であるという保証も確証もない。それは依然として試みであって、それが定式化、固定化されてはならないものである。

即ち、先ず福音を福音として絶対的に原理的に受けとめて、それを現実の学生々活に適用してゆくという倫理化した方法ではなしに、福音に対して自己の立っている立場を、またそこに生きている自分を強烈に主張しつつ、この切り合いの中から何物かを獲得してゆこうという方法である。即ちわれわれは大学に生きる学生としての自己を主張することである。大学はそれ自体、自律的に生きることを主張する。そこでは教会の権威もキリストの支配も排除される。かかる大学に生きる者としてわれわれもまた敢て大学に〝神無し〟とする無神論の世界に勇気と誇りをもって生きようと努める。「二人の人に兼ね仕うること能わず」と言われたイエスの御言葉からすれば、大変な反逆になるかも知れないが、敢えて大学に忠誠を誓う者として、大学に生き、知性的に認識し判断し行動しようとする自己を福音に対してあくまでも主張し、そこで切り合ってゆこうという態度である。そこには無限に自己の分裂する危険性に常にさらされる。キリスト者として自己の全存在を神とキリストの支配にゆだねようとする自己と、学生としてあくまでも神とキリストの支配を排除し、学問性の中に生きようとする自己の内部分裂である。私の内側において起るこの分裂の緊張に耐えつつ、そこから自己を克服してゆこうとする試みである。或る者は安易に、或いは敬虔に学



第六回近畿学Y夏季学校の意義

後藤邦夫

はじめに

近畿地方にある学Yの三連盟（京都、大阪、神戸）は今夏七月二十四日より二十七日までの四日間、兵庫県三田市関西学院千刈キャンプ場において、合同の第六回近畿学Y夏季学校を開催した。主題は「キリストと私」——主にある知性——主題講演講師として弓削達先生（神戸大学助教授＝西洋史）、鳴海元先生（京都大学講師、同志社大学教授＝原子物理学）及び吉村善夫先生（信州大学教授＝哲学）の三先生をお招きし、聖書研究は城崎進先生（関西学院大学助教授＝神学）に御指導をいただいた。参加学生約百名、先輩、指導者約十名。以下はこの夏季学校の内容の要約であるが、もとよりこれは私的に試みた整理でありまた評価であるにすぎない。この四日間の生活の中で語られ教えられ考えられた多くの事柄の中から中心的な問題をとらえつつ順を追って述べることとする。

一、問題の所在——主題——

「キリストと私」——主にある知性——という主題において、われわれは問題をいかにとらえ、いかに追求しようとしたのであったろうか。それは簡単に云ってしまえば、われわれはいかにして信仰のリアリティを得ることができるか、という、更に端的に言えば「信仰とは何か」という最も原初的な問いだったのである。われわれは原理的には「信仰とは何か」「福音とは何か」等々ということを一応よく心得ている。しかし現実に自分が学生として大学生活を生きる中で、何故

的客観性に徹してゆくことに自己の関心を集中していることを述べた。彼にあっては、「いかに科学的真理に近づくか」ということが最大の関心事であり、信仰と歴史の統一ということは問題ではない。ここでわれわれの問題は一層明瞭になる。即ち、われわれの問題は「歴史学的真理」と「福音的真理」の統一という自己を越えた客観的対象(客体)の統一が問題であるのではなく、むしろ、信仰する主体が同時に科学する主体であるという、私の主体の内側において緊張し、対立し、排除し合うところの二つの契機の分裂が問題なのであり、私の主体の内側においてこの分裂を如何に自覚的にとらえ、両者の相互に否定し合うはげしい緊張関係の中で両者を如何に媒介的に自己統一を求めてゆくか、ということがわれわれの問題なのである。I兄の、自己の主観的世界観を排除しつつ客観的歴史認識への態度――そのエネルギーは一体どこから来るのであるか。兄は言う、「自分が現実に今ここに生きている、生かされているという実感、確信があればこそ、逆に神とは全く無関係に歴史学研究に没頭できるし、またそのように邁進したいと思っている」と。ここで彼が「生きている、生かされている」という能動、受動の二態を重ねて表現したことは重要である。それはキリストによって生かされているという信仰はもっているが、その信仰的確信は常に背後にしりぞき、自己の現実認識においては、自分が「生きている」――自分が今全力をあげてその現実を保とうと努めている自己に生の実感があるのである。即ち自己の生の確かさが、単に信仰による生の確かさを告白的に信じていることだけで満足されるのでなく、更に(或いはこれに抵抗しつつ)知性的に自己の生の確かさを求めようとする態度をもっていることである。そしてこの「生きている」と「生かされている」ということのいずれに本当のリアリティがあるのかということを分析(自己理解)することは困難である。そして実際彼はそれをしていない。しかし本当のところそのどちらにリアリティがあるのかという問いは――それは或る意味ですでにキリスト者になった者にとっては、全く自明であり、それ故にまたナンセンスな問いであるかも知れないが――、真に学問的客観性に徹することのできるエネルギーが、本当に信仰による生の確かさからくるのか、或いは信仰なしにむしろ自己の知性の主張から出ているのかという自己の信仰の確かさを求める方法として重要な問いなのではなかろうか。われわれはこの両者の切り合いを常に自己の内側においてなしているのである。あくまでもそれは簡単な二者択一ではない。更に兄は言う「キリストに生かされているというリアリティは、自己の暗黒の一点においてである」と。然り、われわれが信仰のリアリティを切実に問題にするのは、単に信仰的にキリストの中に生の確かさをみるということで安心せず、この私の中に、現実に学生として生きているこの私の中に、キリストがいかに生きているかという私の内側における生のリアリティ

問生活を信仰生活の中に位置づけと意味づけを行い、キリスト教的学問の定立を試み、或いはまた科学と信仰を次元の異なるものとして形式的に分離し、また或いはそのいずれか一方を緊張の関係から押し出してしまう。しかしわれわれはこのような一元化を直接的に安易に行うことなく、自己の内部において、分裂し、緊張しつづけるこの二つの契機（そのいずれか一方を欠いても、学生キリスト者という私の存在は成立しないであろう）を自己の内部において相互に媒介しつつ、人格的に統合されてゆくことを求めたのである。

しかしわれわれが一口に大学といい学問といい、また科学というが、そこには極めて多種多様のあり方があり、われわれの間においてもそれとの関わりの仕方は更に無限のバラエティをもっている。われわれのかかる問題への接近において、大学とは何か、学問とは何か、という問い方は十分な必然性をもっている。しかしわれわれの間にある多種多様な大学、それぞれ専門分野の異った学生、またそれらのとの関わり方の多様性の中では、大学とは何か、学問とは何かという一般論は或る意味でその必然性はあっても、われわれの共同討議においては手に負えない問い方のように思われた。このような問いは、各自、各学Yの中で追求されることを望み俟たなければならないもののように思われた。むしろこの夏季学校においては、これらいかなる大学、学問、学生と言えども基本的にそれに拠って立つところの近代的科学的知性において問題の焦点をとらえ（問題を普遍化したのではない）、信仰する主体と知性に生きる主体の二元的分裂の克服を試みようとしたのである。更に「主題説明」（ワークブック）の一節は言う。「我々の信仰が、知性と理性の枠外においてのみ確立し、知性、理性という領域ではその姿を失うものとするならば、われわれの信仰はもはや自己陶酔以外の何物でもなくなり、学園の中に「証し」するというわれわれの責務は、対話と交りを介さない無意味なものとならざるを得ないのである。われわれが『キリストによってのみ自らの生を活き活きと営みうる』という歓びを、自己の身に受けた者として語り得るためには、知性の領域の決して恥じないものとすることがなければならぬと言うことができる。この意味で、信仰が二元化されているのではないかというわれわれの悩みと不安は、こうしたキリストとの全人格的な交り（出合い）においてのみ光をみるのではなかろうか」と。

二、展開――学生発題から――

先づＩ兄は、自己の歴史学専攻の立場から歴史学研究の態度として厳密に客観的科学的論理的であることがアプリオリに要請され、そこに自己の信仰的歴史観などの入り込む余地は全く許されないことを述べ、神の摂理といった信仰的歴史観を極度に排除しつつ、歴史学を学ぶ学生として忠実に科学

れに問いを投げかけた。たしかに兄の言われる如く、信仰によって与えられる力を、自己の存在をその内側から否定しようとする非存在――死の力と闘い克服する力としてとらえることは正しいと思うが、それを知性の力と同一視することはどうであろうか。一方たしかに知性もまた私の死の力を克服する働きをもつであろうし、また知性的に生きる者として、その努力は当然であろう。そしてわれわれの問題は、この科学的理性的知性が、如何にしてそのような実存的知恵にまで深められるかという問題であり、またその死との闘いを通してそれを克服してゆくそのエネルギーが、知性自身の中から汲み出すことが可能であるのかどうかという問題である。もしそれが可能であるならば、われわれは敢えて信仰は要らないのである。しかも彼が敢えて両方の確かさを求める努力をしているところに、なお信仰の確かさが優位を占めているのであり、むしろその確かさの中で、その確かさに支えられて知性的な克服の試みをなしているのではなかろうか。従ってわれわれの問題は、この両者がわれわれの主体の内面において分裂しているところのこの両者の力関係が、私の中でいかにインテグレートされてゆくことができるかという問題なのではなかろうか。あの「暗黒の一点」は同時にまたこのような実存的な二つの力関係の場として把えることができたのである。

三、展開――主題講演及び聖研より――

主題講演は先ず弓削先生によってはじめられた。福音はその時代、その社会の環境、問題をもった具体的な人間に向って語られているのであり、聖書はその意味では当時の社会の問題性に制約されて語られたのであるから、現代に生きるわれわれは今一度福音を、聖書から聞き直さなければならない。聖書における福音はもともといかなる問題をもったいかなる社会に生きた人間に語られたのであるかということを明らかにすることによって、逆に今日この時代に生きる我々に神は如何に語りかけ給うているかということが明らかになる。ここに先生の歴史研究特に古代史研究への動機があったということが語られた。このように現代に生きるわれわれのより正しい福音理解への熱意――信仰が歴史学研究の動機になっているが、しかしこの信仰が同時に歴史研究の方法をも規定するものではない。西洋史（古代史）研究にあたっては明確に現在の学会の研究的方法、立場に立つのであり、キリスト者としての固有の研究方法なるものは絶対にないことを強調された。したがって歴史学研究の方法、態度、内容、結果においてキリスト者の証しはなし得ず、またそれを意図した研究は成り立たない。自分が古代史研究を志した動機は、あくまでも私的内的なものであって、キリスト者の証しをそこに意

を求めるが故である。それをわれわれは敢えて知性的にとらえようとするのである。即ち自己の信仰を知性的にどこまでも非神話化しつつ、信仰のリアリティを求めようとしているのである。このような非神話化を自己の信仰に対して試みてゆくとき、そこにはどうしても「暗黒の一点」という表現でしか把えようのない信仰の不確かさを告白せざるを得ない。しかもなお全く否定しきれないキリストの確かさが、確かに私の中にあるという告白でもある。われわれはかかる知性の立場からの切り込みにも耐え、しかも更にこの知性をのり越え得るような信仰のリアリティを求めようとするのである。

T姉はまた、われわれが現実生活の中で判断し決断し行動する基準は信仰か理性かと問う。或る時は理性的に或る時は信仰により、われわれは様々な判断の基準をもっている。一体これらの諸基準は私という一人の人格の中で如何にインテグレートしているであろうかと問いかけつつ、信仰の出る幕、理性の出る幕をそれぞれ肯定し、理性と信仰は共存して共に発展してゆくものだと論ずる。そして結局はこれら全体が信仰によって支えられているのではないかと結論する。たしかにT姉の指摘される如く、われわれは無数の判断の基準を無意識的にたくみに使い分けるキヨウさを身につけていることを自覚するとき、それ故にこそわれわれの生の確かさを確かめずにはいられないという自己の生の不安があるのであり、それ故にこそ理性のきびしさ、信仰のきびしさを求めるのである。信仰の出る幕、理性の出る幕がそれぞれの根拠をもち、相互にたすけ合って、互いに発展してゆくものであるというとき——或いはそうかも知れないが——この関係はいわゆる〝平和共存〟的関係ではなく、相互に切り合い否定し合いつつ媒介し合う極めて緊張した関係なのではなかろうか。そしてそれだからこそ、両者の、そしてこの両者に根拠をもつ諸基準のインテグレーションということが深刻な問題なのである。

またM兄は、われわれが自らの生において真剣に問題にし、またその問題に耐えうる知性は、そしてまた信仰は、共に私の生の最も根元的な恐れの源なる私の〝死〟との関わりにおいて耐えうるものでなければならない。何故なら、もし私のこの死を直視し、これを克服する知性でないならば、私の知性は私の死と共に無に帰するのであり、私のこの現実において死の力、非存在の力を克服する力をもたない知性は結局のところ私にとっては無意味である。従って私の知性は私の中にあって私の存在を絶えずおびやかしているこの死の力と闘いつつ、これを克服する力をもつところの知恵にまで深められてゆかなければならない。一方自分はキリストの福音を求める者として、私のこの死の力を克服するキリストの復活の生命を信じ、キリストの生命を信ずることによって私の死を克服しようと闘っている。結局、私においては、信仰と知性（知恵）とは同一のものなのではなかろうか、と彼はわれわ

あり、そこには科学の進歩はあり得ない。科学的真理は常に新たにされてゆくものである。但し、この新たにされるされ方が、自然科学においては必ず古い法則を新しい法則の中にとり込み包括してゆくという仕方においてである。そこに科学的真理が相対的真理でありながら、単なる相対的なものとして軽視されることを許さないところの科学的真理の厳粛さが存するのである。しかしながら一方、科学の絶対化、偶像化に対して批判と警告をなしてゆくところに大学におけるキリスト者の固有の使命があり得るか否かに対して、教授は、科学者自身の中に既に科学の非神話化はなされているのであり、またかかる非神話化は科学者自身の固有の使命であるべきであり、キリスト者故の固有の使命か否かについて疑問を投げかけられた。また一方において、しかしながら、科学的認識の客観性ということが言われるが、その解釈の問題になると、一概に主観、客観の分離が現実にはなしえず、また事態を正しく把えてもいない。更に自然像(世界像)の変化によって世界観の転換が事実として起っているのであり、われわれの信仰内容は、必然的に、無自覚的に科学的知性によって影響を受けているのである。知性と信仰を分離することはかくして二重の意味で困難な問題であり、その故にこそ、知性と信仰の分離と統合を安易に原理的に表面的になしてしまうことなく、われわれはどこまでも知性をきびしく知性として追求しなければならない。一方信仰を科学的イドラの影響から解放するために、自己の信仰は知性によって常に批判され試みられ確かめられてゆかなければならない。そして最後に、今日の大学における重大な問題である Unity of knowledges についてふれられ、この諸知識の統合ということが非常なる困難性をもっているとき、われわれは安易に自己の知性的統合を考えてはならず、自己の内部において無限に分裂するこれらの諸知識を、更に人格の深部において再解釈、再構成しつつ、創造的な知恵(Wisdom)にまで深められてゆくことを求めなければならない。ここにおいてわれわれの信仰はいかに関わっているのであるか――それが「主にある知性」と言いうるためにはきびしい闘いと忍耐が要請されるところの永遠の課題なのではなかろうか、と結ばれた。

吉村教授は結論的に言って、われわれの求める「主にある知性」はある筈だと肯定され、聖書の奇蹟解釈における非神話化の立場及び信仰と知性との関係についての見解を明らかにされた。教授は、自然科学的知性の存在を支持する――信仰の為に。奇蹟におけるパラドックスをきびしくパラドックスとして明らかにするのは知性の働きであり、このパラドックスをパラドックスとして受け入れる無根拠の決断が信仰である。もし知性が奇蹟の中からミラケルを明確に見分けないならば、われわれは奇蹟の中にブンダーを見出すことができなくなる。このブンダーこそ、まさに科学的合理性を主張するわれわれに真の十字架のつまづきの石を明らかにし、人間

図したものではない。

キリスト者学生の証しは、学問研究の方法、内容においてなさるべきであるという設定の仕方は、マルクスの〃人間疎外〃、ウェーバーの〃手段の体系〃になるのではないか。学生の本質は学問研究にのみあるのではなく、学生の人間関係、孤独の問題、自我の自覚の問題、人間疎外の問題——、このような問題性の中で、キリスト者がそこに「我—汝」関係(ブーバー)を回復してゆくところに、学Yの証しがあるのではないか。愛の共同体をそこにつくり上げてゆくという共に生きる努力こそキリスト者学生の証しであり、それは科学も理性も知性も属し得ないところのものであると先生は結ばれた。

鳴海先生は先ず〃知性〃を科学的な諸知識(Knowledge)として規定した上で、科学の予見性、科学的法則の包括性、客観的事実認識と解釈の問題等に触れられながら、今日における大学問題の根本問題たるべきKnowledgeのUnityの問題をとりあげられた。科学的認識の客観性ということが言われるが、その事実の解釈という点においては、主体の側の世界観、問題等による主体的条件から必ずしも自由であることはできず、一概に主観、客観を分離することが可能でもなく、また事態を正しく把えてもいない。しかもなおここでいう主体とは観測主体のことであって、人格的主体ではない。知性が知恵(Wisdom)にまで深められるためには二重の困難性があるのである。即ち諸知識の統合(Unity of Knowledge)の非常なる困難性と共に、更にそれが人格的知恵にまで深められることの困難性である。そこに信仰する主体と科学する主体の無限の分裂の苦闘があるのであり、更に問題は、科学的知識がそれのみに留らず、科学する主体の人格、世界観にまで深く影響を及ぼすところに問題があるのである。自然像(世界像)のとらえ方の変化によって世界観の転換が事実として起っているわけで(コペルニクス的転回)、科学的世界像によってわれわれの信仰的主体は重大な影響を受けているのである。科学的知識と信仰とを簡単に分離することは事実として困難である。我々の科学的知識——知性をえい知にまで——主にある知性と言い得るまでに求めるわれわれの道は永遠の課題なのではないであろうかと結ばれた。

鳴海教授は知性を科学的知識(Knowledge)と規定した上で、先ず科学の予見性について述べられ、科学的法則の精密な客観性の要請されること、従ってそこには科学する主体の主観は厳重に排除されねばならないが、更にそれは科学的法則の包括性についても十分に言われなければならないことである。人は科学的真理というと直ちに絶対不変の真理として信じ込む誤りをおかすが、実はひとたび見出された科学的法則は、より広範なより精密な実験と検討によって常に新たに補正され、修正され、新しい法則が発見されてゆくのである。従ってもし人が科学的法則の絶対不変性を信じてそれに固執するならば、彼は科学と創造的に関わることを止めることで

語られ、論じられたことは実に多岐に亘るが、特に大きな問題として語られたことの一つは、奇蹟の実存論的解釈、非神話化の問題であった。福音の愚かさによって否定された知性の賢さは、更に福音によって生かされて建徳のために用いられる。しかもこの知性は、十字架の福音が人の言葉、奇蹟を媒介として語られている故に実存論的に解釈し非神話化する知性として今日的な意味をもつ。しかもこの非神話化はいわゆる現代的合理的解釈では全くなしにかえって福音のパラドックスをパラドックスとしてきびしくとらえ、奇蹟におけるブンダーを明らかに見出すところのものであり、現代的合理精神への激しい挑戦であることを学んだのであるが、特に城崎先生のイエスの復活の奇蹟の非神話化は多くの学生に非常なショックと共感の相反する二様の反応を呼び起こした。即ち或る学生にとっては、それは信仰の全的破壊であり、信仰の危機であった。また或る学生にとってそれはミラケルからの解放であり、信仰の自由さと新鮮さを与えるものであった。いづれにもせよ、学生の間でこの両者の間に真剣な討議がなされ、依然として結論を得ることはできなかったが、それにもかかわらずそれは重要なことであった。そして聖書の非神話化をわれわれはどこまで為してゆけるかというのが聖書解釈の問題として最後まで残り、実はこの問いは、自分の信仰をどこまで非神話化し得るかという自分自身の信仰のリアリティへの問いとして跳ね返ってくるのであった。そして自己の信仰の非神話というテーマこそ鳴海教授の重要なモチーフであったのではあるまいか。そしてこのモチーフこそ、I兄のあの「暗黒の一点」に連なるものであり、M兄の死を克服する実存的知性の信仰に対する挑戦に関わるものでもあったのである。そして自己の信仰の非神話化の必然性は、逆に自己の知性の立場の再検討を迫るものであり、T姉の云う信仰と理性の共存関係はこのような次元において検討され、それはしかし鳴海教授の云われる如く、われわれの永遠の課題なのではなかろうか。そして大学におけるキリスト者の証しは弓削、古村教授の言われる如く、そこにキリスト教的科学を主張することによってなされるものではなく、そこに愛の交り、我―汝関係を回復してゆく中でなされるものであり、この愛の交り、我―汝関係は互いの徳を高める知性によって媒介されつつ、互いに「暗黒の一点」の確かさを問い合う対話を必然的に要求する。ここにおいて我は汝にブンダーをせまり、汝は我の信仰に知性的に切り込みつつ「暗黒の一点」を互いに確かめ合う。汝の「暗黒の一点」は我の信仰を必要とし、同時に我の信仰の確かさは汝の知性を必要とする。我の信仰の証しは、同時に我の信仰の非神話化をうながすところの交りによって媒介されるのである。

キリストとの生きた出合いと信仰のリアリティを求めて集うたわれわれは、かくして多くのことを互いに学んだのであるが、更に全体を振り返って考えるとき、この夏季学校はさ

として弟子たちの中に生きてい給うたあのナザレのイエスを神の子キリストと信ずる弟子たちの信仰が、今日われわれにそれを信ずるか否かを激しく迫るところのものである。われわれは正しい信仰を得るために、むしろ知性が最高度に用いられなければならない理由がここにある。しからばわれわれの行為、行動における信仰と知性との関係はどうであるか。教授は、信仰は行動の様式を規定せず、ただその動機、目的だけを決定するのであり、その目的を実現する方法、行動の様式の選択、決定は知性がそれをなすのであると言われる。したがって固有の信仰的行動様式なるものはなく、キリスト教的科学の方法論なるものも成立しない。知性が形而上学的英智でなく、科学的知性(intelligence)である限り、知性は目的に対して中立である。従って信仰とは少しも抵触しないばかりか、信仰者は信仰の具体化、愛の実現のために、その方法を知性に求め、いよいよ知性を練磨すべきである。従って知性の領域で証しするということは、そこで一定の特殊な信仰的な知性について主張をすることではなく、専らわれわれは知性の向うべき目的について証しすべきであると論じられた。

聖書研究において城崎先生は、(Ｉ)、先ず宣教の愚かさ(コリントＩ・一・18〜31)について述べ、①それは先ず宣教内容の愚かさ(21)であり、それは十字架の言(18)即ち十字架の贖罪であること、それはしるしを求めるユダヤ人にはつまづきであり、知恵を求めるギリシャ人には愚かであった。しかし十字架の言は愛の啓示であり、それは愛の不条理—しるしと合理性の拒否であること、②それは何故の宣教の愚かさか。それは窮極的には秘義(21)であるが、現実に即して考えれば救いが信仰の出来事であるため(21)、人間が謙遜になるため(27〜31)である。③更に宣教内容の愚かさは、それにふさわしい方法の愚かさを要求する。即ち聖書の愚かさ、説教の愚かさ、交りの愚かさである。(Ⅱ)しかしながら知性は、建徳のために重んぜられねばならない(コリントＩ、一四章)。知性は人の徳を高め(3)、教会の徳を高める(4)ために重んぜられねばならない。そして建徳の根拠は愛、十字架の愛である。建徳の条件として知性は(13〜15、19)秩序(26〜33、40)——教会の秩序、信仰の組織的自己反省としての神学—と共に重んぜられるのである。それは異言ではなしに預言する知性であり、言を解釈する知性である。福音は徹底的に媒介的に語られている故に、実存論的解釈、非神話化するところの知性の意味と働きをわれわれは重視せねばならないことが述べられた。

四、討議まとめ

われわれは、以上のような学生発題と主題講演、聖書講義を学びつつ、数回の連続する分団討議の時をもった。そこで

座談会

第七〇回　日本基督教青年会同盟夏季学校
第五一回　日本キリスト教女子青年会
全国学生カンファレンス
合同集会をめぐって

（一九六一年十月二十日夜）

藤森　自然科学関係の方の御出席が得られなかったのは残念ですが、皆様御勉強にお忙しいところをありがとうございました。

今年の夏季学校、カンファレンスはYMにとっては第七〇回目又YWにとっては第五一回目で後半世紀に第一歩をふみだしたという、それぞれに歴史的に重要な位置にあります。その点私共の先輩たちのになってきた歴史的課題、つまり歴史がかわっても私達の前に厳然としてたつところの、この現実の世界において、キリストを信じる学生として生きるという課題を今一度、改めて自分のものとして主体化して受けとめなおしてゆくということ、第二にこういう課題のなかで既に三回目であるYM・YW合同開催ということの意味と功罪を見極めて、今後の運動のあり方との関係で、この問題に一応くぎりをつけるということ、第三に、充分とは云えないがわれわれのあり方を認識してゆく点に関して、準備の過程から方法論的な自覚が極めて明確であったこと、など、特に第三の点は長い夏季学校の歴史のなかで、ある意味では初めてのことではなかったかと思うのですが、いわばこういった特徴を今回の夏季学校に見出だしうるのではないかとおもいます。

この第三の点に関してですが、われわれのあり方、考え方がつねに反省、検討を加えられ改変されてゆくということは、それが学生としての日常生活における実践と密接な関連の下にあることを示しているのですが、われわれの実践は単に主観的なものでなくて、必ず客観的な、それ自体の論理で動いている場で行われるものであって、その意味では技術的行為であると思います。それ故実践が有効であるのは、その法則性、論理が正しく掴まれ適用された限りにおいてであり、又、このような実践の歴史を通してわれわれの知識・思想・論理も

ながら一つの大きな聖書研究の時であったとさえ思われる。そしてこの全体としての聖書研究を通して、大学における聖書研究の一つの方法論として再確認することの恵みを与えられたと信ずる。即ちわれわれの聖書研究は、先づ何よりも弓削氏の言われる如く、聖書の厳密な解釈がなされ、教会の歴史における伝統的解釈が重んじられなければならない。しかしてわれわれは今日この時代にこのような状況の中に生きる者として、特に学生としての知性的立場から、この聖書解釈に批判的に切り込み実存的に神の言をきくのである。もしこの知性の切り込みによって知性が勝利するならば、その知性はM兄の言う実存的知恵であり、それはそれとして十分な意味をもつものであり、また知性が打ち破られて聖書の言が私を圧倒するならば、その言は感覚的、直接的に聞いて思い込む信仰ではなしに、キリストの十字架の、まことのつまづきの石をのり越えて、私の「暗黒の一点」においてリアルにキリストと出会い、キリストのさし迫る問いかけに応答をせまられるのである。そして私は今や応答せざるを得ないようにされている。聖書とのこのような批判的対決を通して遂に私は「汝は神の子、キリスト」を告白し讃美と感謝の祈りをなす。われわれはこの四日間の真に祝福された恵みの時と、神を求める共同の交りを共にもつことを得た喜びを互いに感謝しあった。

（ＹＭＣＡ学生部関西駐在主事）

いくかということになりますと、やはり非常に問題がありました。これまで学Yでとられてきた方法論にはどうも一つの行き詰まりと申しますか、全体的にみて何かデッドロックの上に乗り上げているという感じが強かったわけです。それをうち破るために、どういう風に問題を展開していったらよいかということをいろいろ考えた結果、こんどのような方法論がとられました。その特徴は現在私達がもっている問題をまず客観的にみていく、これは今迄もたえずいわれてきたわけですけれども、徹底的にそれをしていこう、こういう接近の過程をとおして問題に対する主体性、問題にどう自分を投げかけていったらよいのかという姿勢が明らかになっていくであろうという一つのきわめて強い希望的なものに方向が向いていたような気がします。〃学生として、生きる〃という中で大体大きく三つになったと思うのですけれど三つの大きな方法的展開をいたしました。一つは〃学生として生きる〃という場合どうしても考えなくてはならない大学の問題、その大学の問題の中で歴史ということを一つ取り上げなければならない。それから歴史と同時と同時に大学自身が現在置かれている状況、まあ現状分析ということになりますが、これが二つめです。三つめは大学の現状と歴史性をふまえつつ、僕達は主体的に生きていくわけですがその中での信仰の問いかけがなされなければならない、それにどう関わっていくかという問題。大体大きく三つに分けられると思います。

特に準備の過程で問題とされたのは、方法論の問題とジョイントの問題。たとえば大学の問題を考えるとき、こういう中で物事を客観的にみていく、これは男女の別に関係なく、日本人にとって、日本の学Yにとって必ずしも充分に訓練された思考方法でないことは明らかです。一般的にいってこういう考え方は、やはりYMのこれまでとってきた方法論を展開したものであると思う。そういう関係もあって、どうしたらYWの問題性をそのなかに生していけるかという点に準備する側としてはいささか心を砕いたわけです。実際的には分科会などでは、そういう配慮、苦労は表面には現われていなかったが、準備過程では相当苦労しました。

それで結局もとに戻りますが、参加者に、準備する側からどう働きかけるか、準備としても何を望むかということですが、僕等自身、主題には確信をもっているとしても、その展開に関しては慣れていない。それは同時に、ある程度は指導する先生方の側においても、必ずしも整然としたものをもって方法論を展開していくことはできなかったような気がいたします。そういう状態で参加者に完成されたものを望むということは、いささか無理だと思っていましたし、事実終ってみて相当無理があったと思います。ただやはりそれぞれが問題性をできるだけ明確にして参加してほしいということを強調したわけです。このことはせんじつめると、私達が所属している単位Yの中でどう動き、考えているかということに還元されていくと思います。こんどのような方法論にいろ〳〵異論があったのは、やはりどうみてもそれ〴〵の所属している単位Yが、こんどとった方法論に非常に不慣れであった、極端にいえば、そういう方法論をとっていなかったこと。このことが参加者への働きかけにおいても、参加者のうけとめ方においても、会期中も、最後まで論議の的としてつきまとわった一つの原因でし

得られてきたのでした。こういったものは運動における実践をある意味では保証もし確固たる力をもって、それを支えたり、又従来の安易な満足をしばしば内からつき破ってきたのでした。しかしこういう技術的要請は運動の発展にかなり本質的な一面をもつのですが規定的なものではないでしょう。規定的なものとしては、運動のもつ対象、われわれの場合、証すべき真理の、つまり福音それ自体の構造と、この二十世紀という時代の大学に生きているものとしてのわれわれ思惟様式——それはそれ自身独立の体系をなしてその道を進むものですが——そういった思惟様式とに規定されて発展してゆくものであると思います。このようにわれわれが課題を理解してゆくのに、認識の実践的な過程と対象の構造ならびにわれわれのもっている思惟様式とは極めて密接な関係があります。この辺りを一方的に見てゆくことはしばしば誤りにおちいる危険があるわけで、どうもそういう失敗をくりかえしてきているように思われてならない。歴史的分析においてはこういった規定契機を明確にみわけて見てゆかなくてはならないわけで、これが方法論的自覚となったと思います。

それで、今度の夏季学校でとられた方法論は、現状分析から考えて、規定契機を分離して考えてゆくという方向を一応たどろうとしたわけですが、勿論多くの批判はあったし、あるべきでした。今日の話合は先にあげた特徴、特に方法論に関して多く語られるとおもいますが、既に終了後二ヶ月を経ていますので、夏季学校全体が、特に以上の点が今日、いかに受けとりなおされてきているかということも含めて自由にお話しあいねがいたと思います。まず、準備の時から責任を負ってきた浜君からお願いします。

——準備の責任をおって——

浜　前年の全国学生委員会の方から引継ぎがあったのはこの一月ですがその時、「夏季学校は並大抵のことではない。覚悟してやってくれ」と相当おどかされました。事実決して全体の準備は楽であったという印象は持っておりません。ただ一つ非常に今年の常任委員会にとって心強かったことは、〃学生として生きる〃という主題、この文句そのものにはずい分異存があったわけですけれども、〃学生として〃という場をまずふまえるということ、それからその中で自分達の信仰を追求していく、即ち〃生きる〃ということを問題にしていくという、このことは非常に明確化されておりました。そのため準備を進めていく上に主題に対しては少くとも不安を覚えることはなかったということ、これはやはり一番の特徴だったと思います。終ってみて僕は、やはり、主題は当を得ていたという見方をしています。しかし、この主題をどう展開して

出席者

宮本武之助（東京神学大学教授）
浜　好洋（早稲田大学商学部三年）
滝浦　満（一橋大学商学部二年）
田中寿夫（立教大学社会学部四年）
渡辺　進（明治大学商学部三年）
石破悠紀子（東京女子大学文理学部三年）
三浦幸子（津田塾大学・学芸学部二年）
鈴木祐子（青山学院大学文学部二年）
石井紘子（東京教育大学教育学部一年）
四竈　揚（教会の生命と使命委員会主事）
司会
藤森　元（日本YMCA同盟学生部主事）

の学Ｙの位置を知り、そこから直ちにこれからの方向までは出ないとしても、自分達のエネルギーにしていきたいと思ったわけです。勿論これは参加以前のことです。

三浦　小さいグループの中だけでは問題が意識されずに過ぎていく危険がある。いろいろな問題を大きな観点からみることによって、解決の糸口を掴むことができるということを期待して参加しました。

鈴木　青山のＳＣＡは学Ｙに属しているという意識が薄いのです。どっちかというと勉強するために行きました。私個人としては、キリスト教主義大学にいて、いろいろ問題を感じますから、考えてみようと思って参加しました。

石井　私はキリスト教をもっとよく知りたいという考えで参加しました。また〃学生として生きる〃という主題が、私は大学に入ったばかりで大学について考えることがあったので何かそこから得られるものがあるのではないかと思いました。

方法論をめぐって
――客観化ということ――

藤森　ただいままでのお話でおおよその問題点はつかんでいただけたと思います。互いの間に相当の理解のずれが今なお存在しているのですが、方法論をめぐって一番明確に現れると思いますので、その方面に進んで下さい。

宮本　全国学Ｙの問題を「学生として生きる」という主題で限定し、大学で起っていることをできるだけ客観化してみてゆくということはある意味では賛成ですが、その場合、客観化という意味が、私にはどうもはっきりしない。ある人が主観的にこういう問題にぶつかった。ある人は違う。そういうことをいちいち論じたらきりがない。各学Ｙがぶつかっている問題がみな出され「そこで最も深いところで私よりもあの学Ｙがこの問題についてはもっと深くぶつかっている、そしてああいう活躍をしている、そういういみで、自分だけで考え、壁にぶつかっているというのではなくて、日本の学Ｙのあるところでは、その問題が非常に深く掘り下げられている。そういうものがそこに出されて、なるほどああいう形で戦いを乗り切るのだなということをはっきりさせる。」そういう客観化なら自分達の問題と直結するのだと思います。そうであれば反対ではないのです。ところが大学が持っている事実をあくまでも客観的事実としてみていく、解釈を入れないということであるとおかしいと思います。そもそも歴史認識には自分というものが入ってくると思う。それがこの場合どう考えられたか、どうもはっきりしないが。

四竈　いまおっしゃったように個々の問題を統合する場合、一番深い意味で担っているということもあるが、今度の夏季学校がその全部を集約する意味をもつのではなくて、というのは現状だけをどうこうするのではなくて、学Ｙとはかくあるべきだという学Ｙの歴史をふまえて、キリスト者学生なら、こういう問題に、こう必然的に取り組まねばならないという意識がどこか強く働いている。その辺りが客観化という場合人によっては自分の問題と結びつかない。「一体そこまで考えなくてはならぬのか」と、ある面では逃げ出そうとしたのだが、ともかく大きな課題を与えられた、ということになったと思うがどうでしょう。

浜　僕は客観化ということをこの場合次のように解釈します。自分は許されて基督者に

た。

滝浦　夏季学校の主題が例年のように一月の全国委員会で決まり、その方向に沿って展開して実際に具体的準備に持っていくように委託されたわけです。今年の場合は、昨年の暮に行った学Yの問題性に関するアンケートが一つの大きな意味を持っていたと思います。出席した委員達の間だけで取りきめられたのではなく、各Yの実際の問題がより一層反映された形の上で決められたということがいえると思います。ですからそこで具体的な行き詰まりとか、悩みとかが解決を求められていて、何らかの形でその解決に近づくような一つの方向として今年の主題がとられたということになると思います。そういう意味で形式的には主題に対して例年と同じ信頼度があったに過ぎないのですけれども、実際的にはこれでいいんだという感じがあった。そこまではいいわけで、問題はそこからの展開にあると思います。一つは夏季学校という集会が、学Yの運動全体の中でどういう意味をもつものかということが、はっきりしているということは夏季学校が生きていくための根本的条件だと思いますが、それが必ずしも明白ではなかった。たとえば主題が決って、こういう方向で何らかの意味で今の行詰りを打開していこう、「学生として生きる」という題に現状を正確に認識し、そこに立脚して現実的な歩みをしていこうという姿勢は今の学Yに必要な一方向であることは明らかなことです。それが全体運動の中でどう生かされるか、その見通しのもとで、それをどう夏季学校に反映させてゆくか、ということは具体的にプログラムにまで影響してくることですが、それが夏季学校の性格の定義づけとして、もう少し考えられる余地があった。その現れの一つは各分科会で非常に異った展開のされ方をしたということだと思います。あるテーマによっては相当専門的な知識を必要としたため、研究などと大それたことをいうよりもむしろ学習といったいみで、先生方の講演に重点が置かれた分科会もあったと思います。また逆にディスカッションによって非常にそのテーマが生かされた分科会もあったと思います。そういう展開が必ずしも考慮されていなかった。常任委員会の準備の中では、蓋をあけてみたら何とかなるだろうというようなことがあったように僕自身感じます。夏季学校でこの主題をどのように学Y運動全体のなかで扱うかをもう少しはっきりさせてもよかったのではないかと思います。

藤森　二人の発言に関係して、参加された側として、夏季学校の意味、性格をどう解釈して、又どういう期待をもって参加されたかを話していただきましょう。

参加者の期待

渡辺　全国から集まることに意義を見出した。それぞれに異った学Yがまず互いに知ること、又それによって自分を再認識し、反省すべきところは反省して自分達の位置をはっきり掴みたいということがあったわけです。特に印象に残ったのは、休憩の時間などにいろいろの学Yの人達から伺ったことですが、主題から理論的知識を得ようとして行ったわけではないのです。参加者はそれぞれの学Yで責任をもっている方達なので、それぞれのYの問題点を伺うことができ、それを何らかの形で自分達のYに還元したいと思いました。それによって単に参加した者だけでなく、会員全部が自分

たわけです。僕自身の反省として端的にいえば、主題が非常に的をえていた。それに対して準備に当った我々が、どれだけ責任をもった主題展開をしたかということになると、今後非常に研究されていかなければならないと思う。方法としては宮本先生の御指摘通り、自然科学的方法論がとられたと云えましょう。このことは僕達が初めから必ずしも意図的であったのではなく、やってゆくうちにそうなっていった。僕個人としては、こういう方法論が手ばなしで、簡単にとられていいのか非常に疑問に思っています。

宮本　基督教主義大学の人たちが、このあたりのことをどう考えているか。問題意識がおくれているのかどうでしょう。

藤森　夏季学校終了直後の委員会で立教の植田君と同志社の李君が方法論のことで猛烈にかみついた。同じ基督教主義大学でもこういう大学ですと、このあたりの問題にかかわらざるをえないわけで、それなりに批判もでてくる。一方とてもそこまでとどかない学Yもあるのですが、一般的に云えば、この辺りの問題を今この時期に問題としてとりあげ突破してゆかねばならぬというか、そういう時期に学Yは来ていますね。

渡辺　方法論についてまだ曖昧な理解しかできないのですが、今年、この方法論的転換を行ったという全国委員会の一番のねらいというのは何なんですか。ぜひ聞きたい点です。

田中　今まで学Yで云われてきた方法論といえば聖書研究でした。一人一人の信仰に照らしながら、信仰的原理と今直面している問題、客観的問題と云えるかもしれませんが、この二つを同時的に取り扱ってきました。そしてこの二つのものの統合への道をまっすぐ進むことこそ目指すべきなのだという理解だったと思います。平たくいうと、現実の問題が信仰的にはどういうことなのかというようにとらえられてきた。そこのところにどうしても突破できないという現状分析があるわけです。安易に——ということばは正しいかどうか分りませんが——性急に信仰的にはどうかという方法が現実の問題を違ったところでとらえているのではないかというおそれがありました。夏季学校では、もっとドライな形で問題は我々に迫ってきているのに、違う取り扱いをしているのではないかとおそれて、本当の形を掴むべきだとあのときいわれたと思います。方法についての僕の理解はその程度ですが、こんど僕が常任委員として感じたことは、現状分析をしてこうしようという方向をもったことは大へんよかったと思います。僕等の信仰的主体的決心として、責任として、そのことにどの程度主体的に取り組んだかということには非常に問題である。個人として反省させられています。やはり満足なものを実らせるためには、現実に対する正しい認識と方法を持つと同時に、できる限り主体的信仰的決断、即ち方法論に対する裏打ちがなければならないと思います。

宮本　安易な統合をさけて厳密にしなければならないと強く言う立場は、信仰の立場で言っているのじゃないの。それともそれ以外に何か出てきたんですか。それは反省したわけですか。

四竈　それはそうなんですが、従来は、ざっくばらんに言ってしまえば、困難な問題が出てきた場合、それは結局信仰の問題だとして、たとえば「信仰が浅いからだ」というように飛躍のような形で解答が与えられ

されているのですけれども、クリスチャンは自分の人生に対してヴィジョンを与えられた人間だと思います。そのヴィジョンは現実にたしかめられていくときにはじめて明確になる。僕にとってはその過程が対象への客観化の視点のように思います。

宮本　その意味だったら異論はないんだが、普通客観的という場合、だれでも通ずるようなというわけでしょう。私がいうのは歴史にはそういう方法論が通ずるかということです。

浜　しかし、僕のいうヴィジョンは、僕の前にそういうものがあってそれをどうしても追い求めていかなくてはならないといったものではありません。ただ僕自身精一杯に生きてもそのヴィジョンを幅広く弾力的に捉えていきたいこの生き方が全てだとしたら、たしかに問題ですが、その一つ一つをたしかめないでいては僕に与えられているヴィジョンは明確化されないと思います。

宮本　その一つ一つの自分の問題を踏まえた上で客観化したのか、自分の問題と違うものをここで捕えようとしたのか。浮いてしまったのか、その辺がはっきりしない。普通客観的という場合、信仰ということをあまり出すといけないから、カッコに入れてしまって、冷静な目で見ていくといったようなことをいう。

藤森　そういうことも含まれている。つまり今先生がおっしゃった一つの歴史認識を必ずしも前提ともしていない。他の考え方もなりたつ余地は残っていると思います。つまり普通いう客観的という見方も成立する。そういったものを初めから排除しないで含むというか、対決するというか。

宮本　そこがどう検討されたかを聞きたい。学生諸君がそこを検討して、信仰を一応カッコに入れて歴史をみていくという客観的立場をとったのか。この点はこんどのような方法論をとった場合非常に吟味を要するところだと思う。

藤森　三月の委員会ではそこの疑問が出た。たしかに所謂客観的に突き離すといってもそれで完結しない。原理的に間違っていると主張した流れがあった。それを今から考えれば安易だったかもしれないが、では主観と客観とを分離して考えてゆく方向の強調が必要な現状であるということでつなげたわけです。

宮本　そこがどのように明らかにされたか聞きたい。信仰というものが歴史分析の場合非常に主観的なものを提供するように考えたのか、それとも信仰に徹した場合、学者としても客観的ないいかげんのものにごまかされなくなるという主張なのか。そうでもありそうだし、なさそうでもあるようにみえるのだが。

藤森　基本的には後者だと思います。しかし自然科学のようなアプローチの仕方、そういったものへあえてふみだす。そうして現在日本の大部分の大学を成立させている神なき論理に生きてみる。そこに重要な意味がある。

宮本　しかし、僕にいわせれば、一種の自然主義の哲学の方法論が採用されているという考えしかとれない。その辺を自覚した上で採っているなら構いません。簡単にこれでいいんだと今後もっていかれると困る。今までに問題があったのをやはりつきとめなければならない。

浜　今の宮本先生の御質問について、たしかに学生委員会としては充分な討議がなされなかった。同時に、はっきりは出来なかったといえます。個人が問題にどうシーリアスに取り組むかということに責任を転嫁し

う生きるかということを問題としたかった。

藤森　本当に学生として生きるということをつきつめてゆくということが、同時に自分の信仰を追求、検討せざるをえないということになる、というふうにならないものでしょうか。

宮本　それは先に委員会でやってしまったのじゃない。

浜　その点ある程度前提を置いてやったということはあると思う。哲学的に云えば一つの大前提ということになる。だからその前提を疑うことは、むしろ懐疑論的であるととりました。

藤森　その前提というのはわれわれが学生であるということ。しかしその辺が、大学の種類、性格、又各人の意識によって内容が同じでない。場合によっては内容ゼロのこともある。その場合学Yの「学」はなくなる。今その辺りをつつきだすと大変なことになるので、今は一応「学Yの夏季学校」として出発したわけです。

浜　むしろある意味では、その大前提の内容が極めてぼやけてきている。それ故にそれをはっきりさすことが夏季学校のねらいの一つでもあった。

藤森　つまり、学生が勉強をしていないというのではないが、実際にそういう自分の生活がなくて云々してみても無意味だ。一層危険なことは口で云々すれば問題は解決してしまったように錯覚するということだ。

方法論と男女合同集会

宮本　その点みな一生懸命大学生活をやっているわけで、その点男女のちがいはあまりないでしょう。特に女子はもっと勉強せなければ……ということが出ましたか。

石破　そういったものは出なかったですが、どこかニュアンスのちがいがあった。

藤森　戦前は、大学、高校、専門学校は別のもので、夏季学校もそれに準じて行われていたが、新制になって皆一つになった。新制の女子大学が一般教育中心になりつつある一方、共学の方は、特に上級学年では専門学校的なものと旧制大学的なものとに分化してきている。これによっておこる学校差と男女の差とが相関関係になって出てきているのではなかろうか。

石破　それが今年の特徴です。大学の機能ということを現実にもとずいて問題とせざるをえない。単なる理念論では解決しないものがあるように思う。

藤森　あるYWの人が手紙をくれたのですが、女子には女子なりの思考様式があるという趣旨なのですが。

宮本　女子の思考様式というか発想法がそれなりに学問の形式に入れば学問としてそれなりに認めなければいけないと思う。男子のそれはあるところまでゆかないと学問に入らないでしょう。女子は女子なり独自のの道を拓いてゆけばよい。

石破　一月の全国委員会で女子の方が合同した方がよいと決定したのは、結局、ずっと別にやってきて過去二年一緒にした。そして今までと違ったものを感じた。それを吸収したいという動きが強かったからだとおもいます。だから、女子だけがもっていた良さというものはこれから出てくると希望的観測をしているわけです。

宮本　それを男性が学ぶということはないかしら。特に今度の夏季学校では。

浜　女子の思考様式から学んだということはあまりなかったような気がします。女子の方もやはりなかったように思います。とい

た。それではやはり済まないので、信仰の出てくる以前で徹底的に問題を掘り下げて、その結果この問題はどうしても聖書に問わなければ解答は与えられないんだということを鋭く摑むために、信仰をできるだけ排除して問題と取り組むという行き方じゃないかと思います。

宮本　それは信仰をカッコに入れた立場なのか、信仰の立場から出てきた立場なのか。無神論的方法論はそこでひっかかるわけだ。基督教大学の学生がそこでひっかかったのなら、我々としても話し合った方がいいかもしれませんね。運動が曲がり角に来ただけに責任があると思う。固定化は避けなければならない。僕は何にでも不安を持つが（笑）こんどの方法論にも不安を持っている。

藤森　夏季学校の最後の報告会で、早大の小田君が、中川先生に「先生は一体どういう意味で哲学をやっておられるのか」ときいていた。それは非常に象徴的だと思うのだが、一番最初に出るべき問題に最後にたどり着いたわけで、なぜこのような方法論をとったかということと対応した学生の側からの非常にポジティブな従来のわれわれの考え方への問いかけであったと思います。

参加者の方法論に対する反応

四竈　準備委員たちでも参加してみて初めて方法論がのみこめたと云っていたが、全体的にみてどうだったでしょうか。今後の問題にも関係するが。

浜　先程のお話で参加者の参加の態度は非常に個別的であるように感じたが、その態度が終ったあとでどういう変化を受けたでしょうか。

鈴木　ワークブックでは現状分析は非常に客観的によくなされているが、果して教会とこの世の関係が正しく把握された上でなされているのか。それともただ学生として生きて、それで信仰者であるから大学で責任を負わねばならないというように機械的に考えているのか。もしそうなればキリスト者として正しい責任はとれないのではないか。

渡辺　話された内容はそう深いものとは思わなかったが、自分のことに立ち帰って考えてみると、キリスト教信仰に生きるものとして現実の矛盾のなかに立たされているが、そのなかで自分の課題をごまかさないで追ってゆかなくてはならないということと、自分の安易な生き方を問い直さざるをえないようにならしめられた。今は、この方法論が意図された意味とその方向へ自分も追求せねばと感じて、その意味では感謝している。ただ単位Yとの関わりにおいて突込みが足りなかったことは大きな問題だと思う。

藤森　最後の点だが、参加者個々のコミットの仕方によっての両者の橋渡しを考え、又それが意味があることだというように委員会では考えたが、安易さがあったかもしれないし、オリエンテーションも充分でなかった。

三浦　私もその辺り相当困って、両方しなければならないのかと思った。たしかに私達のYは問題を一方的にみないで、もっと広い所でみなければならないということを教えられた。個人的感想としては、分団よりむしろ先生のお話からある程度得られたことがあった。信仰ということは置き去りにされて学生であるということだけが強調されたように思う。それだったら普通の会とかわりはない。私達はキリスト者としてど

ます。それをなくさなければならないとしきりに言われます。地方から全国集会に出ると刺戟を受けるということはあるでしょうが、帰ってからそれをどう生かすかというと困ってしまう。それはどう考えていますか。その点からいうと、さっきの方法論はしっくりしてない。全国集会で成功したからといって、われもわれもとやったら困る。そこはそこでの方法を確立しなければならない。

浜　結局教会生活というものが生きてこなくてはならないと思う。

田中　僕は、最初出席した時にはこの次ならあそこはもう少しはっきりするのじゃないかと思って帰ってきた記憶があります。この点、実際人数の関係で二度、三度出られないのは残念だ。しかし、それにしても立教Yの関わっている問題、自分の問題と東山荘の間にかなり差がある。•立教Yのメンバーに常任委員として全国集会のことをいうとき、非常に困難がある。組織的問題はのぞいて、問題がどうつながってくるかということは時間も労力もかかることだ。しかも伝わらないということも起る。できるだけ、連盟で話し合うこと、また、聖研ゼミなんていう機会があるのですから、そういう機会をできるだけ活用することを考える必要がある。もっと組織的に配慮することの必要がある。今年の方法論は新しい試みであり、決意をもってやったわけだから、それだけ労力を今後もかけなければならないと思う。

宮本　学生の集会だからもっと情熱的であってもよいと思ったが、今年は大変静かだという感じがした。学生は大人になったんだと理解したのだが程度の問題かな。

藤森　一つには、学生のエナジーが啓発されていくプロセスは、アンチテーゼという形をとったときにきわめて強烈に出てくるということがいえる。そうでないとちょっと目立たない。ある人が「学生自体には本当のエナジーはなくて、外の状況によって落差が出きると発現するポテンシャル・エナジーのようなものがある。岸政府がへたなことをやると全学連がさわぐ」といっているが、僕は必ずしもそういったものではないと思う。やはり、エナジーはあると思う。しかし、ああいうところに結集されて出てくるにはアンティテーゼという形が一番強烈な印象を与える。

宮本　アンティテーゼというと対立的議論になるが、ディスカッションという今の方法は必ずしも対立ではない。

滝浦　今年そういう風であった原因の一つは、やはり方法論をはっきり出さなかったからだと云えないだろうか。何か少し妥協したきらいがあるが。

藤森　それから何時ものことながらこういう印象があった。学生は日常生活の中で極めて具体的な問題をもっているのだが、それがそのままの形で提出されないで抽象化、原理化された形ででる。全国的ということでそうなるのかも知れない。当然この二つの間にずれがあると思う。問題はそういう〃ずれ〃というか〃悩み〃が学生諸君の話合いの間でどう出てきているかということなんですが、どうもそういう悩みが稀薄のような印象がある。最後のリポートを聞ているとてもきれいなんですね。安易なインテグレイションを生みだしていくことになりかねない。そういう危険性が非常にある。

田中　去年のアンケートは非常によくて、一月にはそれをもとにして全国委員会をやったわけですけれど、その報告書があまりす

うことは、問題そのものに対して、男女の別を問わずまだそういうものが出てくる時期ではなかったのではないでしょうか。両方の誠意が生かされてくるのは、問題性そのものに対して双方が相当にかみあってきたときでないと具体的に出てこないのではないかと思います。

四竈　今年もはじめに分科会に「女子が大学で学ぶこと」というのがあって、後に取り消されたわけですが、たしかにその問題をやるには時期尚早ということが云えます。除かれた理由として他の分科会でそこの問題を一緒に取り扱うことにおいて男子はこう、女子はこう考えるということがにじみ出て、互いに相手のことを学ぶということに生かすというねらいがありましたが、それがどのくらい生きたでしょうか。

石井　少くともお互いに云っていることが考え方としてわからないということはなかったと思いますが。

全国集会と地方、単位学Y
――今後の課題――

浜　先程、宮本先生が懸念なさっていたことが具体的に出てくるわけですが、今度の方法はいろいろ問題がありますが、だからといってすぐ方向をかえるというようなものでもないと思います。かえって問題をついて進んでいきたいと僕自身は思います。僕もはっきりした見通しをもてませんが、今度のような方法論が効果的になるためには相当の期間、三、四年はかかると思います。期間というと一番困るのは、僕自身学生でなくなっているわけで、その問題に対してどれだけの新鮮味をもって接することができるかと考えると非常に疑問になります。しかし、そういうことはさておき、やはりその位の年月をかけてやっていかなくてはならない。

宮本　これだけで終っては何にもならないが、進めてゆくには重いですね。

藤森　学Yニュースに出た参加者の感想をみていると、運動組織の中で思考してゆく立場にいる人とそうでない人との間に差がはっきり出ていて、今後前者が物をいってくるという感じが強くしますね。

浜　この集会に出て、良い意味でショックを与えられたという場合、その人は単位Yにかえって、明確にされた問題点を追求していこうとするでしょう。しかし、それはあくまで出発点であって、安心しては甘いと思います。準備に当って考えることには、二度以上出たものにどれだけのものをわから与えたかと非常に疑問になる。とくにそれぞれの単位Yの中で、問題意識が低いといっては語へいがあるが、そういうYの人が集会に出て強烈な意識を与えられて帰る。帰ってしばらくはいきいきとファイトをもってその問題と取り組んでいる。その中には意味のある運動が展開されると思うけれど、それにはある程度限界がある。一人の人間が個人的に与えられた問題を受けとめる主体がどこかになければならない。問題が自分の中で展開されて、それが外に出されて何かに当ってまた戻ってくるという過程が繰り返されなければならない。そういう意味では責任の乏しい集会だったと僕自身自己反省するわけです。強いショックだけで、準備の責任は終ったとしてよいのだろうか。やはり問題は残るような気がします。

宮本　地方の学生や指導者は東京と――東京といっても夏季集会のことでしょうが――自分達の間に大きな〝ずれ〟があるといい

会の主であると同時に歴史の主である。イスラエルの預言者は神こそ全世界の主と云っている。このことはわかっているのだが実際問題になると駄目になる。これをどう転換、展開してゆくか難しいことであるが、それをやらないと日本の教会は駄目になる。エバンストンの世界教会会議でも、そういうことをしきりに云っており、信者もよく知っているのだが――。

鈴木　もしそうだとすれば「歴史を支配する主」ということが正しく説教されていないことになるのではないか。もし正しく説かれているのなら信徒は当然自覚するはずですね

藤森　では最後にその他何か気付いた点を。

渡辺　とも角全体的にみて非常によい充実したスケジュールだったが、それ丈に時間不足は否めない。あれだけの内容のものを消化するには矢張り今少し日数が必要だ。報告書作成、特に分科会の報告にあたっては何故この様な方法が用いられたか、という全体的な解説があった方が親切だと思う。

四竈　それは分科会報告の前にのせるつもりだ。何かにつけて全国委員、特に東京常任委員の労は大変だと思うが、それに関連してこの集会中で委員はどの程度個人としてパーティシペイト出来たろうか。

浜　準備が比較的整っていたので、今年は例年よりはパーティシペイト出来たのではないだろうか、ただ自分としては不充分だった。

石井　私の大学ではまだ学Yの組織化がなされていないので、東山荘には個人として参加した訳だが、それでよかったのだろうか。

藤森　学Yに属している者でも必ずしも単位Yを代表して出席しているのではなく、今年は特に問題意識をもっている学生が個人として参加するということも可能であった。そういう形において全体を集約出来るともみているわけだ。

石破　今度の問題は学Yに属していない大学のキリスト者学生の課題でもある。それ故参加した人達がそれぞれの大学で本当の核になればよいと思う。

宮本　今年は特に礼拝委員会が出来たのだがそれについては学生間でどうだったのだろうか。

田中　主体的に学生が集会の礼拝に責任を持ったのは良かったと思う、学Yの中で礼拝の問題が真剣に考えられねばならぬという意識は高まったといえるのではないか。

浜　自分の生活の中での礼拝の確立ということには、まだ大分距離がある様で今後こうした面での単位学Yへの影響にも注目して行きたいと思う、学Yにとっての大きな課題の一つでもある。

藤森　今度の方法論と礼拝との関係に話が行く時間がなくて残念だったが、実は深い意味連関を考えていた。今度の方法論は所謂、方法的・批判的・自由な認識への自己訓練等を内容としているのであったが、われわれが問題にする対象一切はわれわれが造りだすものでなくて神からそのまゝに受けとるものであって、学Yにおける礼拝とはこのようなことの表徴に他ならない。このような問いの形成の前提というか、すべてがそこから発し、そこに帰る最後の祈りと沈黙の場、それがあるから我々と我々の立場がなりたつという究極のもの、その前に謙遜にひざまづく、そういうことをはっきり追求したい。これが学Yでの礼拝確立の問題点だと思う。ではこの辺で、長時間ありがとうございました。

うすうと出来ていて、その後はリポートに頼りすぎる、あるいはリポートに振りまわされるという声を二、三聞いたことがある。

宮本　その問題は重要だと思う。多くの人が答えたのが真理だと思いやすいが、それが間違うことがあるんです。一人が見抜くこともある。だからアンケートだけで決定してしまうのは危険ですね。

浜　例えば我々のつくったワークブック、あれは相当疑問点をのこして書かれているのですが、案外スムーズに受けいれられてゆく。あとからこれじゃいけないのじゃないかと思わざるをえなかった。

宮本　ワークブックがよく出来ているのでそうなってしまう。そういう傾向は教会にもあってバルトのものなどある場合聖書のように受けいれてしまう。立派なものほど註釈をつける必要がある。足をさらわれないように。

田中　学Yは本来こうあるべきだという姿と現在ある姿との緊張関係でもっと大切にしなくてはいけないと思います。そのためには組織ということと同時に、問題意識を大切に培ってゆくということが大切、と思います、夏季学校に出た人は実際にいきいきとやりだすんですね。しかし、それはガリ版を切るというような献身的な形でしか出ていけない。個人個人の中では何かもっと訴えたい。報告したいという気持をもっていても形としてはそういう風にしか出ていけない。今後の課題だと思うんです。

宮本　いま田中君がいったことを、僕なりの言葉で云うと、本質主義と実存主義である。そのどちらに片寄ってもいけない。ただ抽象的な本質論では何にもならない。かといって、場当り的な実存の問題だけでもしようがない。その二つが内面的に結んでは割れてゆくというようにならなくてはいけない。そうすると、単位の取り方というようなことも決して卑俗な問題ではなくなる。

藤森　その二つが内面的に本来の形で切りむすぶのには、当人の教会生活の内実問題に帰りますね。

教会と信仰の生活

三浦　個人的なことになりますが、私の教会は学Yに対して、いわば反対なのです。市Yの延長のように学Yをみている。私はよく議論して、その認識を改めさそうとするのですが誤解はとても大きい。Yはキリストをたてまえとして何か別のことをたくらんでいるのではないかと見ているわけで、実にやりにくい。これをどうしてゆけばよいか。先ず、学Yのことをしっかり理解してゆかねばと思っているが。

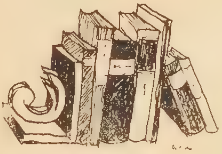
藤森　第九分科会でそういう問題は出ませんでしたか。

田中　そういう形では出なかったが、例えば学Yのものが自治会に出ていった時、それを支えられないというようなことが出ました。これが実は学Yと教会のつながりに問題があるのだというところまでは話が進まなかった。

藤森　そのつながりは、実際にはどういう形をとって展開されるのだろうか。

宮本　理論としてはいろいろ言われているが、どうしても抽象的なんだ。教会に集めるという方向、大学で一生懸命やられると方向が反対になる。手元に集めておかぬと安心できない。ここのところを考え直す必要がある。キリストを自分のところにだけ制限しておくのは間違いだ。キリストは教

ガラテヤ書を共に学んで



宮本武之助

聖書研究は「ガラテヤ人への手紙」をテキストに宮本武之助先生によって行われた。研究に先立ち先生は「聖書研究をお互いに始めようとしているが、ここでは自分の考えていることを聖書の言葉を用いて述べるのではなく最初に聖書の言葉に厳密に従って研究して行くという態度を貫きたい。決して聖書研究とは何か一冊の本を感銘深く読んだということに留るのではなく、最後にはキリストに出会った、と告白し得るように学びたい」と前置きして、次の様な研究題目にそって、三回の講義がなされた後、最後にその総まとめとしての証しがなされた。ここではその最後にされた証しを載せることにする。（編集委）

1 福音の真理（二・五—二・一四）
福音を正しくうけとめること
（一・六、一・一一、一二、二・二一）
律法の行いと信仰による義
（二・一五、一六、三、一〇—一四）
律法の意義（三・一九—二四）

2 キリストにある (In Christ) ということ
キリストの中に生命をもつ（二・一九、二〇）
価値の転換（五・六、ピリピ三・二—九）
人間の新しい創造
（六・一四、一五、IIコリント五・一七）

3 キリストにあってもつ自由（二・四）
デモーニッシュなものの奴隷
（四・三、四・八—一〇）
キリストによる解放（五・一）
愛することへの自由（五・一三—一五）
御霊による生活（五・一六—六・二）

福音の真理

私達は、この夏期集会において、ガラテヤ書によって福音の真理を告げられた。

ガラテヤ書の私達に告げる福音は、私達のために十字架に死んで、死者の中よりよみがえったイエス・キリストについての音信である。

そして本質的には、それに何物も加えられていない。

このイエス・キリストの出来事は、神が罪の中にある私達、神を無視している私達を、御自身に和らがしめるという御業である。罪の中にある私達が、神に和らがしめられ、神の前に義とされるには、イエス・キリストの出来事以外の何物をも必要としない。私達の行いの義は必要ではない。私達罪ある人間

書評

宮本武之助編「大学と人間」

岡本道雄

昭和廿四・五年から約十年間「大学におけるキリスト教的人間の形成」の問題を追求してこられた「大学問題研究委員会」が、その成果をはじめてまとまった形で示されたのがこの書物である。今回は主として宮本先生を中心とする人文科学分科会の分野に問題が限定されているが、従来から「学生キリスト者」等を通してこの委員会の活動に接し、その成果の全貌が一日も早く明らかにされることを望んでいたわれわれとしては、本書の出版を心から喜ぶと共に、長い間研究を続けられた委員の方々の努力に敬意を表したい。

本書の構成は、松川成夫、大須賀潔、小田島喜久、佐藤敏夫の各氏による四つの論文と、隅谷三喜男、鳴海元、大須賀潔の各氏を中心とする座談会の記録から成立っている。

一読して感じることは、何人もの人によって書かれた論文集であるけれども、共に学問研究を大学における本質的な問題として設定し、これを中軸としながら論旨が展開されているので、同一人によって書き下された書物の如く、系統的に理解することができる。特に第一から第三にいたる三つの論文は、互に異ったテーマを扱いながらも内的連関が密接であり、先の論文で示唆された問題が順次後の論文の中心問題として検討される形になっており、見事な構成と言い得るであろう。

例えば、第一論文「近代の大学の性格とその批判」で松川氏が、近代の大学における大学の「学問の統一的生命体」としての性格の喪失にふれ、その回復の方向として専門学者が各自探究方法の反省を通して主体的な問題へ進んで行くことを示唆したのに対し、大須賀氏の第二論文「キリスト教大学における学問」では、直接にはキリスト教大学の真の在り方を追求しながら、「キリスト教信仰によって与えられる実存的確信の内容を今日の経験合理的思惟を媒介として展開するところの哲学」（七三頁）を検討することにおいて、大学にあるキリスト者一般の主体的な問題への接近の一つの方向を示している。そしてこのことをより組織的に扱ったのが小田島氏の論文「学問と信仰との関係についての考察」である。ここでは、学問の主体の在り方を問うことを通して、あらゆる諸科学が哲学と「相補性的統一」の関係にあることを明らかにし、この様な学問の主体たる学問的実存と「神から神のために神において生きる」（一〇九頁）福音的実存との関わりをブルトマンを援用して論じるのである。

佐藤氏の第四論文「大学問題への一つの寄与」は十八世紀啓蒙主義以来の世俗化が、実はキリスト教信仰によって促進されたものであることを指摘し、今日、世俗文化とキリスト教信仰がどの様に結び合わされねばならないかを考察した興味深い論文であるが、先の諸論文に比して大学問題との関係が今一つ稀薄であると思われる。又座談会記録「大学における人間形成」も、一般教養の問題、基礎研究と技術の問題、旧制高校の問題、学問と信仰の問題、私立大学及びミッションスクールの問題等、重要な問題が幅広く論じられているが座談会形式の故に多くの問題が充分論じつくされていないようで残念である。

今日まとまった「大学論」も殆んどなく、大学の理念に混乱が見られるわが国の状況において、本書の意義は大きい。それは大学にあるキリスト者の主体的な生き方に指針をあたえるだけでなく、大学にあるキリスト者以外の人々も、本書から少なからぬ刺戟を受けるであろう。

（神戸女学院大学助教授）

（ＹＭＣＡ同盟出版部・定価二八〇円）

読んでいる間に、我々は、キリストのモンタージュ写真を獲得するのである』と語られたが、うまいことを言うなと、私は、その時心に留めた。たゞ問題は、キリストについての正確な知識を、絶えず聖書に戻ることによって獲得していくということは、キリストの愛に迫られるということと、直ちに結びつかないことである。キリストはこういう方であると、いくら正確に知って言ったとしても、そのことが直ちに、私がキリストの愛に迫られている、ということにはならない。

聖書の証しの言葉によって、又それに基く教会の宣教によって、『私の目の前に描き出されたキリスト』（ガラテヤ三ノ一）が、審判と、恵みをもって、私達に語りかけ、始めは全然問題でなかった、問題にしょうとしても、どうにもならなかった私達の心を、ゆり動かすものとなってくる。この時にはじめてキリストの愛に、迫られたのである。

ある人は「これはだれが、だれに宛てて出した手紙であるという風に客観的に研究している限りは、愛というものとは無関係である」というかも知れない。ところがそうではなしに聖書が、丁度、親展状のように、恰も国に居る母親が、私に送ってきた手紙のように、それを通して、本当に母親の愛が、私の心をゆり動かすように迫って来るのである。

始めは、わけの解らないようなものが、書いてある。この証しの言葉を通して、審きの言葉が、私達に語りかけて、私達の心をゆり動かすのである。この時に始めて、私達は、キリストの愛に迫られる。

この愛は、どのような心の人にも語りかけて、心のゆがみを正しくし、その傷をいやしながら、私達の全人格、私達の心をゆり動かすのである。たゞ頭とか、心とかを刺激するといったものではなくて、私という人間を、その根底からゆり動かして、キリストへの応答を引き起す力をもっている。キリストの愛は、その中に、いわゆるロゴスという、神の言葉の力を持っているのである。

このようにして、キリストの愛に答えて、この見えないキリストを愛するということが、ガラテヤ書の言って居るところの信仰である。「このようなことは、私自身にとって、他の人に、とって代ることの出来ない、私自身の信仰の問題である」とルッターは、しきりに言ったのである。

そこで私達は、聖書の証言と共に、神の御霊が、私達に働いて、私達をこのようにゆり動かしたのであると、告白せざるを得ないのである。

パウロは、このキリストの愛に迫られて、キリストと出会ったのである。そしてキリストを信じたのである。キリストに対して、応える愛を持ったのである。その時に「そのキリストにあって、神に生きる者」（ロマ六・一一）あるいは、自分の生命を「キリストと共に、神の中に持つ」（コロサイ三・三一）これまでのような考え方、生き方のできなくなった自分、新しく創造された自分というものを見いだしたのである。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」（コリント第二・五・一七）と告白したのである。

もしこの事が、真実に言い得るならば、実に偉大なことである。パウロにとって、このように、新しく造られることが、何よりも尊いことだったのである。

そこで彼は、ガラテヤの教会に、自ら筆をとって、大きな字で書いたと彼自身言っている。「割礼のあるなしは問題ではなく、たゞ新しく造られることこそ、重要なのである」（六ノ一五）パウロはキリストと出会い、キ

の、それ自身の行い、いわゆる功績と考えられる信仰すらも、必要ではないのである。

何故なら、そういったものを神との和らぎにおいて必要とするならば、私達が神に和らがしめられ、義とせられるために、イエス・キリストが十字架につけられたこと、そうして死人の中よりよみがえったことを、正しく受けとめないことであり、ガラテヤ書の言葉を用いるならば『イエス・キリストの死を無駄にすることになる』からである。

そこで私達に求められていることは、福音を正しく受けとめていくことであり『神に立てられて、私たちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたイエス・キリスト』(コリント第一・一―三〇）この〃イエス・キリストに在るもの〃となる、ということである。私達は、このような事柄を、しばしばお互に語り合ったのであるが、それを『キリストとの出会い、イエス・キリストへの信仰の問題』と呼びたいのである。

キリストとの出会い

ある人々は『キリストとの出会いは、一種のかけである。冒険であるからして、充分なたしかさが無くても、大胆にイエスを自らの救い主として受け入れる決心をなすべきである』と言う。たしかにキリストとの出会いの事柄について、私達の理性は充分な確実性を提供してはくれない。そこで、キリストとの出会いには、やはり決断とか、飛躍とかいうものが存する。見極めることの出来ないことに自分を投げかけていくということである。

しかしガラテヤ書の語っているところの信仰は、単にオウトノマスな自分の力によって自分の生活はやれるのだといったような、自律的な、人間の主観的な決断とは本質的に異なっているのである。『私はキリストと出会った』ということを、私達の方の、単なる主観的な、あるいは主体的な誠実さをよりどころにして『私はでたらめに、いいかげんに求めているのではない。これ程の命をかけて、誠実に求めているからキリストとの出会いというのは、本当である』とキリストとの出会いを、私が誠実にキリストとの出会いに打ちこんでいるから、真理であるとするならば、それは結局『信仰している自分を信仰している』という批判をまぬがれない。

ガラテヤ書のいう信仰は、超越的な面があり、私達の信仰によっては決定されないで、逆に、私達の信仰を何時も新しく決定していく、キリストの愛に捉えられるところに、たしかさを持っている。それならば、『キリストの愛は、どのようにして、現代の大学に、かく生きている私達に迫ってくるのであるか』『そこには、ある人々の一人よがりの主張、あるいは観念論、浮き上がった何か、そんなものが在るのではないか』『どうしてこのような、いろ〳〵の状況の中に生きている私達に、あの聖書が言っているキリストの愛が、迫ってくるのであろうか』こういう問題になる。

私達は、イエス・キリストの姿を、ある程度まで知っている。しかしながら、現在、この世に住んで居る私達は、キリストによって私達が知られているようには、キリストを知ってはいないのである。そこで私達は、常にくり返して、イエス・キリストについての、聖書的証言に、絶えず、くり返し立ち返って、キリストを知ることを求められている。そういう意味では、聖書を読んで、卒業するということは出来ない。カルヴィンの言葉を借りるならば、私達は一生涯、聖書の学徒なのである。

昨年、私が九州の地方連盟の、夏季学校に参加した時に、関西学院の城崎氏が『聖書を

いは、自由を与えるキリストによって、自由を主体的に、現実化されるように求められているのである。これがキリストにあって、自由を持つということである。

キリストにあって自由を持っているのであって、私達が、私自身においては、自由を持っているのではないということは、自由を与えるキリストによって、その自由を、何時も、私達自身のものとして、獲得するように、現実化して行くように、求められているということである。これは非常に重要である。

私達は、神を信じる自由を、自分自身においては、持っていないのであるが、イエス・キリストの出来事において、見えない神の和解の言葉を聞くのである。聖書の言葉を通してイエス・キリストの姿が、はっきりして来ると、罪ある私達と、和らがんとする神の言葉を聞くことができるのである。

私達は、種々の束縛の中にある。それは無くならない。依然として強い。神から我々を引き離す力は強いが、それにもかゝわらず、見えない神を愛するという信仰の決断と行動を、戦いとることを許されているのである。

そこには絶望はない。私達自身を見ると、絶望であるが、証しの言葉を通して、絶えずキリストの愛が、私に圧倒的に迫ってくる故に、この見えない神を愛するという信仰の決断と行動を、戦いとることを許されるのである。又、私達は他の人々を愛する自由を、自分自身においては持っていない。キリストの愛に、くり返し圧倒的に迫られて、はじめて、私達をがっしりと捉えているところの領域、又、私達の属している団体を捉えて居るところの、集合的なエゴイズムと戦い、今迄何のかゝわりもない、責任を持つ必要はないと考えて居た人々と、どこまでも共に生きる生活、言いかえると、この世で出会う現実に、責任を感じて生きるという自由を、戦いとることが許される。私達の足場は、戦いとる足場がないのではなくて、キリストにあってもつ自由こそ、その足場となるわけである。そうしてそれを、その愛を戦いとることが許されるのである。

私達は解放された自由を、得るように、キリストによって召されたのである。このような時代に生きている私達は、このキリスト・イエスから離れては、どうしても信仰と愛とへの自由を、持ちえないのである。それを現実化するところの地盤が、他には無いのである。又、それを意味付けるところのものも無いのである。

キリスト・イエスにあって、私達は、このキリスト・イエスにおいて持つ、自由を、主体的に現実化して行く課題を、負っている。これは賜物が、同時に課題であるという、昔から言われていることである。Gabe は Aufgabe になる。キリストにおいて持つ自由とは、賜物である。無条件的に与えられるものである。けれども、そういう愛が迫って来る時に、与えられるものは、この世に生きている私達にとって、それを土台にして本当にそういう自由を戦いとって、神を信じ、他を愛する者になるという命令である。

ただじっとして、そういう人間になるか、ならないかを考えているのではなく、それを戦いとる決意をして、実際に働き出す、そういう地盤を与えられる。これはキリストにあって、持つことが許されている自由があるからである。

対話の生活

すでにキリストは来り給うたのである。そのキリストは、私達に、神との和らぎを持たしめ給うた。そしてこのキリストは、その始め給うた御業を、必ず完成し給う。

リストを信ずる者になった。そういう人間になった時に、キリスト・イエスにあって持っている自由というものに、信仰の目を開かれると共に、この自由に基いて、生活することを求められたのである。

キリストにある自由

まずキリスト・イエスにあって持っている自由とは、罪の束縛からの自由である。私達はこの世に、又、大学に、日本の社会にあって、種々の歴史的・社会的条件におり――それを意識すると否とに拘わらず、神から引き離す力、それを罪の力と、言いたいのであるが――この罪の力に、私達は縛られて居る。

律法は、この私達を神から引き離す力から解放してはくれない。キリストの出来事と、御霊の働きとによって、神の審判と、恵みの言葉が、私達に語られる時に、はじめて、罪の支配からの解放が、生ずるのである。そうして今迄、予想もしなかった事が起る。この見えない神との間に、私と貴方という一体関係、神、私と共に生き給う、私の生に責任を負い給うという、神と共に生きる愛の関係を持つようになる。私達は、キリスト・イエスにあって、信ずるということの自由を許されるのである。キリスト・イエスにない限り、私達は信ずるという自由を持たない。

次に、キリスト・イエスにあってもつ自由とは、どうしてもお互に免れることのできないところの、あの自己中心、自分を何物の上にも高めようとする、誇りとか、傲慢、エゴイズムからの自由である。私達は、この世にあって、日本の大学にあって、他の人々と共に、お互に意見の違う、利害関係の違う、共に生きられないように見える人々との間にも、共に生きようとしている。共に喜び、共に苦しみを負って、お互に生きて行こうではないかとしている。

しかし悲しいかな、私達のそういう努力は、いずれもエゴイズム、個人的な利己主義、又、集合的な団体的な利己主義、階級的利己主義、そういったものの、枠から脱することは、依然として出来ないのである。このような私達が、キリストの愛に迫られる時に、始めて、他の人々そのものを愛しうるように、エゴイズムの束縛から解放されて、愛における隣人との関係、すなわち「貴方と私」の共に生きる愛の関係を持つ様になる。私達はキリスト・イエスにおいて、他を愛することの自由というものを、持っているのである。

これは実に甘い考えと言われるかも知れない。しかしこのような自由は、キリスト・イエスにあって持っているのであって、私達自身が持っているのではない。こういったような制限に、目を向ける必要がある

私達は、未だ「神の子達の栄光の自由」（ロマ八ノ二一）に入ってはいない。それを望んでいるものであって、そこに入ってはいないのである。このような自由は、現代のこの世にあって、生きている私達には、隠された現実であって、信ぜられる他はない。あるいは神の子達の栄光の自由は、望まれる他はないのである。

しかしながら、これは、キリスト・イエスにあって持っている自由が、私達の現実生活から、浮き上った観念や、理想といったものであるということではない。

私が生きているのは、私が生きているのではなく、キリストが生きている、キリストと共に生きる、という、いわゆる深い人格関係を持つことである。このように、キリストにあって私達が自由を持つということは、私達がキリストから、機械的な自由を持たしめられるということではない。

キリストによって自由を与えられる、ある

く受け止めること、これがユダヤ主義者と、パウロとの間の問題であったのである。

　イエス・キリストによって語りかけられるものを正しく聞くということ、神との間に、正しい対応関係を持つことによって、そのことに基づいて、他の人々との間に、今度は呼応関係をもつのである。隣人との間に、そういう呼応関係をもつ、これが人間であり、持てないのは人間ではない。どこかゆがんでいるのである。呼応関係という意味において、対話をなすのであって、社交上の対話ではない。人間として生きるという、本質的な事柄として、対話をするのである。そして、はじめてああ私は人間としての自由を持って、生きているのだということが解るのである。

　そういう意味で、私達の大学の生活は、ロゴス的性格を持ちたい。他に語りかける性格を持つものでありたい。又、私達の大学での生活というものは、大学以外の人々、社会や、すべての人々に対して、語りかけを持たなければならない。私達が、大学生活をしていることが、他にどんどん語りかけていくような、そういう性格を持つ、大学生活をしたいのである。

　勿論、学問そのものは、そういう具体的な事柄を、おおい隠すという面がある。波多野先生は、「学問をするということは、それ以外のすべてのものを忘れることである」とおっしゃっている。そういう点を、私は全然否定しない。私達が、今、こゝでいろいろな事情が起っていることを聞ける人間であるけれども、今はこれに集中するという、そういう学問の性格がある。けれどもすべての語りかけを聞けないような人間になってしまえば、これは人間ではない。そこには人間としての自由を持っていないのである。

　神に応答する故に隣人と真に対話して行くことのできる人間でありたい。

　ガラテヤ書を相共に学んで、私達は今一度「自由へと召されている」ことの意味を新しく覚えたい。



この神の業の永遠性を、人間の方の理解のために、時間的に割るならば、かつて来り給うたキリストであり、今いまし。現に、私達に、御霊において働きかけ給うキリストであり、そして将来、やがて来り給う神であるという、三つの表現がとられる。

御業というものは永遠的なものであって、いわゆる、まさに来り給うキリストによって完成されるという表現が、とられているのである。信仰と愛と望みということが、言われているわけである。来り給うたキリストを信じ、まさに来り給い、その御業を完成するキリストを信じる、信仰と望みという、その中間の時代に、我々は生きているのである。

イエス・キリストは、すべてのものの主であるということは、いくら研究しても出て来ない。キリストがすべてのものの主であるということは、教会、又は選ばれた者に、啓示されたのである。

教会に啓示されたということは、イエス・キリストが、教会だけの主であり、他のものには、そうでないということではない。教会の主であるのみではなしに、世界の主であり、歴史の主である。こゝでは選民の論理がある。ある人が召されて、そこに啓示されている奥義が示される、ということは、その人だけの救いという問題ではない。救済史を通して、その人を通して、すべての人が救われるのだと、いわれているのである。

キリストが、教会の主であるということは全世界の主、そのことによって、全世界の主であることが実現される、ということを意味しているのである。それは、何か法則的に、機械的に、この世界が、神によって支配されているということではないのである。そうではなくして、あのキリストの出来事が、教会に啓示されたという意味は、神の言葉によって、神の支配が行なわれるということを意味している。

神の言葉によって、神の全世界の支配というものが、本来的に行なわれている。神はその言葉である。イエス・キリストによって、ゆがんでいる私達の心をいやしながら、根底的に私の心を、私というもの全体を、ゆり動かす。たとえば私達に、主体的な決断と行動をなさしめて、「私は今、神の導きのもとに専心、勉強するのだ」ということを通して、神の支配がなされている。こういうことと、召命の生活というのが結びつくのである。

神の支配というものは、決して私達の自由を排除するものではない。「キリストによる自由といっても、何か別の束縛の中に、入れられるのではないか」という不安を表明した質問もあったが、神の支配は、神の言葉を通して行われる。私達のために、あの神の子が死に給うたという形で、我々の心をゆり動かす、その様な言葉の力をもって、支配がなされているということは、決して私達から自由を奪うということではなく、むしろ反って、私達の主体的な決断と行動を基礎づけるのである。

私達は、神の支配の下にあって、非人間化されたり、人間疎外をうけるのではないし、何か機械、道具、奴隷のようになってしまうのではない。むしろ、はじめてキリスト・イエスにあって生きること、これが人間なのだということがわかる。宗教には、いろいろな人間の健全なあり方があって、キリスト教は、その一つのあり方を示しているのだというのではなくして、こゝに始めて、人間として生きるのだということが言われている。

私達は、イエス・キリストの出来事、を通して神から語りかけられ、神との間に、対応関係をもつのである。神からの語りかけを正し

教会の生命と使命

The Life and Mission of the Church

季刊「学生キリスト者」の目的

1. 日本における学生キリスト教運動（S. C. M.）を強力に推進するために
   (1) 統一学生キリスト教運動を確立し
   (2) 各大学のキリスト者共同体を強化し
   (3) 学生の福音理解の深化を目指す
2. 大学における「教会の生命と使命」の具体的展開のために
3. 教会の更新と一致のために

編集後記

★クリスマスを間近かにひかえてやっと第八号をお届けする。本号は「学生として生きる」という特集号で全国学Y夏季学校カンファレンス合同集会を中心に編集をした。日本における統一ＳＣＭを強力に推進し、教会の更新と一致を目指すために本誌は具体的に教会において大学において更に深く広く読まれることが願いであるが、この号が学生諸君への滲透に資する所大であれば幸いである。たまたま学Y全国学生委員会の手で夏季学校報告書の計画が進められていたが、当初の本号の編集企画と相覆う所も多々あり二本建てになるよりも、と敢えてこのような形にふみ切った次第。ために講演の再録報告等学生諸君の主体的な参与があった。編集者としてその労を覚え感謝したい。

☆しかし本号がこのような特集形式をとったのは、学生指導者、教職者諸氏に、我国におけるＳＣＭの実質的な担い手であった学生ＹＭ・ＹＷＣＡの全貌なり実体を知悉して頂きたい願いを含んでいる。学生も指導者も一体となって統一ＳＣＭを進め、教会の常に新しくされるあり方をかちとって行くためには、まだまだ相互の理解と問題の分析洞察が厳しくなされねばならないであろう。

大方の御叱正、更には本誌を手がかりにしての活溌な論議を期待したい（四竈）

☆「学生として生きる」という語句を英訳しようとしてはたと困った。the Life, trying to be Christian as a student とあえて訳した。学生諸君がこの短い語句のなかにもりこうもとした内容と意図、考え方には担当に重要なものがある。「この現代という時代のなかで、言葉の真の意味において人はキリスト者でありうるのか。」「然り。信仰は個の主体的決断であるから。」「しからばその人は、この現代という時代に内在して、いかにその問題性をうけとめ、いかにしてキリスト者でありうるのか、になりうるのか。」こういう基本的課題が、あの語句に含まれている。

こういう課題は極めて巨大なものである。キリスト者であろうがなかろうが、現代のもつ巨大な問題性のもつ重みにたえかねて、人間たらんとする意志を放棄せざるをえない。学Yはこういう問題に本来的に取りくみ、それによって動いてゆくべく願いながらも、実際はおおよそこういったものとは無関係なことで動いてゆく。ここに学生キリスト者のもつ問題がある。その問題性を夏季学校の主題として限定したことに、その問題に苦む学生諸君のうめきとあせりをきく思いがする。

エッセンシャルに問題にとりくめないということにおいては、ＳＣＭも、教会も、一個の求道者も別ではない。現代のもつ本質問題にかかわることから逃げず、又、その問題のなかに逃げこむことをもなさずに、いかに問題に肉迫するか。ここで相当はっきりと見通しをもちうる方法を確立するための論議が必要ではなかろうか。又同時に方法論の立場のちがいが明らかにされるにつれてＳＣＭ内部でも、又ＳＣＭと教会関係でも今までと異った問題、誤解がおこるであろう。それ故にますます語りあいの場が必要である。「学生キリスト者」がそのための場を提供しえたら幸である。

☆本号はごらんの通り名実共に（？）増大号になりました。価格は従って本号に限り、一〇〇円となります。実質的には二号分ですからよろしく御了承下さい。次号は教会問題特集として従来のＬＭＣＣの研究成果を盛る予定です。御期待下さい。末筆ながら雑誌発行がおくれがちで申しわけありません。そうならぬよう努力しますから今回はお許し下さい。（藤森）

昭和三十六年十二月十日発行（毎年四回）第二巻 季刊「学生キリスト者」第八号 定価一〇〇円（本号に限り）一年二四〇円（送料別）

THE STUDENT CHRISTIAN

A quarterly magazine published by the Life and Mission of the Church Committee, at the Student Department, National Committee YMCAs of Japan. 2, 1 chôme, Nishi-Kanda, Tokyo
Hajime Fujimori, Editor

Volume 8. **1961**

The focus of this eighth issue is on "the life of the Student Christian." Reports of Summer Conferences.

編集発行者 藤 森 元　印刷者 三秀舎　発行所 日本YMCA同盟学生部内「教会の生命と使命」委員会　東京都千代田区西神田一の二　振替 東京 20196
電話 (291) 5201—4